

一十二月四日

湯山半次郎様

葛山雷成下山

長吉茅かり三行

市三郎宮原畑

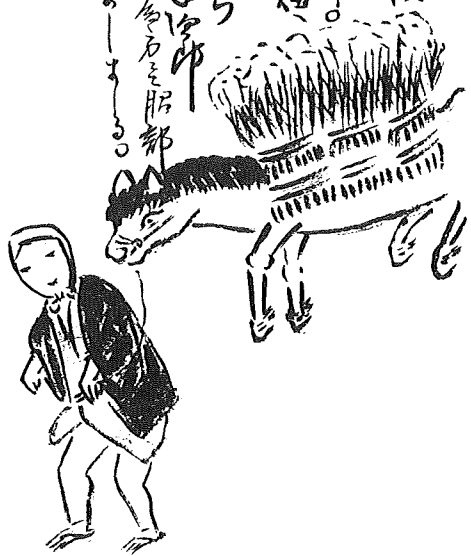
孝作や三行

おさたのさくら

木之はかく

石脇植松梅

幸藏殿トはなし



一十二月四日湯山半次郎様葛山雷成
下山へ長吉茅かり三行○市三郎宮
原畑へ孝作切三行○おさた○お
うら木之はかく○半次郎石脇植松梅
吉殿方にて服部幸藏殿トはなしす
る○

十二月五日

市三郎服部

幸藏殿上三島

一行三しまて酒

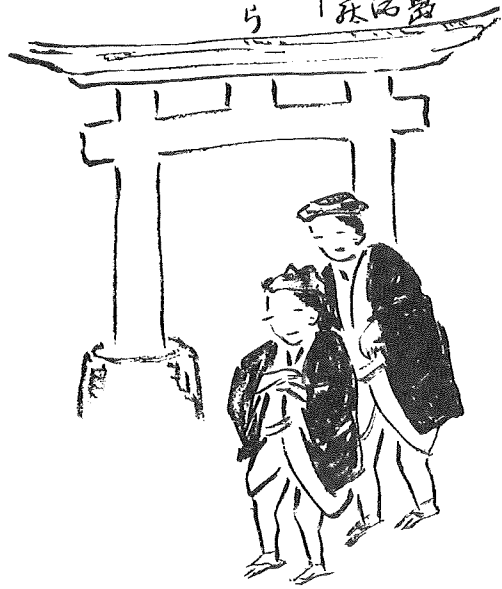
呑○長吉茅老

かる○市三郎

細ヶ者作切○

おさだ○おうら

木之はかく○



十二月五日半次郎服部幸藏殿上三

島へ行三しまにて酒呑○長吉茅老

駄かる○市三郎細ヶ者作切○おさ

だ○おうら木之はかく○

十二月六日深良土屋忠四郎様普請

普請ちう奈立大工湯川為吉殿。

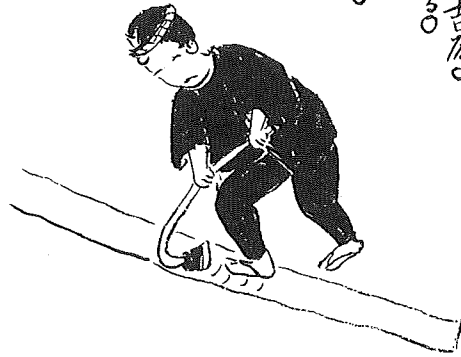
此日大工日○長吉茅老駄かる。

市三郎様作切。

半次郎土屋様へ行酒呑。

石脇大庭嘉吉隠居はなしにくる。

おさだ。おうら木ノはかく。



十二月六日深良土屋忠四郎様普請

(手茶屋) ちうな立大工湯川為吉殿○此日大

安日○長吉茅老駄かる○市三郎麥

作切○半次郎土屋様へ行酒呑○石

脇大庭嘉吉隠居はなしにくる○お

さだ○おうら木ノはかく○

一十二月七日市三郎
 深良土屋忠四郎
 普請ちきよう二市三郎
 行○長吉
 茅壺かる佐野下原万屋酒
 式升買。



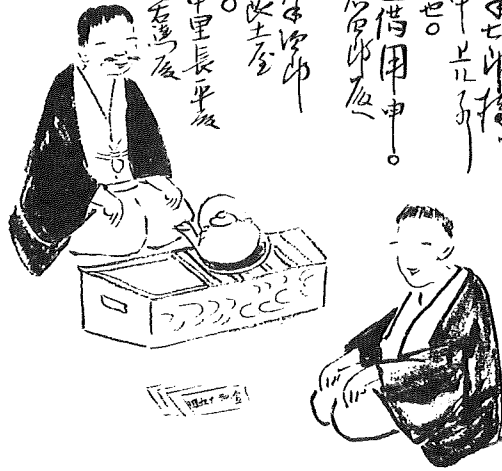
一十二月七日市三郎深良土屋忠四郎
 様普請ちきよう二市三郎行○長吉
 茅壺かる佐野下原万屋酒式升買
 ○

十二月八日
 旧十二月十五日也
 秋せく神二祭なり
 千福殿浅吉殿酒吞
 吞口紙漉伝右工門殿
 富士ヨリくる酒
 吞○石脇大庭嘉吉殿
 隠居はなしニくる
 ばかを申す大ばかもの
 申す大ばかもの



十二月八日旧十一月十五日也秋
 (節句)
 せく神二祭なり千福殿浅吉殿酒吞
 ○紙漉伝右工門殿富士ヨリくる酒
 吞○石脇大庭嘉吉殿隠居はなしニ
 くるばかを申す大ばかもの

一十二月九日湯山半七郎様へ
 金五円也借用申上ルなり此金一様ヨ
 以金一様ヨリ付たんとせ。
 三十一一年三月廿日迄借用申
 市三郎深良土屋忠四郎
 殿へ普請手間二行。
 長吉茅志駄か。半次郎
 中里法印伊東様深良土
 屋忠四郎殿地祭二たむ也。
 上ヶ田勝又喜市殿にて中里長平殿
 半次郎酒吞紙漉伝右衛門殿紙付富士ヨ
 紙付富士ヨリくる。



一十二月九日湯山半七郎様へ金式拾
 五円也借用申上ルなり此金一様ヨ
 リいた、く也○三十一一年三月廿日
 迄借用申○市三郎深良土屋忠四郎
 殿へ普請手間二行○長吉茅志駄か
 る○半次郎中里法印伊東様深良土
 屋忠四郎殿地祭二たノむ也○上ヶ
 田勝又喜市殿にて中里長平殿半次
 郎酒吞紙漉伝右衛門殿紙付富士ヨ
 リくる○

十二月十日おうら木之はかく○長
 吉茅壹駄かる○市三郎深良土屋忠
 四郎様へ普請地行○半次郎三頭銀
 行行二本松ヨリたねみすあふら買
 ○此日西風ふく○半次郎母此日夜
 あけ五時二



十二月十日おうら木之はかく○長
 吉茅壹駄かる○市三郎深良土屋忠
 四郎様へ普請地行○半次郎三頭銀
 行行二本松ヨリたねみすあふら買
 ○此日西風ふく○半次郎母此日夜
 あけ五時二

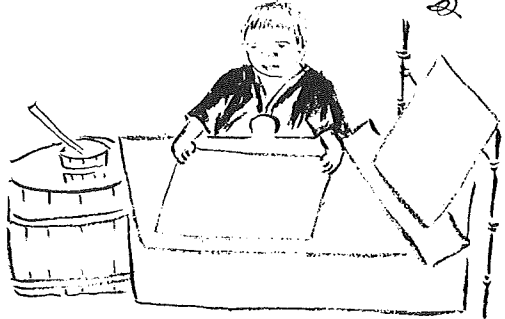
一 十二月十一日 普請

おさだ・おうら
大子引○長吉
善哉もる市三
郎深良土屋忠
四郎様へ普請
地行い



一 十二月十一日 半次郎おさだ○お
うら大子引○長吉茅壺駄かる○市三
郎深良土屋忠四郎様へ普請地行い
く○

十二月十二日湯山詮様藏米四斗式
 升入六俵納也。○紙漉佐野伝右衛門
 殿半紙七九番すきはじめるなり○
 長吉深良土屋忠四郎様へ茅付二行
 馬二三駄付ル○市三郎此日用休○



十二月十二日湯山詮様藏米四斗式
 升入六俵納也○紙漉佐野伝右衛門
 殿半紙七九番すきはじめるなり○
 長吉深良土屋忠四郎様へ茅付二行
 馬二三駄付ル○市三郎此日用休○

一十二月十三日家内物市三郎す、は

市三郎す、はさや。

半次郎三、満へ行六反田

田丁ヨリ初又三、六百目買

代金七圓七、義稱。葛山市

川安、務屋、妻、三、又、一、金

三、圓、渡、也。板、妻、人、二、く、し

柿、式、十、五、蓮、売、壺、蓮、付、六、錢、五、厘、長、吉

深、良、土、屋、忠、四、郎、様、へ、茅、付、二、行、○、市

三、郎、麦、作、切、○

市三郎す、はさや。



一十二月十三日家内物市三郎す、は

さ也○半次郎三し満へ行六反田丁

ヨリ新文三メ六百目買代金壱円貳

十錢払○葛山市川安藏殿妻二三ツ

又出し金壱円渡也○板妻人^{*}二くし

柿式十五蓮売壺蓮付六錢五厘長吉

深良土屋忠四郎様へ茅付二行○市

三郎麦作切○

*1 御殿場市板妻

十二月十四日湯山

七郎様へ蔵米四斗
 米入物俵は納也。
 長吉深良
 土屋忠四郎殿へ茅付二行。
 市三郎
 麦作切
 家内ぬい石脇大庭嘉吉殿
 妻おさくノ百ヶ日二行。



十二月十四日湯山半七郎様へ蔵米

四斗式升入式俵半納也○長吉深良
 土屋忠四郎殿へ茅付二行○市三郎
 麦作切○家内ぬい石脇大庭嘉吉殿
 妻おさくノ百ヶ日二行○

一 十二月十五日長吉茅壱駄かる。○此日馬つくろいある。○市三郎麦作切
 吉作切。○半次郎神山高橋下之見せ屋半紙
 下之見せ屋半紙。○紙付おむら女
 紙付ル。○市太郎麦作切。○湯山詮様
 半紙式メ売。○おさだち(乳)をはれる。○おうらなをとる。○上ヶ田土屋忠
 作様二ちり半紙代七十銭渡スなり。



一 十二月十五日長吉茅壱駄かる。○此日馬つくろいある。○市三郎麦作切
 ○半次郎神山高橋下之見せ屋半紙
 壱メ売。○円道原勝又善七殿半紙壱
 メ売。○土屋忠四郎様方にて板妻人
 トはなしする紙漉三郎平殿富士ヨ
 リくる。○沼久保彦十郎殿前夜宿此
 日二富士へ行。

一 十六日紙漉伝右衛門殿富士郡へ行
 ○長吉茅壱駄かる。○紙付おむら女
 紙付ル。○市太郎麦作切。○湯山詮様
 半紙式メ売。○おさだち(乳)をはれる
 ○おうらなをとる。○上ヶ田土屋忠
 作様二ちり半紙代七十銭渡スなり

*1 御殿場市神山
 *2 富士宮市沼久保。

十二月十七日
三島

大社向、無汗
長吉茅沓駄
かぶる市三郎
まき作切の紙沓
水名作切の紙沓
三郎平殿紙漉はじめ

十一日 平次郎大子付ル
日跡金ヨリ物後儀當。

長吉茅沓駄から市三郎
まき作切の沓さだ、作りこも
はらうみで日休。

信右衛門漉紙をいひ。

新巻の木金ヨリ糶を斗三升買
信右衛門の紙沓を金金ヨリ
はら日休の



十二月十七日半次郎三島大社西ノ

祭二行長吉茅沓駄かる○市三郎麦
作切○惣ヶ原水久保屋半紙沓ノ売

○三郎平殿紙漉はじめ○

一十八日半次郎大子付ル日野屋ヨリ

塩式儀買○長吉茅沓駄かる○市三

郎麦作切○おさだち、をはらすう

みでる此日休○伝右衛門漉紙沓メ

切○新宿真木屋ヨリ糶沓斗三升買

勝又佐十郎殿二金沓円廿五日迄か

しるなり○

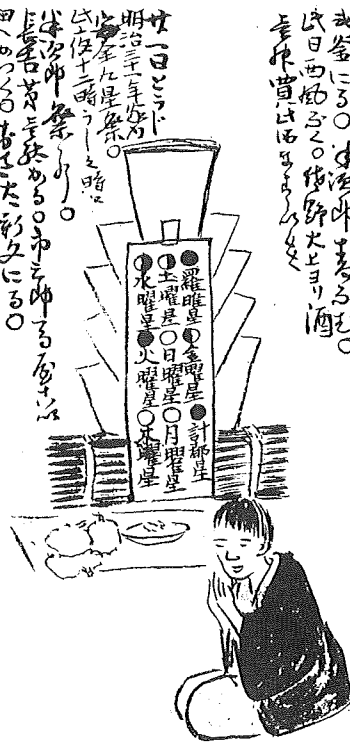
塩三升五合 四升五合 五升五合

一十二月十九日おさだ。
 おうら味噌つと。石脇
 立長太郎ぬまつヨリ塩壺
 買。此日用休長吉千福ニ
 焼木
 馬にてとり二行。
 半次郎麦ふむ。



一十二月十九日おさだ○おうら味噌
 つき○石脇彦太郎ぬまつヨリ塩壺
 儀買○此日用休長吉千福ニ焼木
 馬にてとり二行○半次郎麦ふむ○

十二月廿日長吉茅壺祭かる○市三郎麦作切のおさた紙草式釜にる○半次郎麦ふむ○此日西風ふく○佐野大上ヨリ酒壺升買此酒ますい



廿一日トシト
明治三十二年
明治三十二年
半次郎麦作切のおさた紙草式釜にる○半次郎麦ふむ○此日西風ふく○佐野大上ヨリ酒壺升買此酒ますい

十二月廿日長吉茅壺祭かる○市三郎麦作切○おさた紙草式釜にる○半次郎麦ふむ○此日西風ふく○佐野大上ヨリ酒壺升買此酒ますい
廿一日とうじ明治三十一年家内安全九星祭○此夜十二時うし之時二半次郎祭なり○長吉茅壺祭かる○市三郎馬屋こい田へかつく○おさた新文にる○半次郎半紙三メ切○半次郎しろかハ百枚はぐ○

- 羅睺星
- 金曜星
- 計都星
- 土曜星
- 日曜星
- 月曜星
- 水曜星
- 火曜星
- 木曜星

*1 佐野の酒屋。
*2 陰陽道で九つの星に生年を当てて吉凶を占う星祭り。
*3 紙の原料の生木を蒸して剥いた外皮。

一十二月廿二日半次郎

深良土屋忠四郎様

普請地行柱石納つき

申す所

市三郎馬屋こい田へかつ

田へかつ

長吉茅老駄かる

廿三日半次郎三島へ

行品々買物外

二新文式メ百目買

市三郎上之原

ヨリ焼木上ケ田馬

にて付ル

〇おう

ら木之はかく

〇長吉茅老駄かる

〇日野屋ヨリ酒拾五

銭買

〇下土狩室

伏様へ半紙百丈売



一十二月廿二日半次郎深良土屋忠四

郎様之普請地行柱石納つきニすへ

るなり〇市三郎馬屋こい田へかつ

ぐ〇長吉茅老駄かる

一廿三日半次郎三島へ行品々買物外

二新文式メ百目買〇市三郎上之原

ヨリ焼木上ケ田馬にて付ル〇おう

ら木之はかく〇長吉茅老駄かる〇

日野屋ヨリ酒拾五銭買〇下土狩室

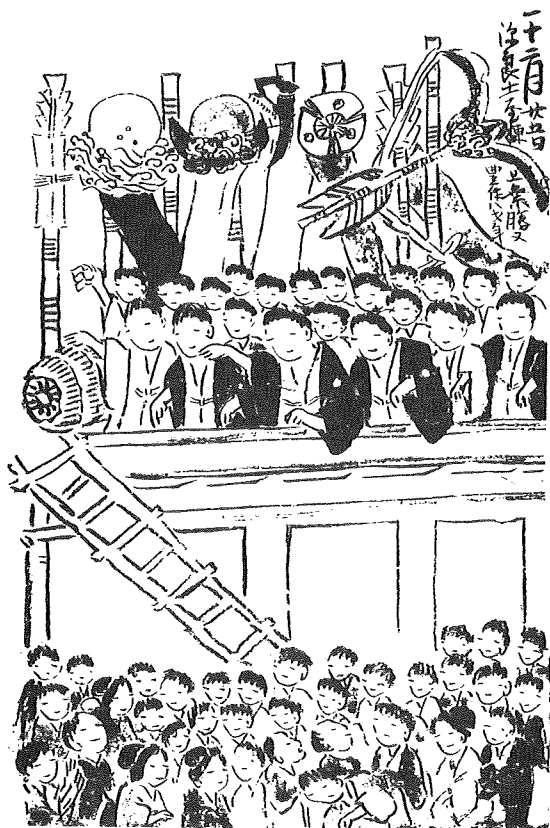
伏様へ半紙百丈売〇

*1 柱の土白石を胸突きすること。

一十二月廿四日
 深良土屋忠四郎様普
 請立まいニ半次郎行○棟湯川為吉
 殿○長吉茅耆駄かる○市三郎葛山
 へ焼木杉之は三駄かた二とる○お
 さら深良めし焼二行○半次郎半紙
 式ノ切○



一十二月廿四日深良土屋忠四郎様普
 請立まいニ半次郎行○棟湯川為吉
 殿○長吉茅耆駄かる○市三郎葛山
 へ焼木杉之は三駄かた二とる○お
 さら深良めし焼二行○半次郎半紙
 式ノ切○



十二月廿五日深良土屋棟上祭勝又
豊作八才年

十二月廿六日深良土屋忠四郎様普請へ半次郎行○長吉茅沓駄かる○馬屋こいだし○

廿七日忠四郎様普請へ半次郎行○長吉茅沓駄かる○おさた紙草式釜なる市三郎葛山ヨリ焼木杉は四駄とる○

廿八日半次郎忠四郎様家手間二行○市三郎宮原畑こいかつぐ○長吉茅沓駄かる○おさた豊作普請行○

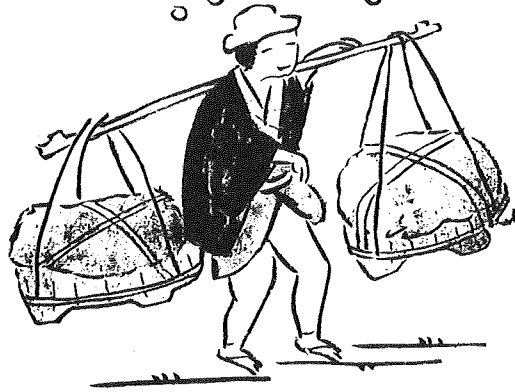


一十二月廿六日深良土屋忠四郎様普請へ半次郎行○長吉茅沓駄かる○馬屋こいだし○

一廿七日忠四郎様普請へ半次郎行○長吉茅沓駄かる○おさた紙草式釜なる市三郎葛山ヨリ焼木杉は四駄とる○

一廿八日半次郎忠四郎様家手間二行○市三郎宮原畑こいかつぐ○長吉茅沓駄かる○おさた豊作普請行○

十二月廿九日深良村
 土屋忠四郎様普請
 市三郎御祝儀申上ル
 半次郎御普請おさた行。
 長吉茅壺飲あり。
 忠四郎様普請せり人
 勝又文平君。持又
 金四郎君。勝又半四郎君。
 今里下和田酒吞なり。

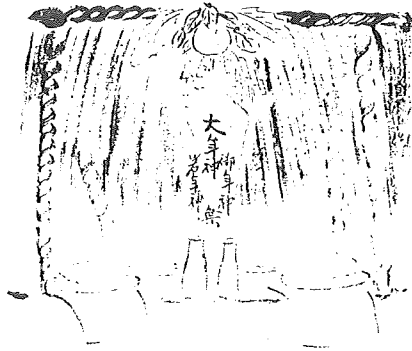


十二月廿九日深良村土屋忠四郎様
 へ普請ニ市三郎御祝儀申上ル半次
 郎普請おさた行○長吉茅壺飲かる
 ○忠四郎様普請せり人勝又文平君
 ○勝又金四郎君○勝又半四郎君○
 今里下和田酒吞なり○

明治三十三年一月元日

明治三十三年一月元日

(一九〇〇年一月一日から七月三十一日まで)



一月一日豊作村社まいる年しに行
 湯山半七郎様半次郎年し申上ル
 中川為三郎君○勝又清太郎君○葛
 山荻田君○勝又元吉君○湯山新座
 敷二酒いた、く



一月一日豊作村社まいる年しに行
 ○湯山半七郎様半次郎年し申上ル
 中川為三郎君○勝又清太郎君○葛
 山荻田君○勝又元吉君○湯山新座
 敷二酒いた、く

御年神

大年神 祭

若年神



一月二日兼吉馬のべよし
 湯戸ノはじめよし
 半次郎初商
 だぬいそめよし
 半紙百丈売
 惣ケ原渡邊三郎様へ半紙百丈売
 木富様ニて尺半紙壹ノ買和泉屋
 三井屋品々買物
 半次郎三島大社へまいるなり
 平松服部彦太郎殿○年し申上ル酒いたく

一月二日兼吉馬のべよし○蔵びら
 きよし○湯戸ノはじめよし○おさ
 だぬいそめよし○半次郎初商□
 はじめよ佐野若松屋半紙百丈売○
 惣ケ原渡邊三郎様へ半紙百丈売
 木富様^{*3}ニて尺半紙壹ノ買和泉屋^{*4}
 ニて品々買物○三井屋品々買物○
 半次郎三島大社へまいるなり○平
 松服部彦太郎殿○年し申上ル酒い
 たく○

- *1 年の初めの湯殿開き。入浴始めのこと。
- *2 駿東郡長泉町上土狩。
- *3 旧三島町久保町の紙商「木屋」。
- *4 旧三島町市ヶ原町の小間物屋。



一月三日初子日大黒天祭。
 石脇植松辰次郎君年し申上ル。
 大庭与三郎大庭常吉君年しにくる。
 仙年寺様年しにくる。○此日雲ルさむ
 は日雲ルさむ。

一月三日初子日大黒天祭○半次郎
 石脇植松辰次郎君年し申上ル○大
 庭与三郎大庭常吉君年しにくる仙
 年寺様年しにくる○此日雲ルさむ

一月四日半次郎豊作初山二行。
 兼吉若木老駄かる。○おさた紙を付る。
 ○紙漉安次殿頭病にて休。○勝又国
 三郎君長男正平七ツ祝儀半次郎妻
 ぬい手間二行。○半次郎御酒いた、
 半次郎御酒以下。○



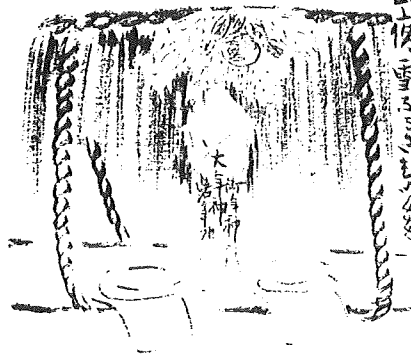
一月四日半次郎豊作初山二行。○兼
 吉若木老駄かる。○おさた紙を付る
 ○紙漉安次殿頭病にて休。○勝又国
 三郎君長男正平七ツ祝儀半次郎妻
 ぬい手間二行。○半次郎御酒いた、
 〇



一月五日勝又国三郎君祝儀はち払い二行。おさた紙付る。国三郎君長男村社八幡神社行。

一月五日勝又国三郎君祝儀はち払い二行。おさた紙付る。国三郎君長男村社八幡神社行。

*1 長男七平の七つの祝いにハチハライ神楽で厄払いをする。



一月六日豊作おあさ七々草た、く
なり○半次郎半紙五メ切○おうら
用紙焼此を付○おさた紙を付ル○
兼吉茅き式駄かる○半次郎痛氣ニ
て休○此夜二雪ふるさむい



一月六日豊作おあさ七々草た、く

なり○半次郎半紙五メ切○おうら

用紙焼此を付○おさた紙を付ル○

兼吉茅き式駄かる○半次郎痛氣ニ

て休○此夜二雪ふるさむい

御年神

大年神

若年神



一月七日前夜大雪ふる凡八寸ふ
 とも高足にてあすび
 石次郎石脇大庭常吉君嘉吉君へ年
 しに行○おさた大庭与三郎殿へ七
 ツノ祝儀き物上ル事○兼吉休○半
 次郎疝氣にてこしヨリあしいたむ
 ○

一月七日前夜二大雪ふる凡八寸ふ
 るなり○ことも高足^{*1}にてあすび○
 半次郎石脇大庭常吉君嘉吉君へ年
 しに行○おさた大庭与三郎殿へ七
 ツノ祝儀き物上ル事○兼吉休○半
 次郎疝氣にてこしヨリあしいたむ
 ○

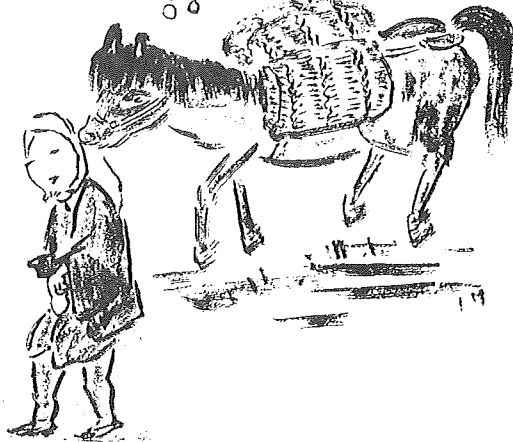
*1 竹馬のこと。

一月八日旧十二月八日なく子
 めひとつ子そうつれて行なり
 勝又市太郎様年しニ行兼吉休
 兼吉休○上ケ田おけい三
 内物三ツ又はく○福本文三郎此夜宿○



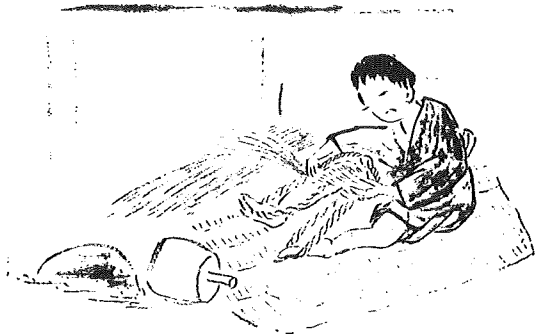
一月八日旧十二月八日なく子めひ
 とつ子そうつれて行なり○半次郎
 勝又市太郎様年しニ行兼吉休○家
 内物三ツ又はく○上ケ田おけい三
 ツ又はく○福本文三郎此夜宿○

一 一月九日半次郎兼吉三島町へ行荒
 己島町へ行 荒物屋ヨリ新文
 紙代金三円拾壹錢一厘弘○宮倉
 町狩野屋かきは¹三俵買代金壹円
 拾四錢弘○荒物屋半式百丈買○新
 宿紺屋小納戸糸染○きぬ糸あいね
²す十四文目染ちん式拾六錢六厘此
 糸石脇おくら糸也○兼吉こいを五
 ケかける○千貫とよ戸古場にて半
 次郎頭かりこみするなり○千貫と
 よ茶屋橋本屋にて御酒いたたく○
 半次郎頭かりこみするなり○千貫と
 よ茶屋橋本屋にて御酒いたたく○



一 一月九日半次郎兼吉三島町へ行荒
 物屋ヨリ新文紙九貫八百八十目買
 此代金三円拾壹錢一厘弘○宮倉
 町狩野屋かきは¹三俵買代金壹円
 拾四錢弘○荒物屋半式百丈買○新
 宿紺屋小納戸糸染○きぬ糸あいね
²す十四文目染ちん式拾六錢六厘此
 糸石脇おくら糸也○兼吉こいを五
 ケかける○千貫とよ戸古場にて半
 次郎頭かりこみするなり○千貫と
 よ茶屋橋本屋にて御酒いたたく○

- * 1 紙の原料を煮るときに灰を入れる。
- * 2 駿東郡清水町新宿の紺屋の屋号か。
- * 3 藍鼠色。
- * 4 清水町新宿と三島市加屋町の境付近(千貫樋)の床屋。



一月十日金比羅神社祭○兼吉馬くつ^{*1}をかき○家内ぬい紙草をこく○此日北雨霰ふるさむ^{*2}~~~~~
 ○半次郎石脇栄橋湯入り○葛山岩佐徳藏君大庭与左衛門君酒吞○大庭嘉吉殿はなしある○大庭与三郎殿にて酒吞○

植松氏
 火之用心

*1 馬の草鞋。
 *2 明治三〇年三月二日に同じか。

二月十一日初社会
 富岡村大字
 御宿三拾三年惣代湯山順作君使半
 次郎下男兼吉馬ノはやを縄をない
 十巻時ヨリ田麦作切〇おうら紙草
 をにる〇家内ぬい紙草こく〇おさ
 た紙付ル〇半次郎疝氣病にてこし
 いたむなり〇



一月十一日初社会ある富岡村大字
 御宿三拾三年惣代湯山順作君使半
 次郎下男兼吉馬ノはやを縄をない
 十巻時ヨリ田麦作切〇おうら紙草
 をにる〇家内ぬい紙草こく〇おさ
 た紙付ル〇半次郎疝氣病にてこし
 いたむなり〇

一月十二日 半次郎母

兼師さまと祭事奉仕の御供え

兼吉十一時迄こいをかける。

田まき作初つり。

おうら紙草を焼。

半次郎三島町へ

本庄へ紙三丈売。

萩ヶ久保橋ヨリ東見せ屋尺半紙五

十丈売。

おさた紙を付ル佐野三井

屋ニて一ツ味一枚買事。

半次郎風



一月十二日 半次郎母 兼師さまを祭

南無阿弥陀仏

兼吉十一時迄こいをかける

田まき作初つり

おうら紙草を焼

半次郎三島町へ行木屋半紙三百丈売

萩ヶ久保橋ヨリ東見せ屋尺半紙五

十丈売

おさた紙を付ル佐野三井

屋ニて一ツ味一枚買事

半次郎風

病ニてせきでる

*1 お七夜の祝いに贈る一つ身の着物。

二月十三日兼吉茅木式駄かる。半
 次郎豊作下和田根上新作殿長女七
 やに行。此夜宿なり。おさた紙を
 つける。おうら用紙つくなり。此
 夜二餅搗。



一月十三日兼吉茅木式駄かる。半
 次郎豊作下和田根上新作殿長女七
 やに行。此夜宿なり。おさた紙を
 つける。おうら用紙つくなり。此
 夜二餅搗。

二月十日 兼吉
 茅木武駄 紙をつける ○ 半次郎 豊作 下和田ヨリくる ○
 十壺時ヨリ 西風ふく



一月十四日 兼吉 茅木武駄 かる ○ お
 さた紙をつける ○ 半次郎 豊作 下和
 田ヨリくる ○ おうら おあさたんこ
 やきに行さいとを焼 半次郎 狐塚 畑
 麦ふみに行 ○ 十壺時ヨリ 西風ふく
 さむ

*1 一月一四日の小正月に行われる
 道祖神祭りでの火祭り。



一月十五日柿木赤（赤）を
 街かへりてしるりの
 勝又市太郎様長男祝儀二半
 社儀に手問行なり
 うらりちるりての
 兼吉勝又國太郎殿
 村社八幡神社そうち二
 行（行）におさた冬（冬）といに付紙（紙）をつけ
 ぬ（ぬ）さむ（さむ）く（く）く（く）く（く）
 西風（西風）ふく（ふく）

一月十五日柿木赤（赤）を上ル
 なり○勝又市太郎様長男祝儀二半
 次郎行おうら手問行なり○兼吉勝
 又國太郎殿村社八幡神社そうち二
 行○おさた冬（冬）といに付紙（紙）をつけ
 ぬ○さむくくくく ○西風
 ふく○

*1 冬の寒さが厳しいので。

一月十五日勝又市太郎様
 祝儀も拂に半次郎
 上吉勝又大吉。掃又
 佐十郎酒吞佐野古屋
 さま酒吞なり酒上ル
 石脇植松彦太郎殿
 殿年しにくるなり酒上ル
 兼吉茅木老駄とる
 半紙式メ切
 おうら勝又市太郎様
 手間に行
 半次郎風病二疝
 氣病二いたい



一月十六日勝又市太郎様祝儀はち
 払に行半次郎上ケ田勝又大吉君
 勝又佐十郎君酒吞佐野古屋おそう
 さま酒吞なり酒上ル
 石脇植松彦太郎殿
 殿年しにくるなり酒上ル
 兼吉茅木老駄とる
 半紙式メ切
 おうら勝又市太郎様
 手間に行
 半次郎風病二疝
 氣病二いたい



一 一 月 十 七 日 豊 作 山 神 社 へ 行 兼 吉 十
 一 時 迄 宮 原 畑 へ こ い を かけ ○ 茅 木
 壹 駄 かる ○ 半 次 郎 木 之 子 き を さ ぎ る
 ○ 柿 木 根 竹 根 二 こ い を つ く ○ 元 箱
 根 村 廣 吉 君 山 神 さ ま へ 行 此 夜 岩 せ
 重 吉 殿 へ 宿 ○ お う ら 用 紙 付 ○ お さ
 た 紙 付 ル ○ 家 内 ぬ い 千 福 へ 行 ○
 以上 便 岩 せ 言 事 及 へ 初 日 寄 ら せ
 用 紙 付 ○ お さ た 紙 付 ル ○
 家 内 ぬ い 千 福 へ 行 ○



一 一 月 十 七 日 豊 作 山 神 社 へ 行 兼 吉 十
 一 時 迄 宮 原 畑 へ こ い を かけ ○ 茅 木
 壹 駄 かる ○ 半 次 郎 木 之 子 き を さ ぎ る
 ○ 柿 木 根 竹 根 二 こ い を つ く ○ 元 箱
 根 村 廣 吉 君 山 神 さ ま へ 行 此 夜 岩 せ
 重 吉 殿 へ 宿 ○ お う ら 用 紙 付 ○ お さ
 た 紙 付 ル ○ 家 内 ぬ い 千 福 へ 行 ○

* 1 御 宿 の 坂 上 区 ・ 入 谷 区 の 氏 神 。
 * 2 木 の 根 元 の こと

一月十八日前夜
 半次郎鼠二み
 をくわれちでるなり紙四ノ切
 吉茅木式駄かる
 ○おさた紙を付ル
 ○おうら紙草をにる
 ○切久保由蔵
 殿半紙五丈売
 ○半次郎上之原山木
 を切二行
 ○上ケ田勝又喜市殿くる
 日野屋ヨリ酒十五銭買
 ○



一月十八日前夜二半次郎鼠二み、
 をくわれちでるなり紙四ノ切○兼
 吉茅木式駄かる○おさた紙を付ル
 ○おうら紙草をにる○切久保由蔵
 殿半紙五丈売○半次郎上之原山木
 を切二行○上ケ田勝又喜市殿くる
 日野屋ヨリ酒十五銭買○

以上保三研ミ蕎麦入
 鼠とるノ事○
 此ノ夜ハさむ
 鼠ふち猫ニくれる○
 此ノ夜ハさむ○



此夜ニ研ニテ蕎麦入鼠とる事○此
 鼠ふち猫ニくれる○此ノ夜ハさむ
 ○

*1 蕎麦でおびき寄せ研で鼠を捕る。

二月十九日おうら

ぬ須山村紙賣行

かうり来上は依付てくる

兼吉茅木式敷ある

吉田郎吉君をま

るに箱根松

廣吉吉三

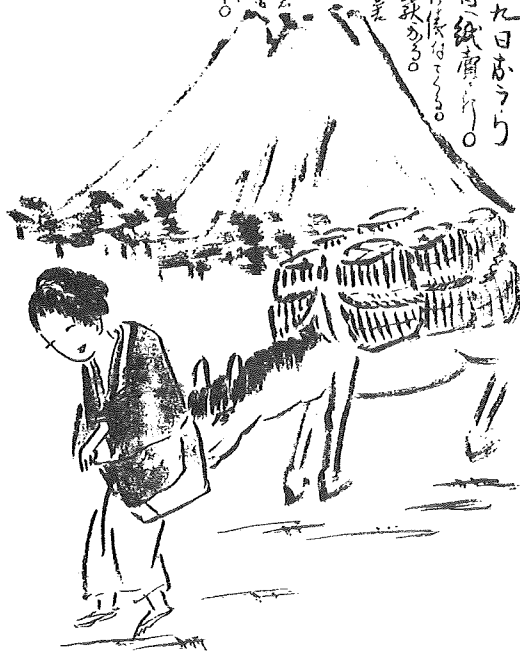
金沢小野吉三

ヨリ水風呂木

在田良吉殿車

林三郎三郎

半紙式ノ切



一月十九日おうらぬい須山村へ紙

売二行○おうら炭六俵付てくる○

兼吉茅木式敷かる○半次郎岩せ重

吉君二て箱根杉山廣吉君二あい二

行○金沢小野高一君ヨリ水風呂木

馬受取本田良吉殿車駄ちん三錢払

○半紙式ノ切○

*1 水から沸かす普通の風呂桶。

*2 山から木材を積んで搬出するそりのこと。



一月二十日兼吉八日分此日二茅木
 とり二行〇家内ぬい須山村ヨリく
 る〇半次郎疝氣病石脇植松あんま
 二針をうつなり〇紙漉安次殿休
 おさた紙を付ル〇半次郎石脇植松彦
 太郎殿年し行〇佐野久保庄三郎様
 ヨリ酒壺升買〇

*1 佐野の八幡神社付近にあった酒屋。

一二月廿一日霰雨ふるさむむ々々
 栄橋植松伯父様ヨリ湯入り薬
 いたくは茶湯入るなり相済
 人も湯入す。○
 兼吉さんくろめ
 半紙郎は紙巻やね。
 さむいは酒呑
 なる。○



一二月二十一日霰雨ふるさむ々々
 〇栄橋植松伯父様ヨリ湯入
 ル薬いたく此薬湯入家内物隣人
 も湯入事〇兼吉馬くつかき半次郎
 半紙式切〇さむい付半次郎酒呑
 なり〇

二月廿二日兼吉十壺時迄

上原山より金伏小野より一尺ヨリ
 水俣呂木金を因三十五年迄あり。
 中川助太郎が子孫代部同中野は。
 保土沢あつやと三十五種代を因
 三十五年迄あり。○は夜にあつや
 中野より三十五種代にんしんを
 湯立ル家内物隣物入湯するなり○
 日野屋ヨリ酒十銭買○永塚御母さ
 まヨリいざろ三ツ買○此日雲ルさ
 び日雲ルさ



一月二十二日兼吉十壺時迄こいか
 つぐ○茅木壺駄かる○上之原山ヨ
 リ金沢小野高一君ヨリ水風呂木金
 壺円三十五銭渡なり○中川助次郎
 殿二半紙代貳円五十銭渡○保土沢
 おつやさま二蚕種代壹円三十銭渡
 スなり○此夜二おつやさまとまる
 ○半次郎にんしんをほる○此日薬
 湯立ル家内物隣物入湯するなり○
 日野屋ヨリ酒十銭買○永塚御母さ
 まヨリいざろ三ツ買○此日雲ルさ
 む

*1 竹製の筈。

二月廿三日

茅木を駄
から二ト目ニ雨にかげし。

半次郎三又扣。

ぬいぬいめしを焼。

かうり御草にぬ。

あさひぬ御草にぬ。

佐野植松竹次郎様酒壺升買。

保土

沢御母様金沢へ行。



一月二十三日兼吉茅木壺駄かる二

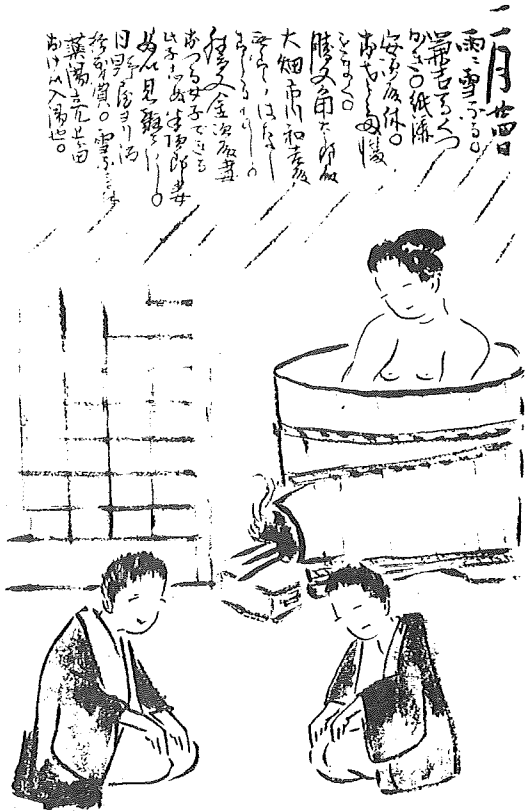
八目二雨ニてかいる○半次郎三ツ

又切○家内ぬいめしを焼○おうら

紙草にぬ○おさた雨ニて紙かひぬ

佐野植松竹次郎様酒壺升買○保土

沢御母様金沢へ行○



二月廿四日
 雨ニ雪ふる
 兼吉馬
 かつかき
 紙漉安次殿休
 おさた
 幡をまく
 勝又角太郎殿大畑市川
 和吉殿無尽ノはなしするなり
 勝
 又金次殿妻おつる女子できる此子
 しぬ半次郎妻ぬい見舞二行
 日野
 屋ヨリ酒拾銭買
 雪ふる二付休
 薬湯立ル上ケ田おけい入湯也

一月二十四日雨ニ雪ふる○兼吉馬
 くつかき○紙漉安次殿休○おさた
 幡をまく*1○勝又角太郎殿大畑市川
 和吉殿無尽ノはなしするなり○勝
 又金次殿妻おつる女子できる此子
 しぬ半次郎妻ぬい見舞二行○日野
 屋ヨリ酒拾銭買○雪ふる二付休○
 薬湯立ル上ケ田おけい入湯也○

*1 管によこ糸を巻く。

一月廿五日家内ぬい須山村紙売



須山村紙賣りみちちりも
 前夜二雪土にはなごらむ
 兼吉馬屋こいをだし
 紙をだした雪にて紙が
 つからぬ
 大森勝次郎君へ半次郎年し申上ル御酒いたたく事
 薬湯立ル家内物入湯す
 〇須山土屋喜十郎様へにんじん
 二大子上ル

一月二十五日家内ぬい須山村紙売

二行おうら馬方^{*1}〇前夜二雪五寸ほどふるさむ
 兼吉馬屋こいをだし
 〇おさた雪にて紙が
 つからぬ^{*2}
 〇紙漉安次殿休
 〇大森勝次郎君へ半次郎年し申上ル御酒いたたく事
 〇薬湯立ル家内物入湯する
 〇須山土屋喜十郎様へにんじん二大子上ル

*1 馬を引いて人や荷物を運ぶ人。
 *2 雪が降って寒いので紙を漉くことができない。



一月二十六日
 馬家こいをだし○槓木を割○家内
 ぬい須山ヨリくる○拾年ヨリこの
 あいだ寒ひとい○此日北風ふく寒
 中二大さむさも○おうら用紙焼○
 おさたさむさにて紙つからぬ○紙
 漉安次殿紙船こうる○半次郎さむ
 いに付あつかんで酒呑さむい
 だし○槓木を割○家内
 ぬい須山ヨリくる○拾年ヨリこの
 あいだ寒ひとい○此日北風ふく寒
 中二大さむさも○おうら用紙焼○
 おさたさむさにて紙つからぬ○紙
 漉安次殿紙船こうる○半次郎さむ
 いに付あつかんで酒呑さむい

一月二十六日兼吉こいをかつぎ○
 馬家こいをだし○槓木を割○家内
 ぬい須山ヨリくる○拾年ヨリこの
 あいだ寒ひとい○此日北風ふく寒
 中二大さむさも○おうら用紙焼○
 おさたさむさにて紙つからぬ○紙
 漉安次殿紙船こうる○半次郎さむ
 いに付あつかんで酒呑さむい

*1 漉き舟の原料を入れた液が寒さ
 で凍る。

一月二十七日兼吉茅木壹駄とる。
 半次郎半紙式ノ切。紙漉安次殿紙
 神と白紙。おうら紙と白紙。
 中之湯山詮採。三十九年ト畑カ
 金十圓拾八匁納す。
 湯山半七郎様。三十九年ト畑カ
 六圓七十五匁納す。
 湯山半七郎様。金利。四十八匁納す。
 ふうら志ひと焼。半次郎火も。
 家内ぬい石脇。酒壺升買。
 竹次郎ヨリ。酒壺升買。おぬい神山
 迄紙売二行。佐藤由蔵殿妻。二金壺
 円八錢八厘無尺金渡すなり。



一月二十七日兼吉茅木壹駄とる。○
 半次郎半紙式ノ切。○紙漉安次殿紙
 を付ル。○おうら紙を付ル。○中之湯
 山詮採へ三十式年分畑方金壹円拾
 八錢五厘納なり。○湯山半七郎様三
 十式年分畑方金六円七十五錢納事
 ○湯山半七郎様金利。式円十八錢六
 厘納。○おうら志ひを焼。半次郎火も
 し。○家内ぬい石脇へ行。○佐野植松
 竹次郎ヨリ。酒壺升買。○おぬい神山
 迄紙売二行。○佐藤由蔵殿妻。二金壺
 円八錢八厘無尺金渡すなり。○

二月廿八日 兼吉前七時半次郎方
 石脇大庭與三郎娘と
 風病見舞半次郎行
 葦山光神さま
 まへおうら行
 おさた紙付ル
 半紙三メ切
 寒中牛日豆腐買事
 家内ぬい紙草上ル
 此夜二大雨ふる



一月二十八日兼吉前七時半次郎方
 ヨリ行なり○石脇大庭與三郎娘こ
 と風病見舞半次郎行○葦山光神さ
 まへおうら行○おさた紙付ル○半
 紙三メ切○寒中牛日豆腐買事○家
 内ぬい紙草上ル○此夜二大雨ふる

*1 葦山町原木の竈神社。通称荒神様。

*2 丑の日に豆腐を買うの意か。

一月二十九日半次郎三ツ又切二行
 めしを喰御茶呑○家内ぬい神山迄
 紙売二行○おうら用紙つくなり○
 おさた紙を付ル○二本松人楨山を
 見二くる○中川安次郎殿へ紙代金
 壹円六十銭おふさ女二渡なり○西
 川定吉殿ヨリ宮原川下畑方壹円五
 銭取○紙漉安次殿ニ金壹円渡ス也
 ○半紙壹ノ切○日野屋ヨリ酒十銭
 買○



*1 山林の様子を下見に来る。



二月三十日孝明天皇祭の土狩小野屋半紙百丈売
 三ノ島町市ケ原丁 袴中にて 神屋御北ノ邊の千貫とよまの場
 鍋中にて 壱升焼鍋ツツ買 ○千貫
 とよまの場にて 半次郎へきをする
 たり ○千貫とよ茶屋にてめしを喰
 ○半次郎三島大社へまいる ○お
 ら紙草を焼 ○家内ぬい石脇搗屋へ
 蕎麦をひきに行 ○日野屋ヨリ酒式
 十銭買酒たかい
 ○お
 きた紙を付ル ○此日旧十二月三十
 日なり ○西風ふく ○

一月三十日孝明天皇祭 ○下土狩小野屋半紙百丈売 ○三島町市ケ原丁鍋中にて 壱升焼鍋ツツ買 ○千貫
 とよまの場にて 半次郎へきをする
 たり ○千貫とよ茶屋にてめしを喰
 ○半次郎三島大社へまいる ○お
 ら紙草を焼 ○家内ぬい石脇搗屋へ
 蕎麦をひきに行 ○日野屋ヨリ酒式
 十銭買酒たかい
 ○お
 きた紙を付ル ○此日旧十二月三十
 日なり ○西風ふく ○

*1 長泉町下土狩。
 *2 旧三島町市ケ原町の金物商「鍋利」か。
 *3 髭を剃るの意か。

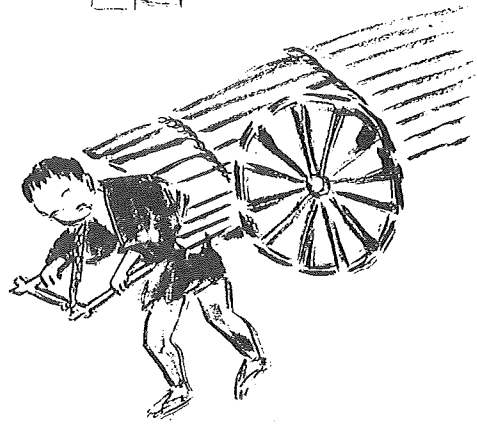
一月三十一日旧正月一日大森

勝次郎の金六円納り。
 金拾参円九銭と上ケ田村正月也勝又
 利借用申事。上ケ田村正月也
 大吉君半次郎年しに行酒をいたた
 酒を呑む。石脇植松あんまさまに針
 あんまさまに針をう。
 紙漉安次殿旧正月一日付
 休。此日天キよし。



一月三十一日旧正月一日大森勝次郎君へ金六円納なり。○金拾参円二九銭五厘十月二十日迄年壺割五分利借用申事。○上ケ田村正月也勝又大吉君半次郎年しに行酒をいたたくなり。○勝又喜市殿方にて酒呑。○家内ぬい石脇植松あんまさまに針をうつなり。○佐野植松竹次郎様ヨリ酒壺升買。○おさた半紙五百枚紙付ル休。○紙漉安次殿旧正月一日付休。○此日天キよし。

二月一日上之原山にて金沢小野高
 一君ヨリ板二をとし此代金三円五
 十八銭○本田良吉殿車二付ル○お
 うら半次郎妻ぬい三ツ又を二釜は
 ぐ○おさた紙を付ル○勝又茂十郎
 様家ひまち^{*1}二半次郎行酒をいたた
 くなり○旧正月二日天キよし○千
 福車ひき伊平殿二板ちん銭六銭払
 半次郎上之原山ヨリ馬二二駄付ル
 ○御林下山積さる此夜薬湯立ル○



一 二月一日上之原山にて金沢小野高
 一 君ヨリ板二をとし此代金三円五
 十八銭○本田良吉殿車二付ル○お
 うら半次郎妻ぬい三ツ又を二釜は
 ぐ○おさた紙を付ル○勝又茂十郎
 様家ひまち^{*1}二半次郎行酒をいたた
 くなり○旧正月二日天キよし○千
 福車ひき伊平殿二板ちん銭六銭払
 半次郎上之原山ヨリ馬二二駄付ル
 ○御林下山積さる此夜薬湯立ル○

*1 日待ち。旧正月のため終夜、酒宴を催す。

二月二日仙年寺様
 半次郎年一箱
 白米一升かし
 五錢上ルの
 岩佐仲次郎君へ
 十二時ヨリ後
 時迄雨ふ
 付ル日野屋ヨリ
 酒式十銭買
 大森勝次郎君
 年し
 紙草をこく
 酒を上ルなり
 大森ヨリ
 神山はなしある



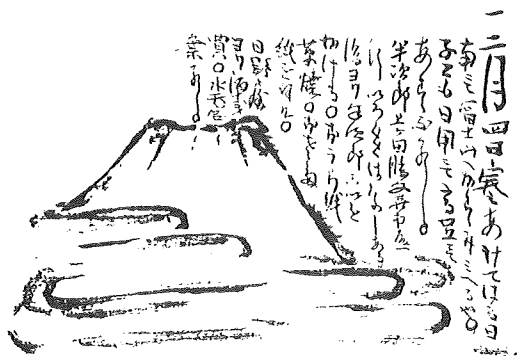
二月二日仙年寺様半次郎年し行白
 米一升かし壹箱錢五錢上ルなり○
 岩佐仲次郎君へ年しに行御酒いた
 たく事○十二時ヨリ後壹時迄雨ふ
 る○半紙四メ切○おさた紙を付ル
 ○日野屋ヨリ酒式十銭買○家内ぬ
 い紙草をこく○大森勝次郎君年し
 にくる○酒を上ルなり○大森ヨリ
 神山はなしある○



一二月三日大雨ふる川ニ水でる○半
 次郎馬くらをなおよす○家内ぬい紙
 草をこく○せつぶん豆をまく福ハ
 内へ鬼ハ外鬼目に打込鬼にける
 紙漉安次殿水にこるニ付休○日野屋ヨリ酒十銭
 買○



一二月三日大雨ふる川ニ水でる○半
 次郎馬くらをなおよす○家内ぬい紙
 草をこく○せつぶん豆をまく福ハ
 内へ鬼ハ外鬼目に打込鬼にける
 紙漉安次殿水にこるニ付休○日野屋ヨリ酒十銭
 買○

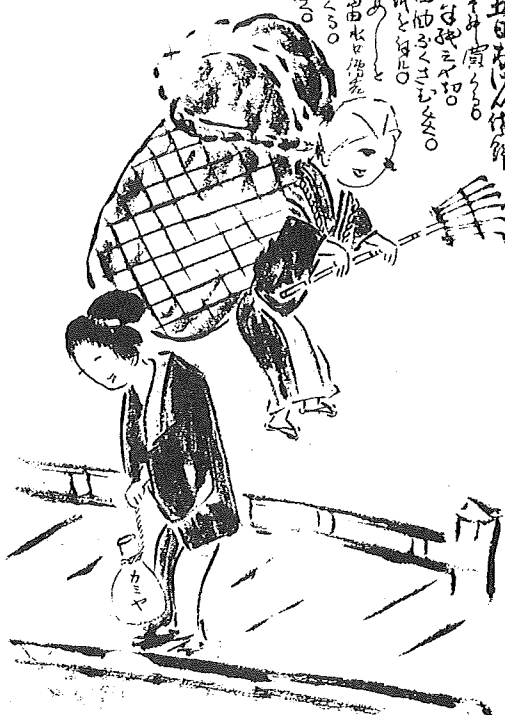


二月四日寒あけてはる日
 富士山へかすみへる也
 用ニて高足ニてあすふなり
 半次郎又喜市殿へ行いろ
 はなしある後ヨリ半次郎
 こいをかける
 おうら紙草焼
 おさた紙を付ル
 日野屋ヨリ酒十銭
 買
 水天宮祭なり



二月四日寒あけてはる日南ニて富士山へかすみへる也○子ども日用ニて高足ニてあすふなり○半次郎上ヶ田勝又喜市殿へ行いろ
 〳〵 はなしある後ヨリ半次郎こいをかける○おうら紙草焼○おさた紙を付ル○日野屋ヨリ酒十銭買○水天宮祭なり○

一二月五日おけい佐野ヨリ酒を壺升
 買くる○半次郎半紙三ノ切○三ツ
 又切○此西風ふくさむ〜
 ○おさた紙を付ル○家内ぬいめし
 を焼○伊豆島田水口伝吉様年しニ
 くる○此夜中風ふく○



一二月五日おけい佐野ヨリ酒を壺升
 買くる○半次郎半紙三ノ切○三ツ
 又切○此西風ふくさむ〜
 ○おさた紙を付ル○家内ぬいめし
 を焼○伊豆島田水口伝吉様年しニ
 くる○此夜中風ふく○

カミヤ

二月六日大森
 勝次郎様半次郎行御
 ひる御前いたたく○おさた紙を付
 ル○前夜ヨリ此日十二時迄西風ふ
 く後迄時ヨリ北風ふくさむい
 く 〽 〽 おうらさらしばにて紙草
 を上ルなりさむ 〽 〽 〽
 ○石脇大庭常吉殿ヨリ紙草三貫六
 百目受取なり○此草を焼なり○半
 次郎三ツ又を切○日野屋ヨリ酒十
 錢買○



一二月六日大森勝次郎様半次郎行御
 ひる御前いたたく○おさた紙を付
 ル○前夜ヨリ此日十二時迄西風ふ
 く後迄時ヨリ北風ふくさむい
 く 〽 〽 おうらさらしばにて紙草
 を上ルなりさむ 〽 〽 〽
 ○石脇大庭常吉殿ヨリ紙草三貫六
 百目受取なり○此草を焼なり○半
 次郎三ツ又を切○日野屋ヨリ酒十
 錢買○



二月七日勝又角太郎殿半次郎上之
 原山番二行上ヶ田勝又喜市殿元吉
 原毘沙門天王さまへ行○石脇大庭
 與三郎妻おくら大宮町へ行半次郎
 母二留守居二行おうら紙草焼○お
 さだ紙を付ル○佐野ヨリ酒式十銭
 買○半紙式ノ切○

二月七日勝又角太郎殿半次郎上之
 原山番二行上ヶ田勝又喜市殿元吉
 原毘沙門天王さまへ行○石脇大庭
 與三郎妻おくら大宮町へ行半次郎
 母二留守居二行おうら紙草焼○お
 さだ紙を付ル○佐野ヨリ酒式十銭
 買○半紙式ノ切○

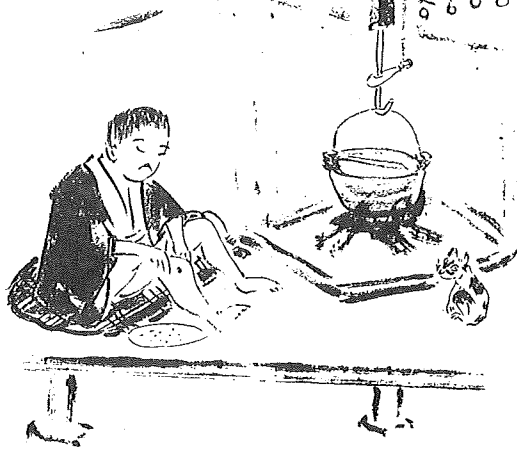
二月八日御林上板山ヨリ半次郎杉ヨリ三駄付ル。おびき四人ひく。おうら用紙つく。家内ぬい今里迄紙売。今里糸吉殿娘。二いじん豆。五斗入壺俵売。おさた紙を付ル。日野屋ヨリ酒十銭買。石脇杉山茂十郎様ヨリ半紙代受取。半次郎こしヨリ足痛氣にていたむ。家内ぬい石脇大庭與三郎へ留守居。二行。本田良吉殿車ちん十。六銭渡スなり。



二月八日御林上板山ヨリ半次郎杉は三駄付ル。おびき四人ひく。おうら用紙つく。家内ぬい今里迄紙売。二行。今里糸吉殿娘。二いじん豆。五斗入壺俵売。おさた紙を付ル。日野屋ヨリ酒十銭買。石脇杉山茂十郎様ヨリ半紙代受取。半次郎こしヨリ足痛氣にていたむ。家内ぬい石脇大庭與三郎へ留守居。二行。本田良吉殿車ちん十。六銭渡スなり。

*1 南京豆のこと。

二月九日雨ふるさむい
 家内物三ツ又二釜はくなり
 半次郎半紙百丈売
 石脇植松辰次
 日野屋ヨリ酒
 十銭買
 半次郎こしいたむに付灸
 すへるあついで
 金沢小野高一殿手代二板をとし代
 金貳円渡スなり
 金比羅神社祭御
 酒上ル



二月九日雨ふるさむい
 ○家内物三ツ又二釜はくなり○半
 次郎半紙湯入なり○石脇植松辰次
 郎様へ半紙百丈売○日野屋ヨリ酒
 十銭買○半次郎こしいたむに付灸
 すへるあついで
 ○金沢小野高一殿手代二板をとし代
 金貳円渡スなり○金比羅神社祭御
 酒上ル○

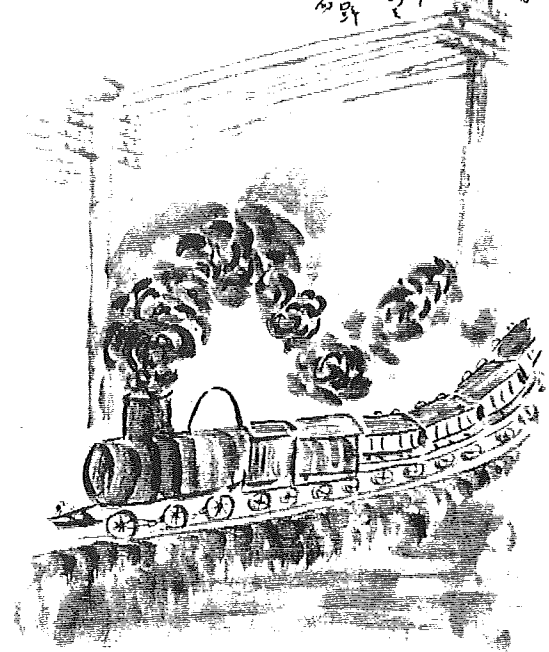
二月十日半次郎私記
 病にありて休む日也。
 亦も紙と付れり。
 三つ四行路をヨリ新文紙
 久保中ノ橋見せ屋
 佐野下原日野屋
 半次郎君をやし無尽ある
 とやなり。金壹円式十五銭仕金するなり。



一二月十日半次郎疝氣病にてこしい
 たむ此日休○おさた紙を付ル○三
 島伊勢善^{*1}ヨリ新文紙六メ目買○萩
 ケ久保中ノ橋見せ屋半紙壹メ売○
 佐野下原日野屋半紙壹メ売○此夜
 二西川清次郎君をやし無尽ある
 半次郎行金壹円式十五銭仕金する
 なり○

*1 旧三島町市ヶ原町の雜貨商。

二月十一日
 佐野原七時
 四分キ車
 半次郎富
 士大宮町へ
 行簾屋一丈
 幅み替える
 ありかいる
 なり○此夜
 上野村佐野
 藤右衛門殿
 方へ宿酒呑
 而呑。



二月十一日佐野原七時四分キ車ニ
 て半次郎富士大宮町へ行簾屋一丈
 幅み替える
 ありかいるなり○此夜上野村佐野
 藤右衛門殿方へ宿酒呑○



二月十二日富士郡上野村
富士山大石寺半次郎

さんけいさん

十三日白糸村半野高野

良作殿半次郎

十四日上野村字西原

牧野嘉四郎

はなし申上り

此夜二佐野藤

左衛門殿宿酒呑

二月十二日富士郡上野村富士山大石寺半次郎さんけいするなり○

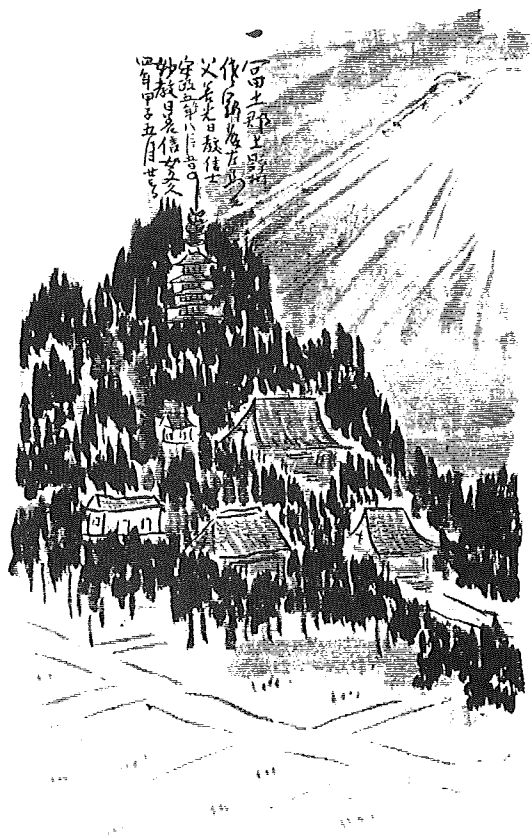
十三日白糸村半野高野良作殿半次郎行○

十四日上野村字西ノ原牧野嘉四郎様御家内さまといろ

はなし申上り○此夜二佐野藤

左衛門殿宿酒呑○

*1 富士宮市上条の日蓮正宗大石寺。
*2 富士宮市半野。



富士郡上野村
 佐野藤左衛門殿父善
 光日教信士
 安政五年八月五日
 妙教日善信女文
 久四年甲子五月廿
 三日

一富士郡上野村佐野藤左衛門殿父善
 光日教信士安政五年八月五日○
 妙教日善信女文久四年甲子五月廿
 三日



二月十五日白糸村字半野ヨリ白糸滝を半次郎見ル事○大宮ヨリ馬車デ行鈴川ヨリ壱時式十分キ車ニテ佐野原迄くる○此日勝又惣七殿孫しぬなり半次郎見舞申

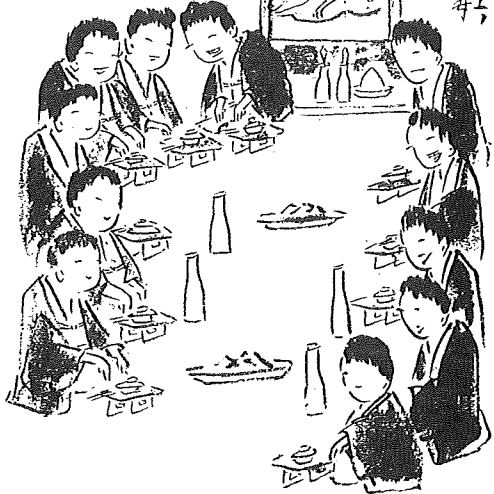
一二月十五日白糸村字半野ヨリ白糸滝を半次郎見ル事○大宮ヨリ馬車デ行鈴川ヨリ壱時式十分キ車ニテ佐野原迄くる○此日勝又惣七殿孫しぬなり半次郎見舞申

二月十六日半次郎上ノ原ヨリ焼木
 四駄付ル○半次郎妻ぬい山ニてと
 なるなり○此夜ニ湯山金次郎様方ニ
 て秋葉講ある御神酒深良村小林
 上酒也此酒うまい

秋葉神社



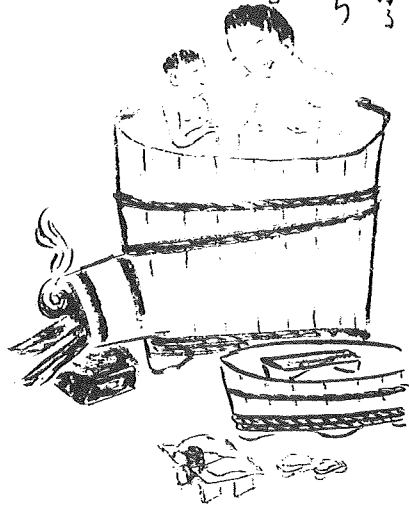
秋葉講ある御神酒深良村小林
 上酒也此酒うまい



秋葉神社祭

○ 二月十六日半次郎上ノ原ヨリ焼木
 四駄付ル○半次郎妻ぬい山ニてと
 なるなり○此夜ニ湯山金次郎様方ニ
 て秋葉講ある御神酒深良村小林
 上酒也此酒うまい

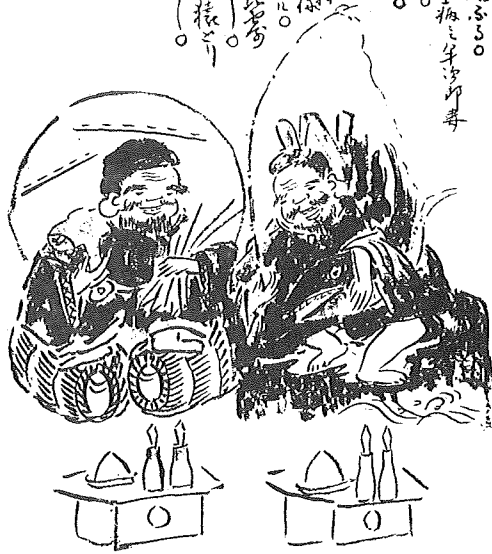
二月十七日雪ふる
 さむい冬○半次郎
 猿取ば
 木を湯入ル痛気妙薬半次郎あさ
 と入事○家内石脇へ行○此夜二勝
 又與次郎殿方にて山神講ある○後
 四時ヨリおうら手間二行○
 方山神講ある○
 後四時ヨリおうら
 手間二行○



二月十七日雪ふるさむい
 ○半次郎半紙九ノ切○猿取ば
 *1 木を湯入ル痛気妙薬半次郎あさ
 と入事○家内石脇へ行○此夜二勝
 又與次郎殿方にて山神講ある○後
 四時ヨリおうら手間二行○

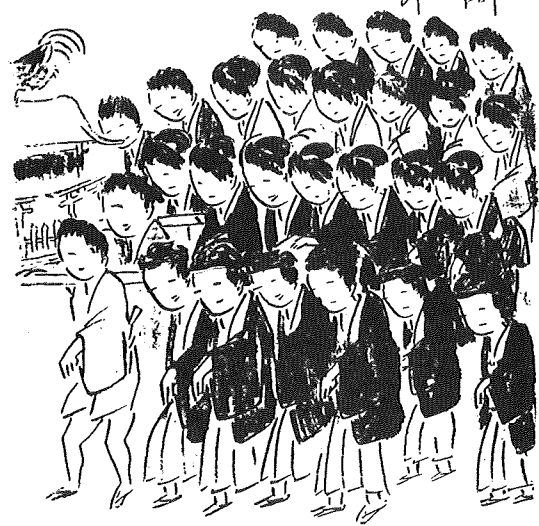
*1 サルトロイバラ。根茎は薬用となる。

一二月十八日雨ふる。
 平松幸藏様、紙舞二行、紙
 安次殿休、豊作日用にて休、富
 士上野村牧野嘉四郎様妻おもと様
 ヨリはなし湯山様御家内さまに申
 上ル。旧正月十九日恵比寿さまを
 祭也。薬湯を立ル此中二猿とりは
 らを入ルなり。

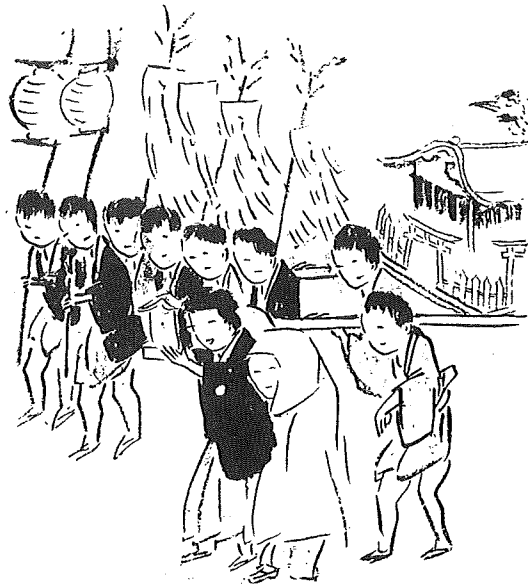


一二月十八日雨ふる。○平松幸藏様風
 病にて半次郎妻ぬい見舞二行○紙
 澁安次殿休○豊作日用にて休○富
 士上野村牧野嘉四郎様妻おもと様
 ヨリはなし湯山様御家内さまに申
 上ル○旧正月十九日恵比寿さまを
 祭也○薬湯を立ル此中二猿とりは
 らを入ルなり○

二月十九日平松服部
彦次郎殿父僧引半次郎
引半次郎妻おけい○石脇大庭與三
郎おくら送り二行○



二月十九日平松服部彦次郎殿父僧
引半次郎半次郎妻ぬい○上ヶ田
勝又喜市妻おけい○石脇大庭與三
郎おくら送り二行○



二月二十日平松
服部彦太郎殿父様
濱をり木瀬川迄行あみと
うつ赤はら魚と
は魚二匹呑の其仲
豆佐野寺行○



二月二十日平松服部彦太郎殿父様
濱をり木瀬川迄行あみとをうつ赤は
ら魚とる此魚にて酒呑○半次郎伊
豆佐野寺行^{*1}○

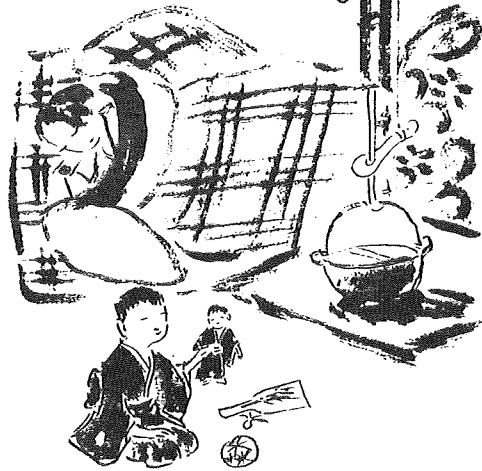
*1 三島市佐野の曹洞宗耕月寺。桃
園の定輪寺末寺。

二月廿三日印野村人二わらを
 三百くびり賣る。あうり
 末とはかく。あむち。紙をけり
 半次郎官原畑へ。麦作切り
 紙漉安次殿小使金壱円
 日野屋ヨリ酒十錢買。
 此夜西風ふくさむ。



一 二月二十二日印野村人二わらを三
 百くびり売。おうら木之はかく。○
 おさた紙を付ル。○半次郎官原畑へ
 麦作切。二行紙漉安次殿小使金壱円
 渡ス。○日野屋ヨリ酒十錢買。○此夜
 二西風ふくさむ。

二月廿三日
 病ニ休
 半次郎上之原ヨリ
 焼木式駄付ル
 ふうら用紙つくさむ
 北風ふくさむ



- 一二月二十三日家内ぬい風病ニて休
 ○半次郎上之原ヨリ焼木式駄付ル
 ○ふうら用紙つくさむ○おさた紙
 を付ル○北風ふくさむ

二月廿四日半次郎
 紙切八〇宮原畑へ
 作切〇おさた紙を付ル
 〇家内ぬい
 風病にてやすむなり
 〇此夜二西川
 与三郎君にて念仏講
 ある半次郎行

南無阿弥陀仏
信州善光寺



○ 二月二十四日半次郎半紙八ノ切
 〇 宮原畑へ半次郎麦作切
 〇 おうら麦作切
 〇 おさた紙を付ル
 〇 家内ぬい風病にてやすむなり
 〇 此夜二西川与三郎君にて念仏講ある半次郎行

南無阿弥陀仏

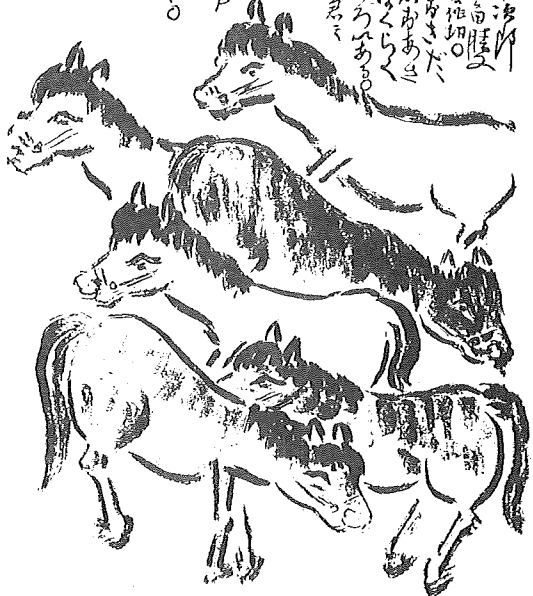
信州善光寺

二月廿五日半次郎三島町へ行九
 三島町へ行く。九郎の葉書。
 村田と豊作は袋を三賞。
 猪引一くたり買。
 本富存と守和買。江戶屋に
 砂糖買。二本松とこはにて半次
 郎頭かりこみする。おうら畑麦作
 切。豊作日用休。おさた紙を付ル
 紙と紙の。満紙ぬ。好
 三賞。大社前。守和。三賞。



二月二十五日半次郎三島町へ行九
 屋にて葉買。股引一くたり買。木
 富様にて半切買。江戶屋にて砂糖
 式十錢買。二本松とこはにて半次
 郎頭かりこみする。おうら畑麦作
 切。豊作日用休。おさた紙を付ル
 ○家内ぬ風病にて休なり。三し満
 大社前へ半紙三メ売。

二月廿六日半次郎
 宮原知事作切○市田勝又
 春市殿娘おいせ麦作切
 かうら用紙焼○おさだ紙を付
 紙と毎日の内ぬかあは
 御病の外○三島けくらく
 金次郎殿くるつろいある
 此夜二勝又清太郎君
 不詳講ある○馬
 つくろいある松本
 本岩殿小林伊三郎殿勝又市太郎
 殿馬方鎌番大林松を切焼木するな
 り○



二月二十六日半次郎宮原畑麦作切
 ○上ケ田勝又喜市殿娘おいせ麦作
 切○おうら用紙焼○おさだ紙を付
 ル○家内ぬいおあさ風病にて休○
 みしまは一伯*くらく金次郎殿くる馬つ
 くらいある○此夜二勝又清太郎君
 にて不詳講ある○馬つくろい番杉
 本岩松殿小林伊三郎殿勝又市太郎
 殿馬方鎌番大林松を切焼木するな
 り○

*1 三島の馬医。

二月廿七日半次郎半紙六ノ切
 喜市殿取あはせかうり
 用紙付あり○あな
 物と病と休也○家内ぬいかぜ
 加ふと病と休也○家内ぬいかぜ
 日野屋ヨリ酒十銭買
 役場拾七銭八厘納使豊作



○ 二月二十七日半次郎半紙六ノ切
 半次郎三ツ又切○上ケ田勝又喜市
 殿娘おいせおうら用紙付なり○お
 きた風病にて休也○家内ぬいかぜ
 ノ病にてやすむ事○日野屋ヨリ酒
 十銭買○役場拾七銭八厘納使豊作

二月二十八日半次郎上之原
 杉林中三松は三駄馬二付ル
 杉林中二ぬき四枚あるこつ番へ申
 上ルなり○おうら馬屋こいを田二
 かつぐ○おさた風病にて休○家内
 ぬい風病にてやすむなり○二ツ屋
 魚屋弥市殿ヨリあじ魚六本買い○
 日野屋ヨリ酒十銭買○
 富岡村字御宿葛山上ケ田
 金沢今里下和田千福大畑定林寺



二月二十八日半次郎上之原字小鍋

*1 沢杉林中之松は三駄馬二付ル○此

杉林中二ぬき四枚あるこつ番へ申

上ルなり○おうら馬屋こいを田二

かつぐ○おさた風病にて休○家内

ぬい風病にてやすむなり○二ツ屋

魚屋弥市殿ヨリあじ魚六本買い○

日野屋ヨリ酒十銭買○

富岡村字御宿葛山上ケ田

金沢今里下和田千福大畑定林寺

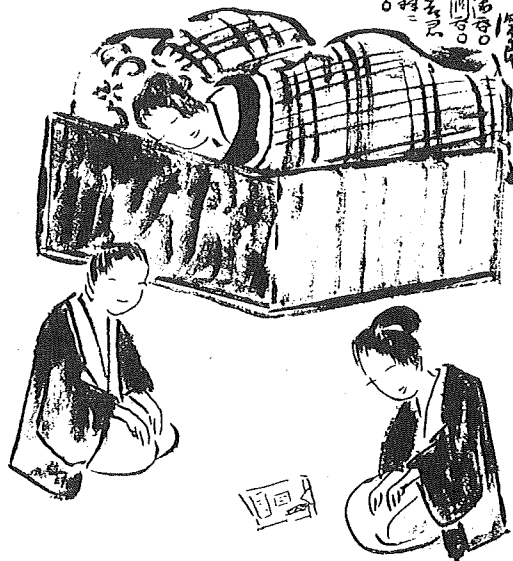
*1 トヨタ自動車株式会社東富士研
 究所付近。

三月一日佐野久保庄三郎様ヨリ酒
 樽ヨリ酒を所買○庄三郎様ヨリ酒
 主買○本松ヨリ紙巻メ売○石油巻升二
 本松ヨリ買○石脇おくら風病見舞
 二くる○おさたぬい風病ニて休な
 り○郡内吉田あんまニ半次郎こし
 をもませるなり○金沢小野高市殿
 二金巻円五十七銭材木代払○紙漉
 安次殿ニ金巻円小使ニ渡ス○



一 三月一日佐野久保庄三郎様ヨリ酒
 巻升買○庄三郎様へ半紙巻メ売○
 二本松へ半紙巻メ売○石油巻升二
 本松ヨリ買○石脇おくら風病見舞
 二くる○おさたぬい風病ニて休な
 り○郡内吉田あんまニ半次郎こし
 をもませるなり○金沢小野高市殿
 二金巻円五十七銭材木代払○紙漉
 安次殿ニ金巻円小使ニ渡ス○

一三月二日半次郎深良土屋忠四郎様
 土屋忠四郎様御行酒呑。
 勝又半左衛門殿方にて酒
 呑。此日雨ふる。勝又乙吉君妻お
 はるさま病見舞二くる砂糖いたた
 くなり。紙漉安次殿やすみ也。



一三月二日半次郎深良土屋忠四郎様
 行酒呑○勝又半左衛門殿方にて酒
 呑○此日雨ふる○勝又乙吉君妻お
 はるさま病見舞二くる砂糖いたた
 くなり○紙漉安次殿やすみ也○

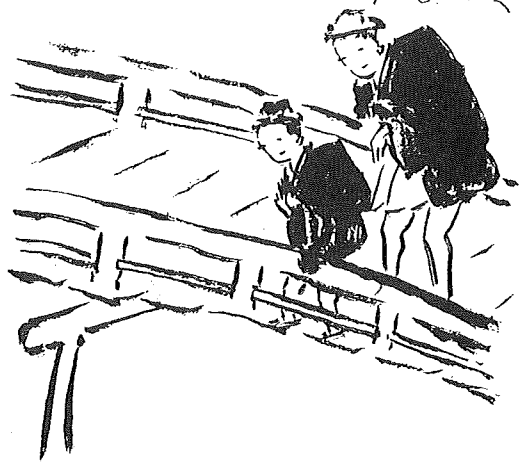
一 三月三日おうら半次郎三ツ又はぐ
 はく。安次殿紙と備。○おさた風病にて
 休。○半次郎にんしうをほる。○長田
 為吉殿へ行三十三年分月十日たノ
 三十三年分月十日たノむなり。○上之原
 字小鍋沢下千三十九番地杉林中二
 ぬき四丁ある此ぬきこつ場へ申上
 り也。○



一 三月三日おうら半次郎三ツ又はぐ
 ○安次殿紙を漉。○おさた風病にて
 休。○半次郎にんしうをほる。○長田
 為吉殿へ行三十三年分月十日たノ
 むなり。○金拾四門定ル事。○上之原
 字小鍋沢下千三十九番地杉林中二
 ぬき四丁ある此ぬきこつ場へ申上
 り也。○

*1 明治三三年の一年間、毎月一日間働さに来てもらう。

三月四日豊作日用三島へ半次郎下紙売三行此紙石脇大庭與三郎殿へ売半紙七ノ代金七円貳拾貳銭受取なり○半次郎田麦へこいをかける○古田伴次郎殿母様ノくやみ二行此仏八十四才也○家内ぬいおさた風病二休○日野屋ヨリ酒十銭買○



一 三月四日豊作日用にて三島へ半次郎下紙売二行此紙石脇大庭與三郎殿へ売半紙七ノ代金七円貳拾貳銭受取なり○半次郎田麦へこいをかける○古田伴次郎殿母様ノくやみ二行此仏八十四才也○家内ぬいおさた風病二休○日野屋ヨリ酒十銭買○

一 三月五日半次郎さつまくらを立止

おくらに紙草を焼く。用紙焼く。豊作殿へ半次郎行。日野屋ヨリ酒十五銭買。半次郎木之は二トかく。おさた風病にて休。家内母々頭病にてやすむ也。



一 三月五日半次郎さつまくらを立止
 ○おくらに紙草を焼く。用紙焼く。豊作殿へ半次郎行。日野屋ヨリ酒十五銭買。半次郎木之は二トかく。おさた風病にて休。家内母々頭病にてやすむ也。



三月六日
半次郎須山村馬にて紙壳
四土屋喜十郎様へ見舞申上
外見舞
申上
長田為吉殿此日ヨリ月二十
日定宮原畑麦作切
おさら麦作
切
おさら風病にて休なり家内ぬ
いめしを焼

為

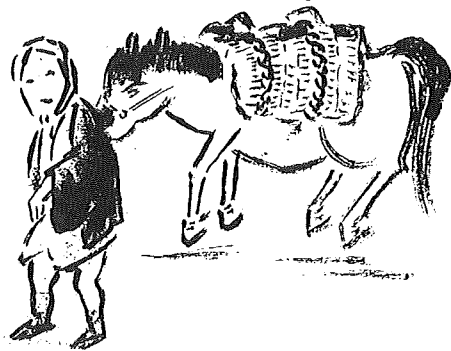
一三月六日半次郎須山村馬にて紙壳
二行田向土屋喜十郎様へ見舞申上
ル○沼津屋半紙三×半売○外二三
×半売○久保土屋清助様へ見舞申
上ル○長田為吉殿此日ヨリ月二十
日定宮原畑麦作切○おさら麦作
切○おさら風病にて休なり家内ぬ
いめしを焼○

一 三月七日長田為吉殿
 麦作三くる○半次郎神山
 紙賣二行○半次郎君二て
 弘法大師
 以仁池谷七平君二て弘法大
 師講ある南無大師
 西風ふく○



為
 一 三月七日長田為吉殿麦作二くる○
 半次郎神山迄紙売二行○半次郎麦
 ふむ此夜二池谷七平君二て弘法大
 師講ある南無大師
 西風ふく○

一 三月八日半次郎三島行
 依之原川村持半紙之賣。
 新名紙屋ヨリ糸巻八厘四角の半
 紙百丈売○河島にて上ヶ田勝又市
 郎はかま買○宮倉町加野屋ヨリか
 きばい式俵買此はい西川與三郎君
 二馬にて付ル○長田為吉殿外川久
 藏殿へ家根之手間行○佐野久保庄
 三郎様ヨリ酒壺升買○紙漉安次殿
 二金壺円渡スなり○



一 三月八日半次郎三島行^(佐野原)
 依之原川村持半紙之賣
 新名紙屋ヨリ糸巻八厘四角の半
 紙百丈売○河島にて上ヶ田勝又市
 郎はかま買○宮倉町加野屋ヨリか
 きばい式俵買此はい西川與三郎君
 二馬にて付ル○長田為吉殿外川久
 藏殿へ家根之手間行○佐野久保庄
 三郎様ヨリ酒壺升買○紙漉安次殿
 二金壺円渡スなり○



一 三月九日長田為吉殿宮原畑
 草を焼○半次郎こいをかける○おうら紙
 十九貫五百目買○此代金壺駄二付
 四円五十銭割四円五十銭渡ス○豊
 作沼津へ行千本松原にて休なり○
 西風ふくさむ
 家内ぬい石脇大庭與三郎殿留守居
 二行○

為

一 三月九日長田為吉殿宮原畑作切
 ○半次郎こいをかける○おうら紙
 草を焼○真田善平様ヨリ紙しび式
 十九貫五百目買○此代金壺駄二付
 四円五十銭割四円五十銭渡ス○豊
 作沼津へ行千本松原にて休なり○
 西風ふくさむ
 家内ぬい石脇大庭與三郎殿留守居
 二行○

一 三月十日旧二月初午稻荷神を祭
 祭○金比羅神社祭○中川安次郎君二
 大念仏ある半次郎母八十五才で念
 念仏くゝゝ自持の修徳の修ゝゝゝ
 石脇大庭常吉殿念仏念回二半次郎
 知まら作切○十一時ヨリ田麦作切
 半次郎大念仏行○ぬい石脇留守居行○大
 庭常吉君へ仏前金十錢上ルなり○
 佛前金十錢上ルなり○此夜二
 雨

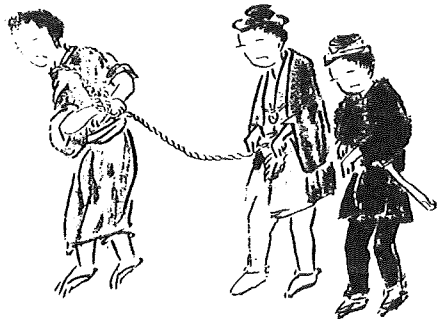


為

一 三月十日旧二月初午稻荷神を祭 ○
 金比羅神社祭 ○中川安次郎君二て
 大念仏ある半次郎母八十五才で念
 仏へ行南無阿弥陀仏くゝゝゝゝ
 ○石脇大庭常吉殿念仏念回二半次郎
 行 ○長田為吉殿十時迄畑之麦作切
 ○十一時ヨリ田麦作切 ○半次郎大
 念仏へ行 ○ぬい石脇留守居行 ○大
 庭常吉君へ仏前金十錢上ルなり ○
 此夜二雨ふる ○

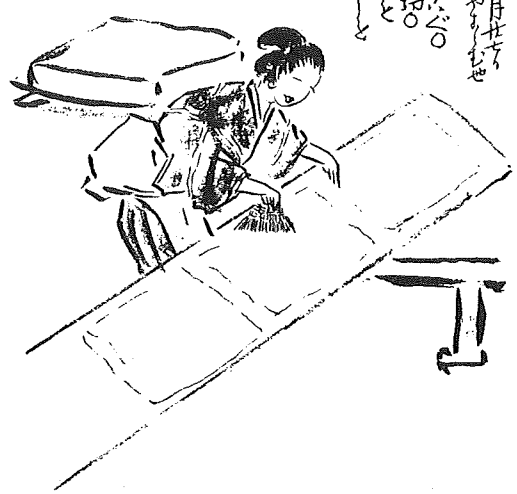
南無阿弥陀仏

一三月十一日豊作日用二付休なり。○
 半次郎石脇大庭常吉殿へ年回あと二
 付行なり半次郎留守居する也○石
 脇大庭嘉吉殿盗人の事二付山田様
 二吉川様ト此日十二時二沼津へ引
 込なり○家内ぬい風病ニて休事○
 おさた風病二頭いたむやすむ也○
 日野屋ヨリ酒十銭買○



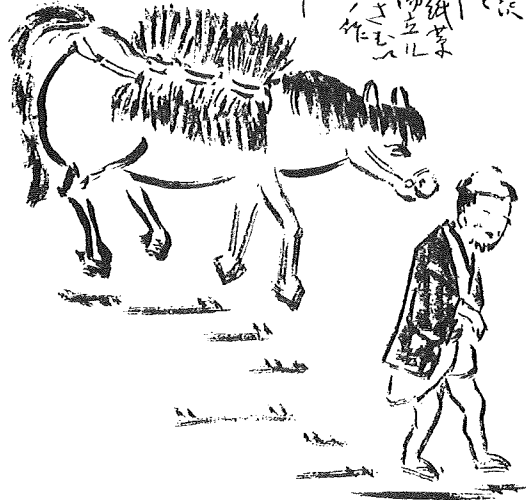
一三月十一日豊作日用二付休なり○
 半次郎石脇大庭與三郎殿方ニて酒
 呑與三郎大庭常吉殿へ年回あと二
 付行なり半次郎留守居する也○石
 脇大庭嘉吉殿盗人の事二付山田様
 二吉川様ト此日十二時二沼津へ引
 込なり○家内ぬい風病ニて休事○
 おさた風病二頭いたむやすむ也○
 日野屋ヨリ酒十銭買○

一 三月十二日おきた二月二十七日ヨ
 リ此日迄風病にて十四日あいたや
 すむ也此日紙を五百枚付ルなり○
 おうら為吉殿三ツ又苗をこぐ○後
 三時ヨリ為吉殿田麦作を切○半次
 郎三ツ又苗を植ル木之はを三トか
 く○家内ぬいめしを焼なり○日野
 屋ヨリ酒十銭買○



為
 一 三月十二日おきた二月二十七日ヨ
 リ此日迄風病にて十四日あいたや
 すむ也此日紙を五百枚付ルなり○
 おうら為吉殿三ツ又苗をこぐ○後
 三時ヨリ為吉殿田麦作を切○半次
 郎三ツ又苗を植ル木之はを三トか
 く○家内ぬいめしを焼なり○日野
 屋ヨリ酒十銭買○

三月十三日葛山ヨリ金沢
 小野高市杉板山ニ移け
 半次郎雨ふる○おうら
 紙草壺釜焼○半次郎妻ぬい湯立ル
 めしをたく○此雨北風ニてさむい
 ○長田為吉殿田
 むきノ作をきる○勝又茂十郎様ヨ
 リ茅沓駄受取也○此雨印十四日な
 り印あめわけなるなり○



為

一 三月十三日葛山ヨリ金沢小野高市
 様板山ニて杉はを式駄半次郎馬ニ
 付ルなりあさヨリ雨ふる○おうら
 紙草壺釜焼○半次郎妻ぬい湯立ル
 めしをたく○此雨北風ニてさむい
 ○長田為吉殿田
 むきノ作をきる○勝又茂十郎様ヨ
 リ茅沓駄受取也○此雨印十四日な
 り印あめわけなるなり○

一 三月十四日葛山ヨリ
 金沢小野高市杉板山ヨリ
 秋は山林の日の野屋ヨリ
 酒十貫銭の半次郎
 後六時ヨリ南方ニ
 あさより北雨ふるさむ
 初雷成事此年当年ノ事



一 三月十四日葛山ヨリ金沢小野高市
 様板山ヨリ杉は式駄付ル〇おうら
 紙草壺釜焼〇日野屋ヨリ酒十銭買
 此酒呑で半次郎後壺時ヨリ隠居ニ
 て休〇あさより北雨ふるさむ
 〇後六時ヨリ南方ニ
 て初雷成事此年当年ノ事〇

三月十五日勝又角太郎殿
半次郎上之原山番より○
あやし紙を付ル○
石脇ヨリ酒十銭買○此日二餅をつ
く○しやかさまへ上ルなり○

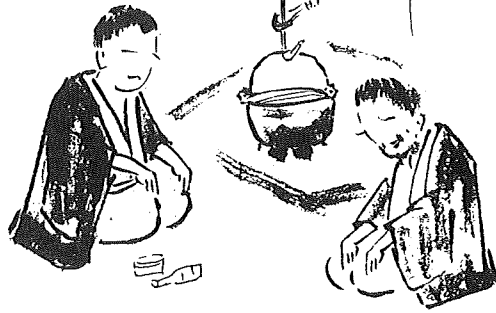
十六日半紙拾壹切○
半次郎にんしんをほる○
おうら紙草三釜に
母々めしを焼○おさだ紙を付ル
○日野屋ヨリ酒十銭買○



一 三月十五日勝又角太郎殿半次郎上
之原山番二行○おさだ紙を付ル○
石脇ヨリ酒十銭買○此日二餅をつ
く○しやかさまへ上ルなり○

一 十六日半紙拾壹切○半次郎にん
しんをほる○おうら紙草三釜に
○母々めしを焼○おさだ紙を付ル
○日野屋ヨリ酒十銭買○

三月十七日半次郎つくねいもをほ
 ぼる。石脇植松彦太郎殿大庭嘉吉殿
 大庭嘉吉殿下酒紙をくろ
 紙取と半次郎彦太郎殿をほる。○
 家内ぬい葛山焼木とり二行。○半次
 郎馬にて式駄付ル。○おうら紙草を
 さらすなり。○日野屋ヨリ酒十銭買
 う。○此日雲ルさむい。○
 日野屋ヨリ酒十銭買
 う。○石脇大庭與三郎半紙七メ上ルな
 り。○



一三月十七日半次郎つくねいもをほ
 る。○石脇植松彦太郎殿大庭嘉吉殿
 印請取二くる此印を半次郎彦太郎
 殿二渡スなりおさた紙をつける。○
 家内ぬい葛山焼木とり二行。○半次
 郎馬にて式駄付ル。○おうら紙草を
 さらすなり。○日野屋ヨリ酒十銭買
 う。○此日雲ルさむい。○
 ○石脇大庭與三郎半紙七メ上ルな
 り。○



三月十八日雨雪ふる
さむいとの勝又國三郎君
蕪湯立半次郎入湯也
石脇大庭與三郎殿
半紙三ノ上ル石脇ヨリ酒
式十錢買○此日ひかん入半次郎母南無
阿弥陀仏
國三郎殿ヨリ紙草しび九貫五百目
受取なり○家内物日用二付休○紙
漉安次殿ニ金壹円渡スなり○此日
さむいニ付半次郎あつかんニテ酒
呑○

一 三月十八日雨雪ふるさむい
く ○勝又國三郎君ニテ蕪湯立ル
半次郎入湯也 ○石脇大庭與三郎殿
へ半紙三ノ上ル ○石脇ヨリ酒式十
錢買 ○此日ひかん入半次郎母南無
阿弥陀仏
國三郎殿ヨリ紙草しび九貫五百目
受取なり ○家内物日用二付休 ○紙
漉安次殿ニ金壹円渡スなり ○此日
さむいニ付半次郎あつかんニテ酒
呑 ○

一 三月十九日 半次郎

三松とこばに頭かりふみすくすくすの
 依 錦久保庄と外移り上西堂神楽
 庄三郎様へちり半紙壺
 名 殿大庭世三郎様へ
 世 彦通下半紙壺酒吞
 半 次郎田勝又喜市沼津ヨリ
 上ケ田勝又喜市沼津ヨリ



一 三月十九日 半次郎 二本松とこばに
 て頭かりこみするなり ○ 佐野久保
 庄三郎様ヨリ上酒壺升買 ○ 庄三郎
 様へちり半紙壺メ売 ○ 石脇大庭與
 三郎様へちり半紙壺メ売 ○ 石脇大
 庭與三郎殿ニて興左衛門様ト半次
 郎ト酒吞 ○ 半次郎田麦ふむなり ○
 上ケ田勝又喜市沼津ヨリくるなり

一三月廿日西川初太郎君にて弘法大師講ある半次郎ヨリ餅米壹升外二

白米壹升賽銭二半紙壹丈此大師祭

二上ル事○半次郎二妻ぬい○半次郎母卜行○◎六十八銭○十六銭賽

銭○金四十六銭式厘白米三升三合

○金八十銭もろこし壹斗三升八合

同六銭蕎麦壹升代メ金貳円貳十五

銭此金壹円貳十五銭勝又清太郎殿

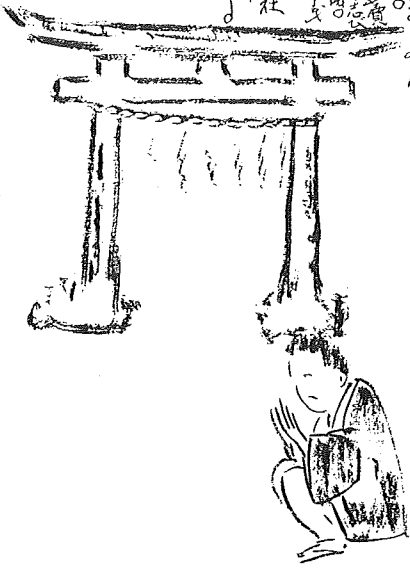
月壹割五分にてかするなり○此金

壹円勝又国三郎殿二月壹割五分二

かするなり此金三十四年三月廿日迄かし○



一
三月二十一日ひかん中日也
半次郎の馬鹿ななりなり
三島大社へまゐり
佐野日野屋へちり半紙を
辛松鍋屋に紙巻
惣角かへちり半紙を
付一圓を渡り紙巻を
拾貫目代金に同分
紙漉安次殿に小使
派り
下土狩割小塚稲荷神社
馬かけをみるなり



一三月二十一日ひかん中日也半次郎
石鳥居まいり二行三島大社へま
るなり○佐野日野屋へちり半紙巻
メ売○二本松鍋屋半紙巻メ売○惣
ヶ原かしやへちり半紙巻メ売勝又
国三郎君ヨリ紙草し拾貫目代金
壹円式十銭渡○紙漉安次殿二小使
二十五銭渡スなり○下土狩割小塚
稲荷神社半次郎まいるなり馬かけ
をみるなり○

三月廿二日雨ふる○
 勝又国三郎と薬湯と
 立ル半次郎入湯也○
 又乙吉殿ニ
 三十三回忌半次郎
 行仙寺へ参る○
 南無阿弥陀仏



一 三月廿二日雨ふる○勝又国三郎君
 二 薬湯を立ル半次郎入湯也○勝
 又乙吉殿ニ三十三回忌半次郎
 行仙寺様くる南無阿弥陀仏
 ○

一
 三月廿三日葛山ヨリ
 焼木三駄付ル
 湯山順作様ヨリ紙ノしほりぎ御
 むし申なり
 ○此代ニしろかわを五
 十枚上ル
 ○西川初太郎君隠居ニテ
 弘法大師講ある
 ○池谷七平様へ茅
 沓駄かせる○



一
 三月廿三日葛山ヨリ焼木三駄付ル
 ○湯山順作様ヨリ紙ノしほりぎ御
 むし申なり○此代ニしろかわを五
 十枚上ル○西川初太郎君隠居ニテ
 弘法大師講ある○池谷七平様へ茅
 沓駄かせる○

*1 漉いた濡れ紙を重ねて水を絞る
 のに使う木。

三月廿四日
 牛車師葛山ヨリ
 借米中林付ル
 富にあめや荷物へ馬荷かか
 馬荷かかるとりル
 を金拾八錢とられる
 昔山西川権左衛門殿方
 弘法大師講ある半次郎
 金拾錢上ルなり
 尾州名古屋市水谷直次郎殿御宿
 権左衛門殿講中ヨリ金
 三拾錢上ル此金西川
 権左衛門殿方
 かうら紙草式釜焼
 おうら紙草式釜焼
 おうら紙草式釜焼



一 三月廿四日半次郎葛山ヨリ焼木式
 駄付ル富沢あめや荷物へ馬荷かか
 るかしノ代を金拾八錢とられるな
 り○葛山西川権左衛門殿方ニ弘法
 大師講ある半次郎金拾錢上ルなり
 ○尾州名古屋市水谷直次郎殿御宿大
 師講中ヨリ金三拾錢上ル此金西川
 権左衛門殿渡スなり○おうら紙草
 式釜焼○おさた紙を付ル○家内ぬ
 い葛山へたきとり二行○

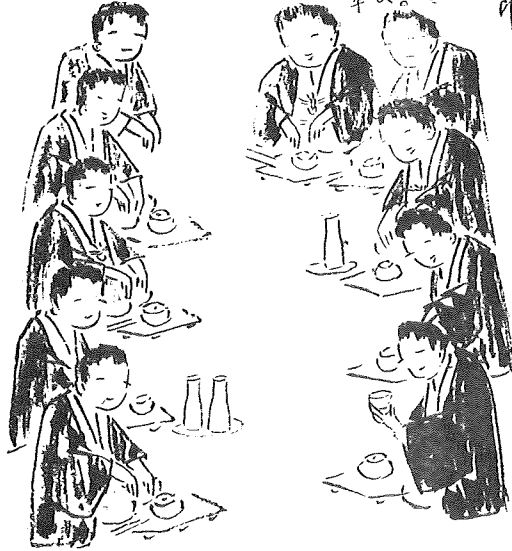


一三月廿五日前夜ヨリ
 拾貳時迄大雨ふる○
 午後五時ニあられふる○半次
 郎半紙十ノ切○おさた雨ふるに付
 幡をる○おうら紙草をもむ○日野
 屋ヨリ酒十銭買○

一三月廿五日前夜ヨリ拾貳時迄大雨
 ふる○後五時ニあられふる○半次
 郎半紙十ノ切○おさた雨ふるに付
 幡をる○おうら紙草をもむ○日野
 屋ヨリ酒十銭買○



三月廿六日半次郎十時迄三ツ又植
 酒山紙草焼〇おさだ
 中湯山祝言前振舞二行御酒半次郎
 いたく〇おうら紙草焼〇おさだ
 紙を付ル〇紙草ちり真田善平様ヨ
 リ七貫目買〇



一 三月廿六日半次郎十時迄三ツ又植
 〇 家内ぬい須山へ紙売二行〇 中湯山様祝言前振舞二行御酒半次郎
 いたく〇 〇 おうら紙草焼〇 おさだ
 紙を付ル〇 紙草ちり真田善平様ヨ
 リ七貫目買〇

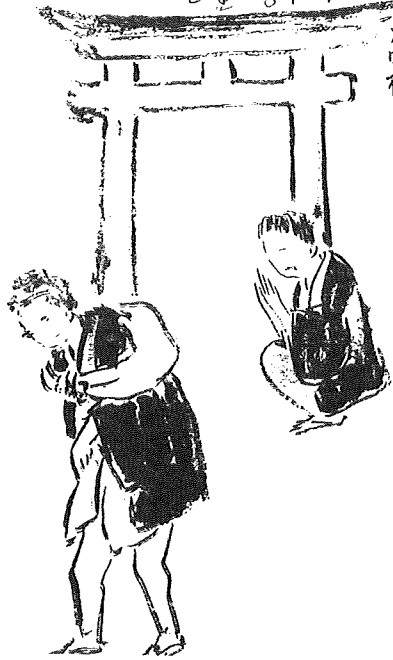
* 1 中湯山家の祝言前の披露宴。

一 三月廿七日葛山ヨリ
 焼木三駄付半次郎馬引。
 雨ふるはめどいほくも。
 家のめも草をつむ。
 らめしをたく。
 紙漉安次殿やすむ。
 日野屋ヨリ酒拾五銭買。
 半次郎イハしを魚に酒を呑なり。



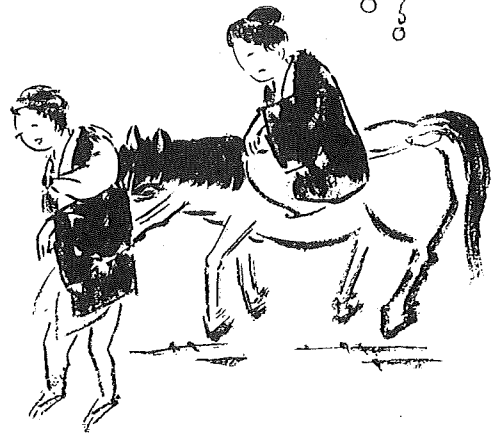
一 三月二十七日葛山ヨリ焼木三駄付
 ル半次郎馬引○雨ふる二付おさだ
 幡をる○家内ぬい草花つむ○おう
 らめしをたく○紙漉安次殿やすむ
 なり○日野屋ヨリ酒拾五銭買○半
 次郎イハし(馬)を魚(魚)に酒を呑なり○

一 三月廿八日半次郎三島行大社ま
 大社まゝ。大社前木屋仙吉殿方へ半紙
 四ノ売。木町柿田屋ヨリ。鄙二ツ買
 佐野久保庄三郎様ヨリ酒壺升買
 庄三郎様ちり紙壺メ売。おうら
 紙草焼。おさだ紙を付ル。此日北風
 ふくさむ。



一 三月二十八日半次郎三島行大社ま
 いる。○大社前木屋仙吉殿方へ半紙
 四ノ売。○木町柿田屋ヨリ鄙二ツ買
 ○佐野久保庄三郎様ヨリ酒壺升買
 ○庄三郎様ちり紙壺メ売。○おうら
 紙草焼。○おさだ紙を付ル。此日北風
 ふくさむ。○

一
 三月二十九日半次郎半紙五メ切
 上之原山見二行
 宮原畑三ツ又
 植ル
 家内ぬい須山へ紙草付二行
 から馬ニてくる
 豊作下和田根上
 伝吉様鄙を上ル
 おうら紙草をに
 る
 おさた紙を付ル
 此日北風ふ
 くさむい



一
 三月二十九日半次郎半紙五メ切
 上之原山見二行
 宮原畑三ツ又
 植ル
 家内ぬい須山へ紙草付二行
 から馬ニてくる
 豊作下和田根上
 伝吉様鄙を上ル
 おうら紙草をに
 る
 おさた紙を付ル
 此日北風ふ
 くさむい

三月三十日石脇大庭
 嘉吉殿妻おみ
 と女はなしに石脇大庭源平様二半
 次郎伊豆佐野鈴木弥助殿へ行此
 夜十二時二伊豆佐野ヨリくる此夜
 二半次郎石脇大庭與三郎へ宿なり
 ○おさた紙付ル○おうら木之は二
 トかく○



一 三月三十日石脇大庭嘉吉殿妻おみ
 と女はなしに石脇大庭源平様二半
 次郎伊豆佐野鈴木弥助殿へ行此
 夜十二時二伊豆佐野ヨリくる此夜
 二半次郎石脇大庭與三郎へ宿なり
 ○おさた紙付ル○おうら木之は二
 トかく○

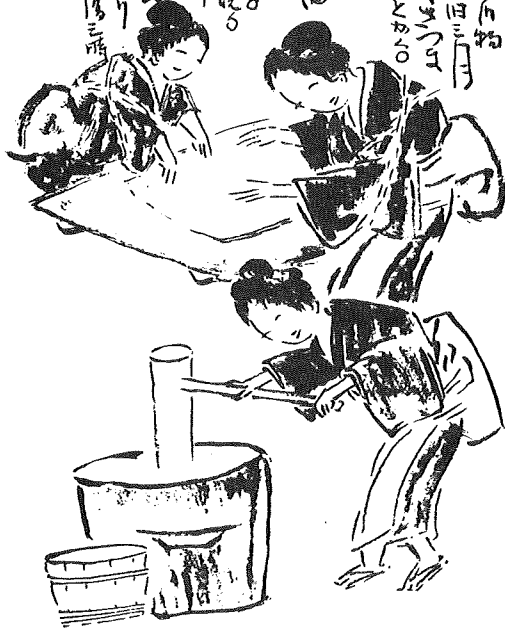


三月三十一日之上原丸杉上へ松苗
 植付二半次郎行○勝又鉄五郎○西
 川清次郎○中川庄平○中川瀧次郎
 ○勝又国三郎勝又興次郎○勝又角
 太郎勝又半次郎○勝又国太郎小林
 伊三郎○勝又金次○勝又乙吉○市
 川角太郎勝又佐十郎○勝又惣七○
 湯山順作○松苗式千四百本植なり
 ○おうら豊作こいを入ルなりおさ
 た紙を付ル○此夜三時二須山村寺
 やける二人やけしぬ○

一三月三十一日之上原丸杉上へ松苗
 植付二半次郎行○勝又鉄五郎○西
 川清次郎○中川庄平○中川瀧次郎
 ○勝又国三郎勝又興次郎○勝又角
 太郎勝又半次郎○勝又国太郎小林
 伊三郎○勝又金次○勝又乙吉○市
 川角太郎勝又佐十郎○勝又惣七○
 湯山順作○松苗式千四百本植なり
 ○おうら豊作こいを入ルなりおさ
 た紙を付ル○此夜三時二須山村寺
 やける二人やけしぬ○

*1 須山の天岳寺が火事で焼ける。

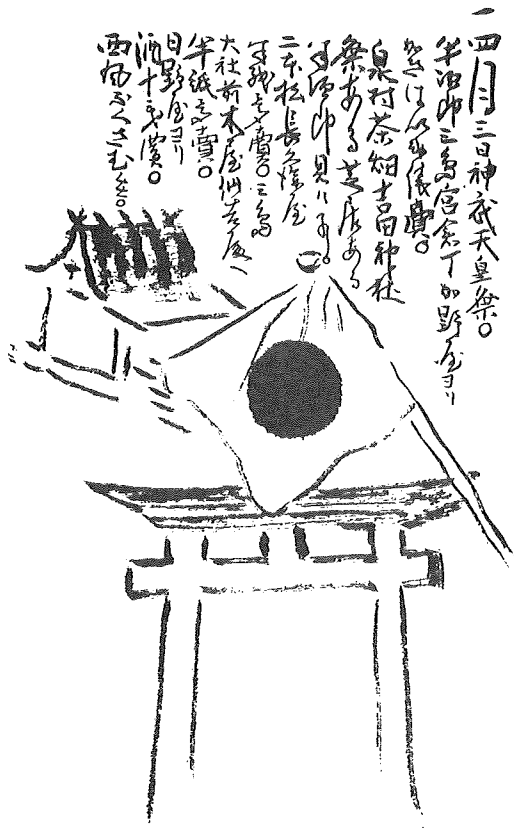
一月一日 餅つき
 野原餅つき
 二百世の半次郎さま
 くららのねあとかく
 三ツ又と植ル
 日野屋ヨリ酒
 紙草を焼
 紙漉
 深良新田大竹様へちり半紙百丈
 後三時ヨリ雨ふる



一 四月一日 家内物鄙さま餅つき 旧三
 月二日也 ○半次郎さまくららのく
 ねあとかく ○三ツ又を植ル ○日野
 屋ヨリ酒式十銭買 ○此酒紙漉安殿
 ト呑なり ○おうら紙草を焼 ○中川
 助次郎殿ヨリ紙草しび十五貫目買
 ○深良新田大竹様へちり半紙百丈
 売 ○後三時ヨリ雨ふる ○



一 四月二日旧三月三日鄙さまを祭ル
 なり○農作仕合ある○半次郎半紙
 八メ切○此十日迄雨ふる○日野屋
 ヨリ酒式十銭買○



一 四月三日神武天皇祭。○半次郎三島宮倉丁加野屋ヨリ
 泉村茶畑吉田神社祭ある芝居あ
 る半次郎見ルなり。○二本松長久保
 屋半紙売メ売。○三島大社前木屋仙
 吉殿へ半紙売メ売。○日野屋ヨリ酒
 十銭買。○西風ふくさむ。〰〰〰

一 四月三日神武天皇祭。○半次郎三島
 宮倉丁加野屋ヨリかきはい式儀買
 ○泉村茶畑吉田神社祭ある芝居あ
 る半次郎見ルなり。○二本松長久保
 屋半紙売メ売。○三島大社前木屋仙
 吉殿へ半紙売メ売。○日野屋ヨリ酒
 十銭買。○西風ふくさむ。〰〰〰

一 四月四日長田為吉殿
 半次郎十一時迄田作
 作和上之原山ヨリ焼木三
 畧切半次郎馬ニテ付ル
 古田和吉君妻おまき女三
 島ヨリかきはい武儀馬二
 付ル○おうら紙草二釜に
 酒十錢買○



為
 一 四月四日長田為吉殿半次郎十一時
 迄田作切○上之原山ヨリ焼木三
 畧切半次郎馬ニテ付ル○古田和吉
 君妻おまき女三島ヨリかきはい武
 儀馬二付ル○おうら紙草二釜に
 酒十錢買○

一 四月五日之上原字

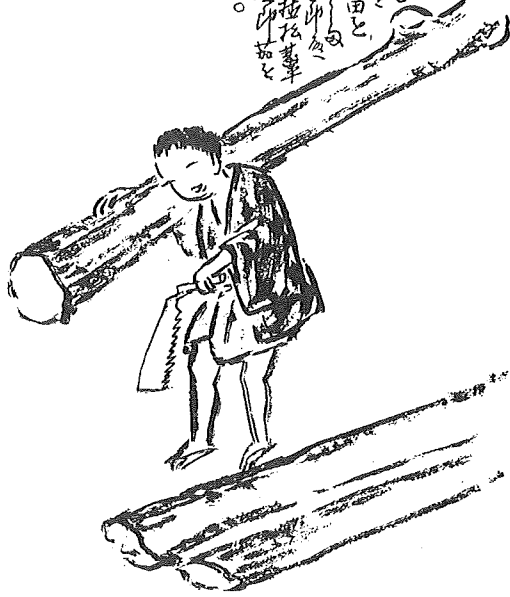
平六澤杉苗植
 西川瀧次郎。湯山一。
 中川庄平。中川瀧次郎。
 湯山金次郎。湯山土佐作。
 勝又國三郎。勝又與次郎。
 勝又角太郎。勝又半次郎。
 勝又金太郎。勝又乙吉。
 勝又小林伊三郎。勝又七郎。
 勝又市川角太郎。勝又佐藤由太郎。
 勝又佐十郎。勝又勝宗七。
 勝又佐藤由太郎。勝又土屋瀧藏。
 勝又湯川冬夫。勝又大森勝次郎。
 勝又杉本宇平次。勝又杉本岩松。
 勝又大森松藏。勝又杉本三平。
 勝又古田榮七。勝又古田長三郎。
 勝又古田象吉。勝又杉苗四千本植なり。



一 四月五日上之原字平六澤杉苗植二

- 行西川清次郎○湯山一○中川庄平
- 中川瀧次郎○湯山金次郎○湯山
- 庄作○勝又國三郎○勝又與次郎○
- 勝又角太郎○勝又半次郎○勝又金
- 次○小林伊三郎勝又乙吉○市川角
- 太郎勝又佐十郎○勝宗七○佐藤由
- 藏○古田和吉本田良藏○龜井清藏
- 湯川冬夫○大森勝次郎土屋瀧藏
- 杉本宇平次杉本岩松○大森松藏
- 杉本三平○古田榮七○古田長三
- 郎○古田象吉○杉苗四千本植なり

四月六日 佐野原下駄屋
 原下駄屋 桐木九本
 賣代金六円請取
 家内ぬいおうら
 上之原平六沢松木切二行
 〇半次郎
 こが植ル
 〇ニトまめをまく
 〇三ツ種まく
 〇三ツ又苗を八百本植ルなり
 〇おさた紙を付ル
 〇石脇大庭與三郎殿へ繩しびをかやす
 〇佐野植松甚平様
 酒式十八錢買
 〇半次郎茄をふせる
 〇薩摩芋をふせる
 〇此夜二雨ふる〇



一 四月六日佐野原下駄屋^{*1} 桐木九本
 売代金六円請取 〇家内ぬいおうら
 上之原平六沢松木切二行 〇半次郎
 こが植ル 〇ニトまめ^{*2}をまく 〇三ツ
 種まく 〇三ツ又苗を八百本植ルな
 り 〇おさた紙を付ル 〇石脇大庭與
 三郎殿へ繩しびをかやす 〇佐野植
 松甚平様^{*3} 酒式十八錢買 〇半次郎
 茄をふせる 〇薩摩芋をふせる 〇此
 夜二雨ふる 〇

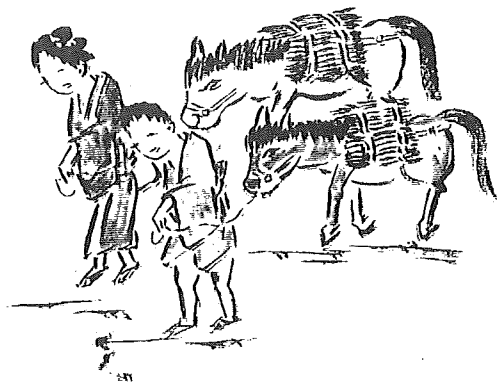
*1 佐野の下原の下駄屋。
 *2 二度豆。エンドウのこと。
 *3 ナスの苗を植え付ける。

一 四月七日雨ふる。農し會ある。○半
 次郎三ツ苗植ルなり。○おさた石脇
 大庭與三郎殿へ半紙五ノ渡スなり
 ○おうらあめふるに付休。○豊作手
 本代四錢八厘渡ス。○半次郎疝氣病
 ニてこしいたむ此夜二灸をすへる
 あつい~~~~~ ○勝又國
 三郎殿はなしある。○



一 四月七日雨ふる。農し會ある。○半
 次郎三ツ苗植ルなり。○おさた石脇
 大庭與三郎殿へ半紙五ノ渡スなり
 ○おうらあめふるに付休。○豊作手
 本代四錢八厘渡ス。○半次郎疝氣病
 ニてこしいたむ此夜二灸をすへる
 あつい~~~~~ ○勝又國
 三郎殿はなしある。○

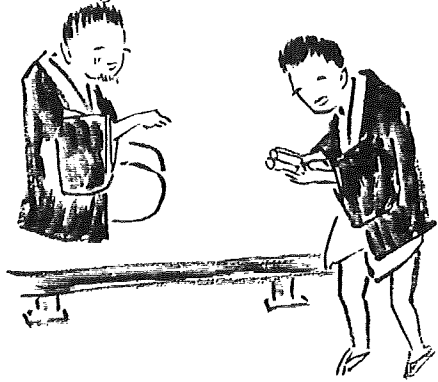
一四月八日の上原平六澤
 松木澹三田半沙中○
 上の肘又喜市殿付ル作
 日用馬○おうら馬引
 白用馬○おうら馬引○
 紙漉安次殿付○
 紙漉組長ヨリ申さるるの
 あつや○
 ひのやヨリ酒十銭買○



一四月八日之上原平六澤松木燒き四
 駄半次郎切○上ヶ田勝又喜市殿付
 ル豊作日用ニて馬方○おうら馬引
 ○此日雲ルおさためしを燒○紙漉
 安次殿付○此夜組長ヨリ申きかせ
 る事ある也○ひのやヨリ酒十銭買
 ○

四月九日 三月十日

金比羅神社祭○半次郎
 三ツ又苗と植ル○上之原
 平六澤松代金壱円勝又市太郎様使
 定使勝又鉄五郎殿息子栄吉殿二渡
 スなり○佐野久保庄三郎様ヨリ酒
 壱升買代金三拾銭払○二本松長久
 保屋半紙壱メ売○下和田ヨリ紙草
 しび式駄買代金五円渡ス也○須山
 渡辺福太郎様ヨリ紙草しび拾壱貫
 目買○二本松下油屋ちり半紙壱メ
 売○石油壱升買○紙漉安次殿ニ金
 五十銭渡ス○



一 四月九日 三月十日 金比羅神社祭
 ○半次郎 三ツ又苗を植ル ○上之原
 平六澤松代金壱円勝又市太郎様使
 定使勝又鉄五郎殿息子栄吉殿二渡
 スなり ○佐野久保庄三郎様ヨリ酒
 壱升買代金三拾銭払 ○二本松長久
 保屋半紙壱メ売 ○下和田ヨリ紙草
 しび式駄買代金五円渡ス也 ○須山
 渡辺福太郎様ヨリ紙草しび拾壱貫
 目買 ○二本松下油屋ちり半紙壱メ
 売 ○石油壱升買 ○紙漉安次殿ニ金
 五十銭渡ス ○

一
四月十日雨ふる。○半次郎半紙八
切。○おうら風病にてやすむ。○此紙
五ノ石脇大庭與三郎殿へ上ル。○岩
瀬重吉殿にて無尽ある半次郎金壺
円式十五銭仕金也。○岩瀬十吉君二
て御酒いただくなり外ニすし魚で
るなり。○

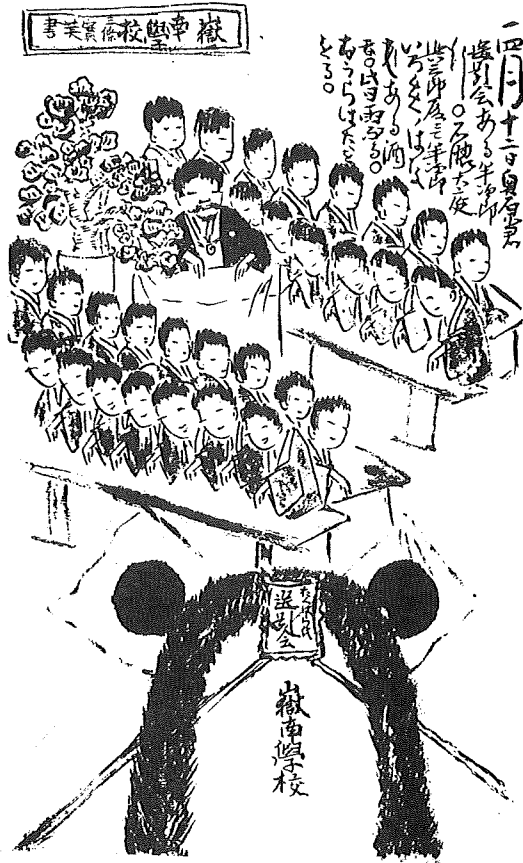


一
四月十日雨ふる。○半次郎半紙八
切。○おうら風病にてやすむ。○此紙
五ノ石脇大庭與三郎殿へ上ル。○岩
瀬重吉殿にて無尽ある半次郎金壺
円式十五銭仕金也。○岩瀬十吉君二
て御酒いただくなり外ニすし魚で
るなり。○

一 四月十一日之上原平六澤にて半次郎松ノ焼木沓駄切○おさた紙を付ル○半次郎小麦へこいを五ヶかける○おうら蕎麦を打○日野屋ヨリ酒式十銭買○石脇大庭與三郎上ヶ田勝又喜市二はなしある○半次郎三名にて酒呑○ひの屋ヨリしほ沓^(一)買○



一 四月十一日之上原平六澤にて半次郎松ノ焼木沓駄切○おさた紙を付ル○半次郎小麦へこいを五ヶかける○おうら蕎麦を打○日野屋ヨリ酒式十銭買○石脇大庭與三郎上ヶ田勝又喜市二はなしある○半次郎三名にて酒呑○ひの屋ヨリしほ沓^(一)買○



一四月十二日奥原君送別会ある半次郎行○石脇大庭與三郎殿にて半次郎いろくはら氏送別会 嶽南学校

一四月十二日奥原君送別会ある半次郎行○石脇大庭與三郎殿にて半次郎いろくはら氏送別会 嶽南学校

嶽南学校 三條實美書

おくはら氏送別会 嶽南学校

四月十三日川北辰蔵殿宮原畑こい
 入ル内之石垣をつむ手間金貳円八
 十銭ニ渡スなり○半次郎九六銚手
 間する○おうら木之はかく○おさ
 だ紙を付ル○家内ぬい紙草をもむ
 ○富士郡安居山村佐野三郎平殿長
 男市太郎殿旧五月手間二五月せつ
 十日前ヨリたノむなり○三郎平殿
 二金貳円渡ス也○石脇ヨリ酒十銭
 買○前夜二大雨ふる雷成大川ニ水
 出ル○



一四月十三日川北辰蔵殿宮原畑こい
 入ル内之石垣をつむ手間金貳円八
 十銭ニ渡スなり○半次郎九六銚手
 間する○おうら木之はかく○おさ
 だ紙を付ル○家内ぬい紙草をもむ
 ○富士郡安居山村佐野三郎平殿長
 男市太郎殿旧五月手間二五月せつ
 十日前ヨリたノむなり○三郎平殿
 二金貳円渡ス也○石脇ヨリ酒十銭
 買○前夜二大雨ふる雷成大川ニ水
 出ル○

*1 くろくわ。石を積むこと。
 *2 五月節句か。



一 四月十四日勝又市太郎様家根手間
 二 半次郎行○おうら紙草焼○おさ
 だ紙を付ル○豊作休也○家内ぬい
 平六沢ヨリ焼木壺駄切○古田和吉
 君二勝又徳蔵君ト角力とるなり○

一 十五日半次郎勝又市太郎様家根ふ
 きノ手間行○川北辰蔵殿九六鍬ニ
 くる○家内ぬい印野村ヨリ長塚迄
 紙売二行此夜萩原山木屋宿○



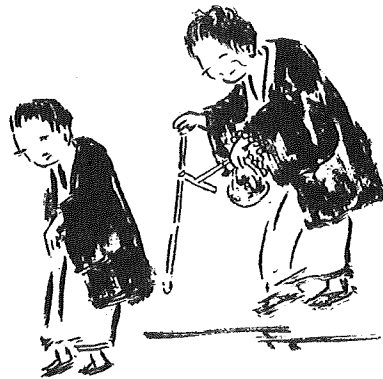
一 四月十六日平六澤ヨリ半次郎松ば
 壱駄付ル○宮原畑ケ半次郎作ル○
 川北辰藏殿後二時迄石垣つむ○お
 うら馬屋こいを田へかつくなり○
 勝又市太郎様母様ヨリ家根棟祭餅
 いた、くなり○おさた紙を付ル○
 紙漉安次殿休○家内ぬい印野ヨリ
 くる○日野屋ヨリ酒拾五銭買○

四月十七日おうら母と芋めをみる
 つくね芋と植ル○草もろこ
 とまろく○半紙五メ切○
 おうら木まは一トかく○
 おうらめん平一トかく○
 権名と然切馬二て付ル○
 紙を付ル○紙漉安次殿風病二て休
 神漉安次殿風病二て休○
 日野屋ヨリ酒十銭買○奥原良吉
 奥原良吉と佐野原
 近○豊作送り申上ル○



一 四月十七日おうら母と芋めをみる
 半次郎つくね芋を植ル○草もろこ
 *
 しをまく○半紙五メ切○おうら木
 之は一トかく○家内ぬい平六沢ヨ
 リ焼木老駄切馬二て付ル○おさだ
 紙を付ル○紙漉安次殿風病二て休
 ○日野屋ヨリ酒十銭買○奥原良吉
 君を佐野原迄て豊作送り申上ル○

*1 馬の飼料用に植える葉もろこし
 のこと。



一 四月十八日半次郎母様庄園寺様ニ
 て念仏ある行○おうら紙草三釜焼
 ○半次郎上之原ヨリ焼木三駄付ル
 ○おさだ紙を付ル○川北辰藏殿妻
 二九六鍬手間金貳円八十錢渡スな
 り○紙漉安次殿ニ金壹円渡スなり
 ○安次殿風病ニて休也○日野屋ヨ
 リ酒十錢買

一四日三時迄雨ふるもつらぬやぶぬ
 上原権本より三行り。○半次郎
 馬四駄付止。○おうら紙草三釜。○
 日野屋ヨリ酒十錢買。○惣次湯山詮様へ三十
 式年分金三十一錢六厘納なり。○此
 夜二勝又茂十郎君にて弘法大師講
 あり。後十時より三時迄大雨ふる。

一廿日十時迄雨ふるもつらぬやぶぬ
 苗場としり。○長田為吉殿十時迄
 十時迄あせり。○後三時迄こいを六か
 けり。○後三時ヨリ長田為吉殿麦作切
 り。○半次郎芋めをみる為吉殿芋二
 かけり。○家内ぬい石脇植松彦
 太郎つきやへ蕎麦小麦をひき二行
 〆。○後四時ヨリ北風ふくさむい。○
 豊作大畑弘法大師さまへ行。○旧三
 月廿一日豊作大畑弘法大師さまへ行。○日野屋ヨリ酒十錢買。



為

一四月十九日おさだ二母上之原焼木
 とり二行。○半次郎馬にて四駄付ル
 ○おうら紙草三釜にる。○日野屋ヨ
 リ酒十錢買。○惣次湯山詮様へ三十
 式年分金三十一錢六厘納なり。○此
 夜二勝又茂十郎君にて弘法大師講
 ある大雨ふる。○

一廿日十時迄雨ふるもつらぬやぶぬ
 場おこし二行長田為吉殿十時迄あ
 せとり。○十二時迄こいを六かか
 ける。○後三時ヨリ長田為吉殿麦作切
 ○半次郎芋めをみる為吉殿芋二こ
 いをかける。○家内ぬい石脇植松彦
 太郎つきやへ蕎麦小麦をひき二行
 ○後四時ヨリ北風ふくさむい。○
 〆。○旧三月二十一日豊
 作大畑弘法大師さまへ行。○日野屋
 ヨリ酒十錢買。○

*1 大畑にまつられている弘法大師
 の祭り。

二月廿一日

為

勝久前大作
半治作つる
以て敷の長田
為る後十時迄
休場をこす
十一時ヨリ
細き作切の紙
うらま作切
高名の紙
各庄庄主の
酒四杯
郡内吉田へ
賣る紙
久年木苗
代金



為

一 四月廿一日勝又角太郎半次郎馬つ

くろいノ番○長田為吉殿十時迄苗

代場をこす○十一時ヨリ狐塚畑麦

作切○おうら麦作切○おさた紙を

付ル○佐野久保庄三郎様ヨリ酒四

升買○ちり半紙壺ノ庄三郎様へ売

○郡内吉田へ久年木苗を売代金壺

円六十銭受取○

一 四月廿二日組長勝又角太郎殿ヨリ
 申さる事あり。○此日北雨ふる
 皆山雨ふる事あり。○外川彦
 外川彦より弘法大師、
 行者二灸をたしして心よく
 了り。○半次郎方にて藥湯を立ル
 程之に平林入湯くる。○



一 四月廿二日組長勝又角太郎殿ヨリ
 申さかせあるなり○此日北雨ふる
 さむい~~~~~ ○外川彦
 八君にて弘法大師ノ行者二灸をだ
 していた、く*iなり○半次郎方にて
 藥湯を立ル勝又仁平様入湯二くる
 ○

*1 弘法大師堂にいる修験者に灸を
 もらう。

一 四月廿三日惣代ヨリ
 申付大そうじあしほなち
 ありと紙を付ル
 紙海客夜をとり休
 半次郎妻めいめいと
 焼〇十二時ヨリおうら
 馬を付ル半次郎
 おうら芋と植ル
 真田富太郎君方にて
 弘法大師講ある
 半次郎あり



一 四月廿三日惣代ヨリ申付大そうじ
 すすはき也^{*1}〇おさだ紙を付ル〇紙
 渡安次殿上ケ田行休〇半次郎妻ぬ
 いめしを焼〇十二時ヨリおうら馬
 二てこいを付ル半次郎おうら芋を
 植ル〇真田富太郎君方にて此夜二
 弘法大師講ある半次郎家内行〇

*1 中湯山家の大掃除、煤掃きを小
 作達がする。

一 四月廿四日 甘んぢら半次郎
 芋種子の紙漉安殿
 浴言ふみ休のぬい
 我と母の須山宿
 沼津平町秋山紙屋
 五百目買
 大雨ふる

一 廿五日 半次郎 足いたむ二付病院
 佐良様みていた、くなり御薬七銭
 いた、くなりぬい須山ヨリくる
 おさた繩をない紙漉安殿
 大雨ふるおにふみ休



一 四月廿四日 おうら半次郎 芋植なり
 ○ 紙漉安次殿 酒二日よいにて休
 ○ おさた紙を付ル ○ 家内ぬい須山へ
 紙二行此夜二須山宿 ○ 此夜二大雨
 ふる ○ 沼津平町秋山紙屋たも五百
 目買 ○

一 廿五日 半次郎 足いたむ二付病院 佐
 良様みていた、くなり御薬七銭い
 た、くなりぬい須山ヨリくる ○
 おさた繩をない ○ 紙漉安次殿 大雨
 ふる水にこる二付休 ○

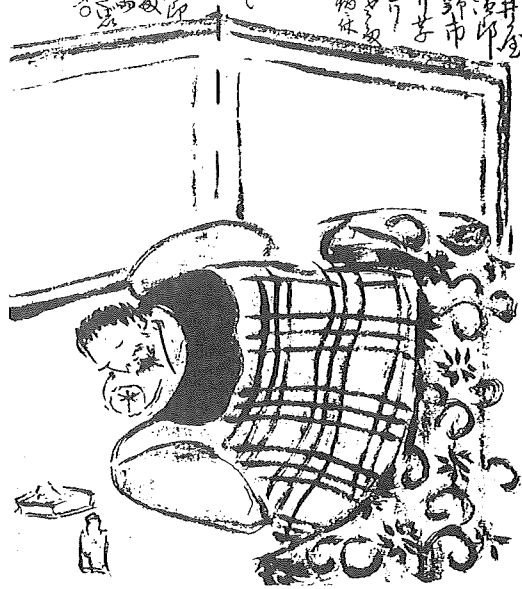
四月廿六日大雨ふる。○紙漉安次殿
 半次郎あんまにもませる。○おうら
 縄ない。○おさた幡をる。○佐藤由蔵
 殿二不動講ある。○日野屋ヨリ酒十
 銭買。○半次郎風病にて休なり。○



一 四月廿六日大雨ふる。○紙漉安次殿
 半次郎あんまにもませる。○おうら
 縄ない。○おさた幡をる。○佐藤由蔵
 殿二不動講ある。○日野屋ヨリ酒十
 銭買。○半次郎風病にて休なり。○

四月廿七日佐野三井屋
 石笠系下買物半次郎
 佐野市
 大田苗代場入むしり草
 とかりにくるるる船ヨリ
 紙草志ひあうらおさた
 たり二行○半次郎風病休

廿八日半次郎初上梅
 やすむしり○長田
 りんぎん苗代場入ル草を
 かり○勝又角太郎殿半次郎
 上原山番○三島加野屋
 物とせり○後四時二
 雷成雨ふる○三島加野屋ヨリかき
 ばい壺俵買○使市太郎殿此代四十
 銭○



一 四月廿七日佐野三井屋^{*1}石笠系品々
 買物半次郎行なり○佐野市太郎苗
 代場へ入ルむしり草をかりにくる
 ○石脇ヨリ紙草しびおうらおさた
 とり二行○半次郎風病二休

一 廿八日半次郎風病にてやすむなり
 ○長田為吉殿苗代場入ル草をかり
 ○勝又角太郎殿半次郎上之原山番
 二行○おさた紙を付ル○後四時二
 雷成雨ふる○三島加野屋ヨリかき
 ばい壺俵買○使市太郎殿此代四十
 銭○

*1 砥石。

四月廿九日半次郎風病にて郡内吉
 田川口あんまに頭らヨリけんひき
 をもませるなり○長田為吉殿苗代
 場へ入ルむしり草をかる○家内ぬ
 い上之原平六沢ヨリ焼木三駄付ル
 ○おうら紙草二釜にる○おさた紙
 を付ル○庄園寺様御母しぬ泉村久
 根へ行○



為

一 四月廿九日半次郎風病にて郡内吉
 田川口^{*1}あんまに頭ら^(か)ヨリけんひき^{*2}
 をもませるなり○長田為吉殿苗代
 場へ入ルむしり草をかる○家内ぬ
 い上之原平六沢ヨリ焼木三駄付ル
 ○おうら紙草二釜にる○おさた紙
 を付ル○庄園寺様御母しぬ泉村久
 根へ行○

*1 山梨県南都留郡河口湖町河口。
 *2 頭の方から肩に掛けて。

一 四月三十日半次郎風病にて頭やめ
 るくやくやく ○勝又豊吉君長男
 庄吉殿半次郎苗代はあらしろをか
 くなり○おうらはなとり○



一 四月三十日半次郎風病にて頭やめ
 るくやくやく ○勝又豊吉君長男
 庄吉殿半次郎苗代はあらしろをか
 くなり○おうらはなとり○

五月一日



上田勝又喜市
 半次郎苗代場
 あかほ
 苗代場
 ぬの苗代場
 本町へ志願
 子平の里種
 赤神みのありたい米
 並山あかほ四升
 ありたい四升
 あかほ米
 西町
 いたけ四升
 池田日肥米
 勝又國三郎君種
 前夜二土芋をこいノ俵式俵ぬ

一五月一日上ケ田勝又喜市半次郎苗
 代場あせをぬる苗代するなりおう
 らおさたぬい苗代二行東町へしふ
 さらい壺升^{*}○黒餅壺升○式升みの
 えりたし式升○葎山子藏壺斗升○
 にしきえりだし四升○あかほ六升
 ○西町こたけ四升○池田日肥五升
 ○葎山式升○勝又國三郎君種まき
 付二くるなり○日野屋ヨリ酒十銭
 買○前夜二土芋をこいノ俵式俵ぬ
 すまれる○

* 1 米の品種名。



五月二日家内ぬい三島へ行伊勢善
 ヨリ用紙式貫目買○ちり半紙二メ
 木や富助様売○半次郎風病にて休
 おうら紙草二釜焼○豊作竹子はじ
 めてほる此竹之子になるなり○おさ
 た紙を付ル○紙漉安次殿休○

五月二日家内ぬい三島へ行伊勢善
 ヨリ用紙式貫目買○ちり半紙二メ
 木や富助様売○半次郎風病にて休
 おうら紙草二釜焼○豊作竹子はじ
 めてほる此竹之子になるなり○おさ
 た紙を付ル○紙漉安次殿休○



一 五月三日十二時迄雨ふる家内物苗
 代やき米をつくなり○半次郎半紙
 拾メ切半次郎頭いたむ二付休○お
 うら用紙焼○後壱時ヨリおさた紙
 を付ル○日野屋ヨリ酒十銭買○

*1 蒔き残りの米を焼いて苗代の水
 口に供える。

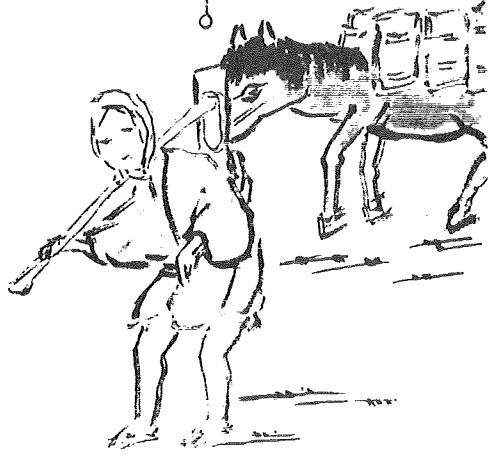
五月四日長田為吉殿
 十時迄こいを和田上畑へ四かかつぐ
 芋植○十半次郎芋植を切○半次郎芋植
 半次郎芋植を切○半次郎芋植
 半次郎芋植を切○半次郎芋植
 半次郎芋植を切○半次郎芋植
 半次郎芋植を切○半次郎芋植



為
 一 五月四日長田為吉殿十時迄こいを
 和田上畑へ^{*}四かかつぐ○芋植○十
 一時ヨリ田麦作を切○半次郎芋植
 いじん豆をまくなり○おうら蚕へ
 くハを上ル○おさた紙を付ル○

*1 富岡中学校グラウンド付近。

五月五日半次郎本堰芝六駄切馬二
 平六沢ヨリ松ば壺駄
 付ル○おうら田麦へこいひきこむ
 ○家内ぬい御殿場へ紙売二行○お
 きた紙を付ル○長田為吉殿田麦作
 切○前夜二下和田油屋前四間やけ
 るなり○



為

一 五月五日半次郎本堰芝六駄切馬二
 て三ト付ル○平六沢ヨリ松ば壺駄
 付ル○おうら田麦へこいひきこむ
 ○家内ぬい御殿場へ紙売二行○お
 きた紙を付ル○長田為吉殿田麦作
 切○前夜二下和田油屋前四間やけ
 るなり○

一 五月六日 旧四月八日 半次郎母様庄園をかさまへ
 行南無阿弥陀仏
 園寺しやかさまへ行南無阿弥陀仏
 半次郎畑麦作切をかほまく
 〇おうらいをつむ
 〇ぬい蚕くわを上ル此
 夜八時二猫子三ツできるなり
 〇



一 五月六日 旧四月八日 半次郎母様庄
 園寺しやかさまへ行南無阿弥陀仏
 〇おうらいをつむ
 〇ぬい蚕くわを上ル此
 夜八時二猫子三ツできるなり
 〇



一 五月七日惣代ヨリ申付本堰村社前
 ニて中川豊様ヨリ町場訓申付ルな
 り○半次郎家内ぬい馬ニて御殿場
 紙売ニ行○おうら紙草を焼○おさ
 た紙を付ル○おうら左い^折びをは
 すいた / / / ○日野屋
 ヨリ酒十銭買○

五月七日惣代ヨリ
 中川豊様ヨリ町場訓
 中川豊様の御殿場
 紙売ニ行○
 紙草を焼○
 おさた紙を付ル○
 おうら左い^折びを
 はすいた / / /
 日野屋ヨリ酒十銭買○

一 五月八日半次郎
 三島行 荒物屋へ半
 紙ノ売 ○佐野三井屋反物壱反買外
 二品々買半次郎頭病ニて石脇大庭
 與三郎方ニて休 ○半次郎頭病ニて
 右耳いたむなり病院相良様ニみて
 いた、くなり ○御薬一日四回分い
 た、くなり ○此日小雨ふる ○

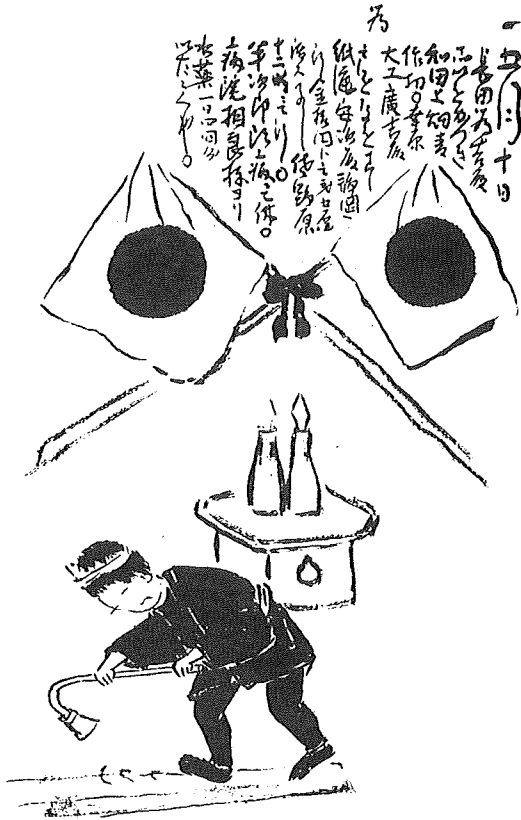


一 五月八日半次郎三島行荒物屋へ半
 紙ノ売 ○佐野三井屋反物壱反買外
 二品々買半次郎頭病ニて石脇大庭
 與三郎方ニて休 ○半次郎頭病ニて
 右耳いたむなり病院相良様ニみて
 いた、くなり ○御薬一日四回分い
 た、くなり ○此日小雨ふる ○

五月九日半次郎頭病にて右耳いた
 む病院相良様ヨリ一日四回分いた、
 くなり○此日西南大風ふく○紙漉
 安次殿此日十二時迄紙をすくすき
 じまい也*1おうら宮原畑草とりに行
 半次郎頭病にてやすむ也○おさた
 紙を付ル○半次郎八日二三島千貫
 とよ戸古場にて頭丸すり也○日野
 屋ヨリ酒式十銭買此酒たかい



*1 春の紙漉きの漉き終い。



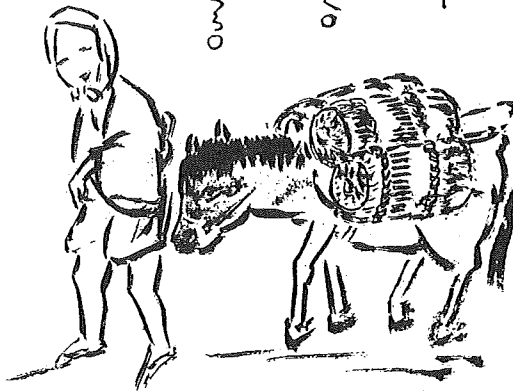
一 五月十日長田為吉殿こいをかつき
 為 和田上畑麦作切○幸原大工廣吉殿
 戸をなす紙漉安次殿静岡へ行金
 拾円ト壹錢五厘渡スなり佐野原十
 二時ニて行○半次郎頭病ニて休○
 病院相良様ヨリ水薬一日四回分
 た、く也○

五月十一日長田為吉殿
 狐塚畑初回と相次作切。
 半次郎をかほまく。
 おうらいびをけらま。
 桑上ル紙を付ル。
 日野屋ヨリ酒十
 錢買。
 相良様ヨリ御薬一日四回分
 いた、く。



為
 一五月十一日長田為吉殿狐塚畑和田
 上畑麦作切○半次郎をかほまく○
 家内ぬいこいをつむ○おうらいび
 をはらすいたむなり休○おさた蚕
 桑上ル紙を付ル○日野屋ヨリ酒十
 錢買○相良様ヨリ御薬一日四回分
 いた、く○

五月十二日長田為吉殿馬二こいを
 四駄付ル○狐塚畑之麦作切○半次
 郎種をとす栗ひべ大唐まく○おう
 らおさたこいをつむ○家内ぬい蚕
 桑を上ル○半次郎こし病ニテいた
 い~~~~~○病院相良様ヨリ
 水薬いたたく一日四回呑なり○日
 野屋ヨリ酒十五銭買○根方高根村
 より輿原様ヨリはがきくる○



為

一 五月十二日長田為吉殿馬二こいを
 四駄付ル○狐塚畑之麦作切○半次
 郎種をとす栗ひべ大唐まく○おう
 らおさたこいをつむ○家内ぬい蚕
 桑を上ル○半次郎こし病ニテいた
 い~~~~~○病院相良様ヨリ
 水薬いたたく一日四回呑なり○日
 野屋ヨリ酒十五銭買○根方高根村
 より輿原様ヨリはがきくる○

一
 五月十三日半次郎半紙八ノ切湯
 山庄作様御母様風病ニ付半次郎御
 見舞申上ルナリ○石脇大庭與三郎
 殿娘こと風病ニノ見舞二行○佐野
 久保庄三郎様ちり紙壹ノ九十銭売
 酒四升五合買此酒代四十五銭借用
 也○御料地神山分草かり場三十九
 番代金壹円五銭勝又清太郎殿二渡
 スナリ○



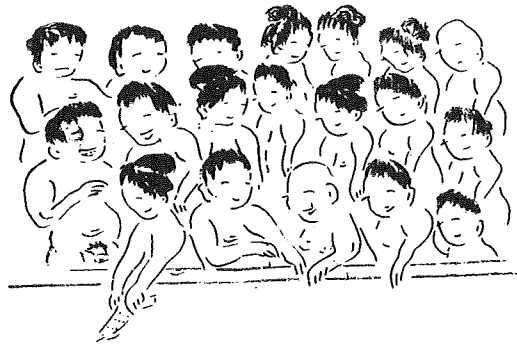
五月十三日半次郎半紙八ノ切湯
 山庄作様御母様風病ニ付半次郎御
 見舞申上ルナリ○石脇大庭與三郎
 殿娘こと風病ニノ見舞二行○佐野
 久保庄三郎様ちり紙壹ノ九十銭売
 酒四升五合買此酒代四十五銭借用
 也○御料地神山分草かり場三十九
 番代金壹円五銭勝又清太郎殿二渡
 スナリ○

*1 大野原御料地の御殿場市神山
 内。

一
五月十四日半次郎姥子へ
入湯行り家内ぬい馬にて
姥子迄送りなり○
十時半に姥子へ行

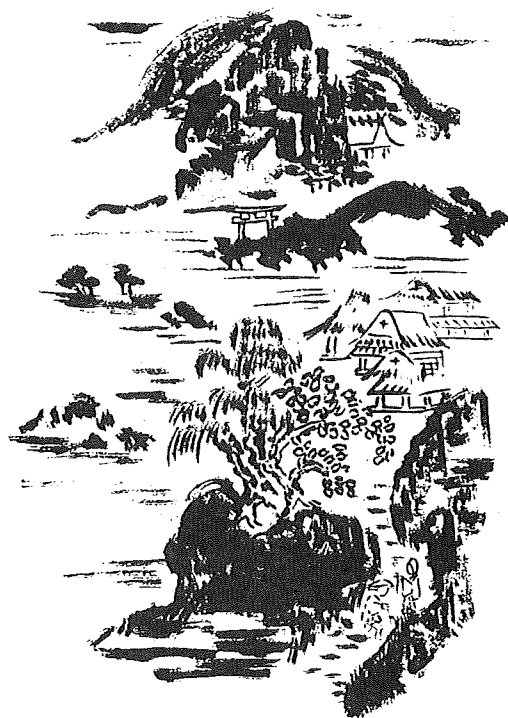


一
五月十四日半次郎姥子へ入湯二行
家内ぬい馬にて姥子迄送りなり○
十時半に姥子へ行

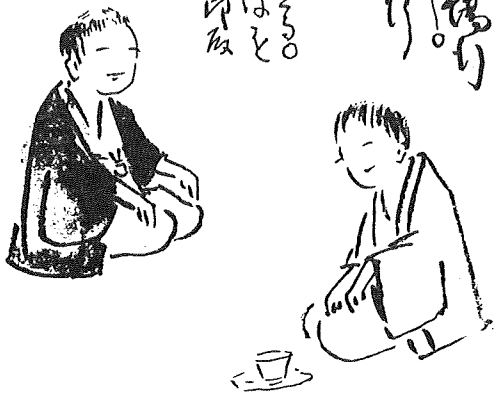








五月廿二日半次郎役場行金壺円八
 十八銭納なり○湯山半七郎様半次
 郎行金箱見なり○家内ぬい蚕へ桑
 を上ル○おうらおさだ桑をとる○
 十二時ヨリ半次郎をかほを作るな
 り○勝又長太郎殿病見舞二金二十
 錢上ル○
 病見舞之金壺円八上ル○



一五月廿二日半次郎役場行金壺円八
 十八銭納なり○湯山半七郎様半次
 郎行金箱見なり○家内ぬい蚕へ桑
 を上ル○おうらおさだ桑をとる○
 十二時ヨリ半次郎をかほを作るな
 り○勝又長太郎殿病見舞二金二十
 錢上ル○

五月廿三日半次郎狐塚麦作切
 〇お
 うら
 おさ
 だ
 桑
 を
 と
 る
 〇半
 次
 郎
 足
 い
 た
 む
 な
 り
 〇此
 天
 キ
 あ
 つ
 い
 く
 〇
 ひ
 の
 や
 や
 り
 酒
 十
 銭
 買
 〇



一 五月廿三日半次郎狐塚麦作切
 〇お
 うら
 おさ
 だ
 桑
 を
 と
 る
 〇半
 次
 郎
 足
 い
 た
 む
 な
 り
 〇此
 天
 キ
 あ
 つ
 い
 く
 〇
 ひ
 の
 や
 や
 り
 酒
 十
 銭
 買
 〇

一 五月廿四日為吉殿
 おうらおさだ半
 次郎十時迄桑をとる十一時迄雨ふ
 る○為吉殿あぜをきりこむ○半次
 郎足病にてやすみ○日野屋ヨリ酒
 十銭買○家内ぬい蚕桑を上ル○
 為



為
 一 五月廿四日為吉殿
 おうらおさだ半
 次郎十時迄桑をとる十一時迄雨ふ
 る○為吉殿あぜをきりこむ○半次
 郎足病にてやすみ○日野屋ヨリ酒
 十銭買○家内ぬい蚕桑を上ル○

一
 五月廿五日為吉殿馬二こいを六駄
 付ル小豆あづきまくおさきをまくお
 唐まくおおさたこいをつむお
 後二時ヨリ為吉殿あぜ
 をきりこむお家内ぬい蚕桑を上ル
 沼津魚屋文七殿さかな買お
 小豆あづきまくおおさたこいをつむお
 唐まくおおさたこいをつむお
 後二時ヨリ為吉殿あぜ
 をきりこむお家内ぬい蚕桑を上ル
 沼津魚屋文七殿さかな買お



為

一 五月廿五日為吉殿馬二こいを六駄
 付ル小豆あづきまくおさきをまくお
 唐まくおおさたこいをつむお
 後二時ヨリ為吉殿あぜ
 をきりこむお家内ぬい蚕桑を上ル
 沼津魚屋文七殿さかな買お

*1 ササギ。莢が細長い豆。莢ごと
 食べる。

五月廿六日為吉殿こいを馬に付ル
 狐塚畑之麦作切
 〇十一時ヨリ後
 二時迄あぜを切こむ
 〇為吉殿桑を
 切半次郎桑を切
 〇おうらおさだ桑
 をとる
 〇家内ぬい蚕桑を上ル
 〇日
 野屋酒八錢買半次郎此酒吞
 〇此夜
 二兩ふる
 〇



為

一 五月廿六日為吉殿こいを馬に付ル
 〇 狐塚畑之麦作切
 〇 十一時ヨリ後
 二時迄あぜを切こむ
 〇 為吉殿桑を
 切半次郎桑を切
 〇 おうらおさだ桑
 をとる
 〇 家内ぬい蚕桑を上ル
 〇 日
 野屋酒八錢買半次郎此酒吞
 〇 此夜
 二兩ふる
 〇

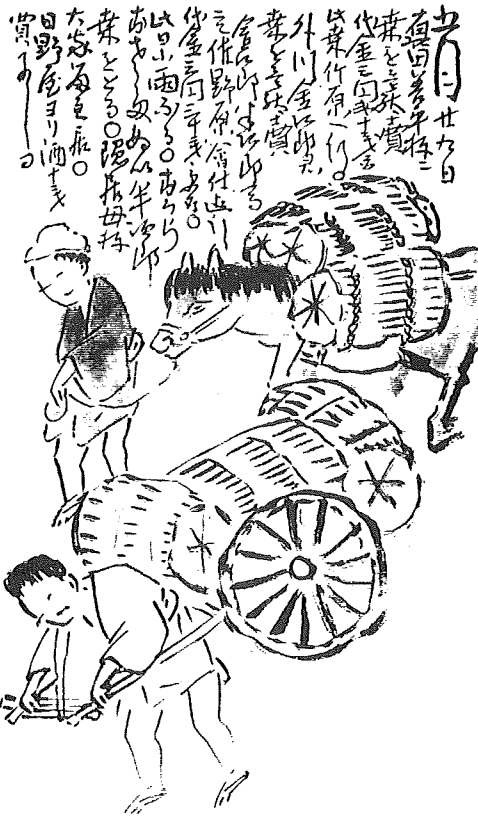
一 五月廿七日
 半次郎 吉殿
 松味好様 耳
 みるらさだ桑
 為をとる
 十時迄
 狐塚畑をかほへこいをかける
 後二時ヨリ為吉あぜを切こむ
 佐野下原若松屋半紙壺メ売代式十
 銭受取
 久保庄三郎様ヨリ酒壺升
 買代三十五銭払
 半次郎桑を切二
 行
 大森勝次郎殿へ金拾円納使ぬ
 行なり
 豊作日用休



一 五月廿七日半次郎二本松味好様二
 耳みていたたく也○おうらさだ桑
 為をとる○為吉殿十時迄あぜを切こ
 む○狐塚畑をかほへこいをかける
 ○後二時ヨリ為吉あぜを切こむ○
 佐野下原若松屋半紙壺メ売代式十
 銭受取○久保庄三郎様ヨリ酒壺升
 買代三十五銭払○半次郎桑を切二
 行○大森勝次郎殿へ金拾円納使ぬ
 行なり○豊作日用休○



一 五月廿八日西川清次郎殿へ桑を売
 駄売代金貳円六十銭取○おさたお
 うら半次郎桑をとる○半次郎足病
 ニていたむ○隠居母様るすい也○
 天子様御生日祭なり○御神酒を上
 ル○



五月廿九日
 真田善平様ニ
 売代金三円式十銭取此桑竹原へ行
 外川金次郎君桑を壹駄売金次郎
 半次郎馬ニて佐野原会仕迄行代金
 三円三十銭受取○此日小雨ふる○
 おうらおさたぬい半次郎桑をとる
 ○隠居母様大家留主居○日野屋ヨ
 リ酒十銭買なり○
 大志るを瓶○
 日野屋ヨリ酒十銭
 買なり○

一 五月廿九日真田善平様ニ桑を壹駄
 売代金三円式十銭取此桑竹原へ行
 ○外川金次郎君桑を壹駄売金次郎
 半次郎馬ニて佐野原会仕迄行代金
 三円三十銭受取○此日小雨ふる○
 おうらおさたぬい半次郎桑をとる
 ○隠居母様大家留主居○日野屋ヨ
 リ酒十銭買なり○

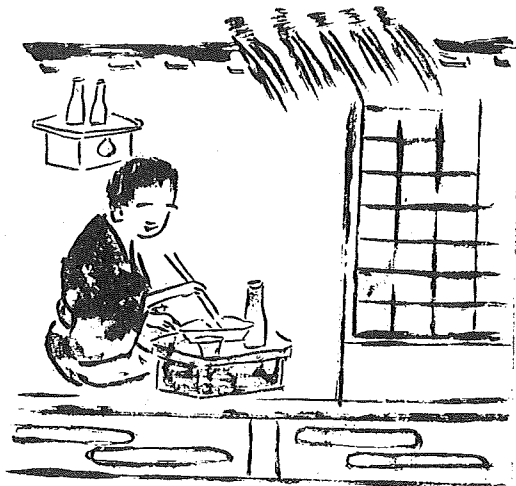
一
五月三十日外川金次郎殿
 桑と拾上六貫五匁賣代金
 六貫五百目売代金壹円六十銭受取
 ○半次郎桑木切○蚕上ル家内物も
 ず二入ルなり○此日二新堰ある○
 湯山半七郎様へ金拾円納五月分利
 子六十式銭五厘上ルなり○後六時
 湯山隠居様にて御酒いた、く○伊
 豆松崎村佐藤直次郎宿静岡へ行○
 湯山半七郎様、
 金拾円納五月分利子
 六貫五百目売上ルの
 湯山半七郎様、
 湯酒、く、
 伊豆松崎村宿静
 岡へ行。



一五月三十日外川金次郎殿二桑を拾
 六貫五百目売代金壹円六十銭受取
 ○半次郎桑木切○蚕上ル家内物も
 ず二入ルなり○此日二新堰ある○
 湯山半七郎様へ金拾円納五月分利
 子六十式銭五厘上ルなり○後六時
 湯山隠居様にて御酒いた、く○伊
 豆松崎村佐藤直次郎宿静岡へ行○

*1 蚕の体が透き通つてくると繭を
 作ろうとする。上族。
 *2 上族した蚕を繭を作らせる用具
 (マブシ)に入れる。

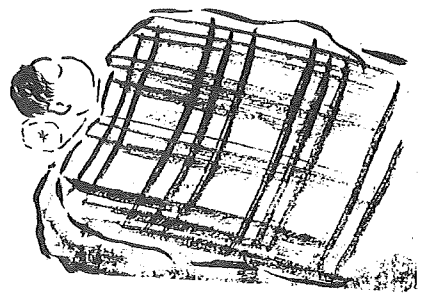
五月三十一日半次郎
 三島行木屋富助様
 尺半紙三丸買○萩ヶ久保
 橋本屋老丸売○半次郎馬草を
 半次郎馬草を○
 蚕上ル○旧五月四日
 家根を御神酒を御神
 酒を御神酒を御神酒を御神



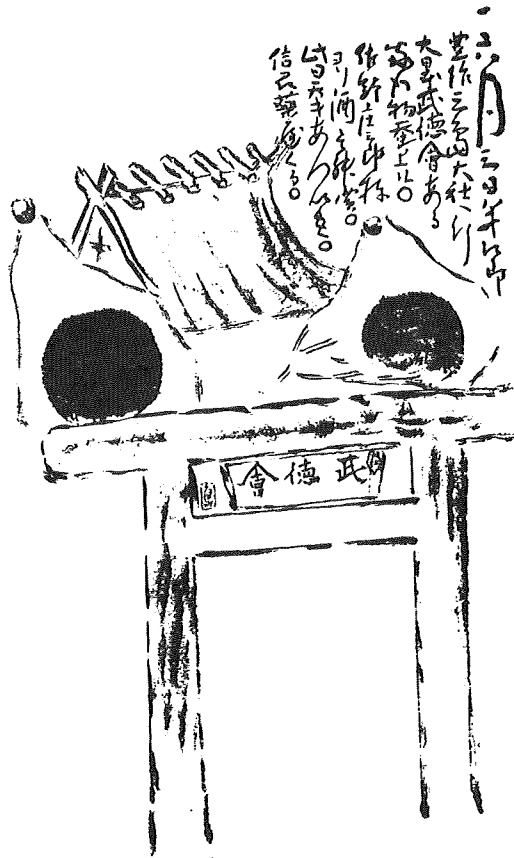
一 五月三十一日半次郎三島行木屋富助様にて尺半紙三丸買○萩ヶ久保橋本屋老丸売○半次郎馬草を○蚕上ル○旧五月四日家根を御神酒を御神酒を御神酒を御神



一 六月一日旧五月五日外川金次郎殿
 二 桑老駄売代金三円式十銭取おさ
 た蚕上ルもすに入ル○おうら半次
 郎桑をとるなり○半次郎四時ヨリ
 酒吞○勝又忠作様ヨリ半次郎隠居
 母二餅をいたくくなり○



一六二日二日家内ぬい須山村へ糸とり
 をたノみに行○おさたおうら蚕上
 ル○半次郎桑を切○四時ヨリ半次
 郎耳病足病ニて休○此日天キあつ
 い



一六〇〇年三月三日
 豊作三郎大社へ行
 大日本武徳会あり
 家内物蚕上ル
 佐野庄三郎様ヨリ酒壺升買
 此日
 天キあついで
 信州薬
 屋くる〇

大社
 武徳会
 久保町

一六月三日半次郎豊作三島大社へ行
 大日本武徳会^{*1}ある家内物蚕上ル〇
 佐野庄三郎様ヨリ酒壺升買〇此日
 天キあついで
 〇信州薬
 屋くる〇

*1 一八九五(明治六)年に設立さ
 れた武術振興を目的とする団体。

一六月四日おさたぬい蚕まいをか
 蚕まらとあく。おうら勝又
 ちる。あうら勝又。國三郎
 蚕上ル手間に行。此日あ
 け日あり。ついで。

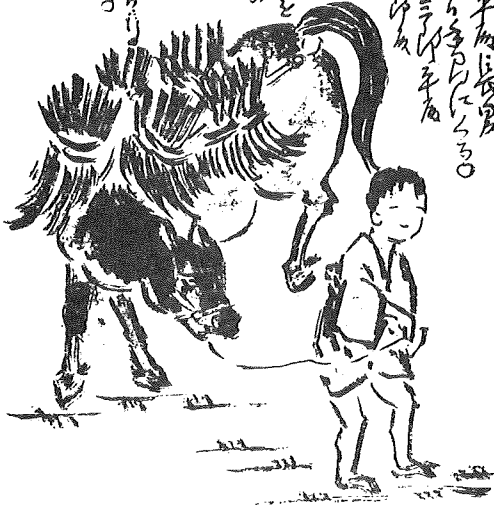


一六月四日おさたぬい蚕まいをか*
 ○半次郎くねをかる○おうら勝又
 国三郎殿蚕上ル手間に行○此日あ
 ついで。○

*1 繭をマブシから掻き取る。

一
六月五日 佐野三郎平殿長男市太郎
市太郎の成日ヨリ三平の多クに
宮原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿

市
六月五日 佐野三郎平殿長男市太郎
市太郎の成日ヨリ三平の多クに
宮原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿
原畑へ小立立ルニ付三郎平殿



市
一六月五日佐野三郎平殿長男市太郎
殿此日ヨリ三十日手間にくる○宮
原畑へ小家立ルニ付三郎平殿手間
にくる○勝又国三郎殿隠居仁平様
蚕上ルニ付おうら十二時迄手間二
行なり○半次郎隠居母様まいをか
きにくる○半次郎小家立に行○富
士山へ笠雲とるなり○日野屋ヨリ
酒式十銭買此酒三郎平殿半次郎吞
○葛山入会へ市太郎ま草かり二行
○大野山へ草巻駄かりに行○

市
一六月五日佐野三郎平殿長男市太郎
殿此日ヨリ三十日手間にくる○宮
原畑へ小家立ルニ付三郎平殿手間
にくる○勝又国三郎殿隠居仁平様
蚕上ルニ付おうら十二時迄手間二
行なり○半次郎隠居母様まいをか
きにくる○半次郎小家立に行○富
士山へ笠雲とるなり○日野屋ヨリ
酒式十銭買此酒三郎平殿半次郎吞
○葛山入会へ市太郎ま草かり二行
○大野山へ草巻駄かりに行○

*1 大野原のこと。

一六月六日宮原畑へ
 小次郎兼吉殿家根をひく
 半次郎家根屋手間○市太郎田をを
 こす草を式駄かる○家内蚕をかく
 ○此日北風雨ふるさむい
 〇日野屋ヨリ酒式十
 錢買〇



一六月六日宮原畑へ小次郎兼吉
 殿家根をひく長田為吉殿釘をひく
 半次郎家根屋手間○市太郎田をを
 こす草を式駄かる○家内蚕をかく
 ○此日北風雨ふるさむい
 〇日野屋ヨリ酒式十
 錢買〇

一六日 七日半に
 豆をまく。○
 市太郎草を
 刈る。○
 おうらおさた小
 豆をまく。○
 家内物かちきかりに付
 餅をつくなり。○



一六月七日半次郎家根をかる。○市太
 郎草を刈駄かる。○おうらおさた小
 豆をまく。○家内物かちきかりに付
 餅をつくなり。○

*1 葺いた屋根の茅を刈りそろえる。
 *2 緑肥のための草や小枝を刈る。

一六月八日惣代ヨリ申付
 物事とあちきかる
 長田為吉三郎平殿山ニて
 半次郎馬に五駄付ル○家内物馬
 屋こいをだす○日野屋酒十五銭買
 為
 日野屋酒十五銭買
 勝又市太郎様ヨリ御せ
 いた、
 く○



一六月八日惣代ヨリ申付かちきかる
 なり○長田為吉三郎平殿山ニてか
 る半次郎馬に五駄付ル○家内物馬
 屋こいをだす○日野屋酒十五銭買
 為
 ○勝又市太郎様ヨリ御せ いた、
 く○



六月九日おうらおさだ長田為吉殿
 ぬい此名田ノ大麦かる○半次郎三
 ツノ種とる○為吉殿馬家こいをか
 つぎ麦をかつき○蚕まい四斗八升
 代金拾七円五十銭売上ケ田勝又喜
 市殿此代金受取なり○石脇大庭常
 吉殿桑代金弍円十銭取○日野屋ヨ
 リ酒十銭買○たたみやわら壱円五
 十銭売○市太郎病ニて休なり○

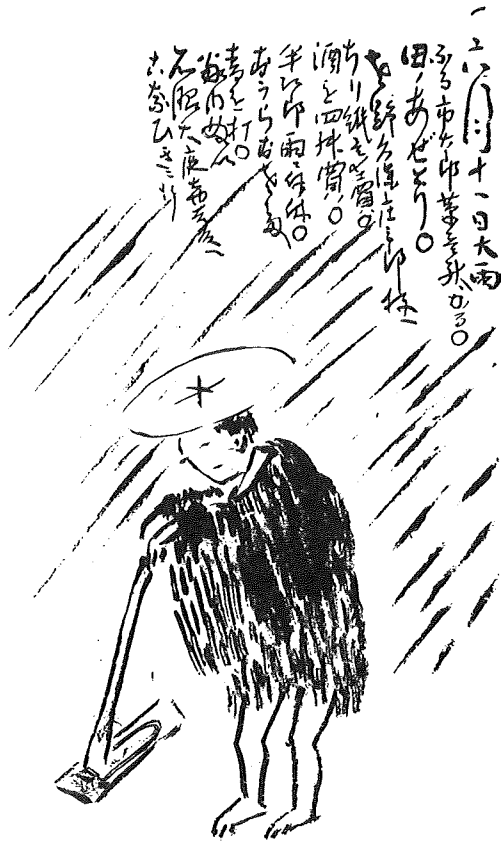
一六月九日おうらおさだ長田為吉殿
 ぬい此名田ノ大麦かる○半次郎三
 ツノ種とる○為吉殿馬家こいをか
 つぎ麦をかつき○蚕まい四斗八升
 代金拾七円五十銭売上ケ田勝又喜
 市殿此代金受取なり○石脇大庭常
 吉殿桑代金弍円十銭取○日野屋ヨ
 リ酒十銭買○たたみやわら壱円五
 十銭売○市太郎病ニて休なり○

*1 紙の原料となるミツマタの種をとる。

一六月十日おさだおうらまを打○半
 次郎田ノ土手草をかる市太郎かち
 き草を式駄かる○おさだ母めしを
 焼○豊作日用ニて休○日野屋ヨリ
 酒十銭買○



一六月十日おさだおうらまを打○半
 次郎田ノ土手草をかる市太郎かち
 き草を式駄かる○おさだ母めしを
 焼○豊作日用ニて休○日野屋ヨリ
 酒十銭買○



一六月十一日大雨
 市太郎草巻を舂る。
 田ノあぜとり。
 紙を賣る。
 酒を四升。
 半次郎雨ニ付休。
 おうらおさ
 家内ぬい石脇大庭喜吉
 殿へこなひき二行

一六月十一日大雨ふる市太郎草巻舂
 かる○田ノあぜとり○佐野久保庄
 三郎様へちり紙巻メ売○酒を四升
 買○半次郎雨ニ付休○おうらおさ
 た麦を打○家内ぬい石脇大庭喜吉
 殿へこなひき二行

六月十二日 十番 ありあけ
 おうら半次郎 さつな
 さーいりり。おなほ
 あぜとり。まるとある
 しとぬい まるとほ
 俵おぼろのの
 隠居母いむに付
 やさむ。



一 六月十二日 おさたおうら半次郎さ
 つまさし二行 ○市太郎あぜとり ○
 麦をかる ○さた母麦をほす俵式俵
 入るなり ○隠居母頭いたむに付や
 すむ ○

一六日 十三日
 長田為吉殿田すきこ
 くる。市太郎あぜ
 をとも田すき番を○
 半次郎土手草をかろ。
 為
 あぜ。お上ケ田勝又喜市長男
 市太郎はなどり。家内ぬい麦をほ
 す三俵入なり。

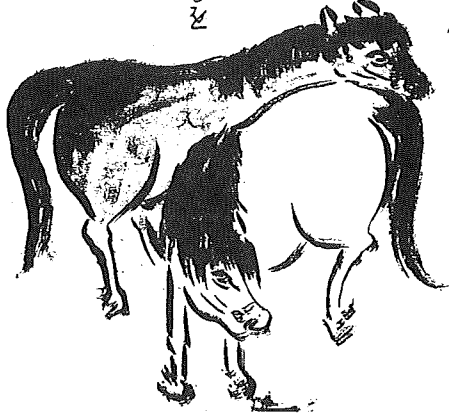


一六月十三日長田為吉殿田すき二く
 る○市太郎あぜをとる田すき番こ
 為
 ○半次郎土手草をかろ○おさたお
 うら麦を打○上ケ田勝又喜市長男
 市太郎はなどり○家内ぬい麦をほ
 す三俵入なり○

*1 馬を使うため順番に田を鋤いていくこと。

一六〇 六月十四日勝又豊吉殿田植おうら

田植おうら。ぬいれ！
あさだ、麦をほす。○
半次郎、あさだ、ぬいれ！
ある。○おうら、ぬいれ！
麦を打上ル。○豊作、半次郎、道豆を
とる。○此日、十二日、二古沢馬喰、
三郎殿馬引辰藏殿馬を引かえる。半次
郎馬家屋栗毛六才馬を入ルなり。○



一六月十四日勝又豊吉殿田植おうら
○ぬい行○おさだ麦をほす○半次
郎おさだ麦をかる○おうらおさだ
麦を打上ル○豊作半次郎円道豆を
とる○此日十二日二古沢馬喰^{*1}与三
郎殿馬引辰藏殿馬を引かえる半次
郎馬家屋栗毛六才馬を入ルなり○

*1 御殿場市古沢の馬を売買する商
売人。
*2 馬を取り替える。

一
 六月十五日 上ケ田勝又喜市殿馬半
 次郎馬二下男市太郎勝又庄吉本田
 勘作○上ケ田市太郎此四名にてあ
 らしろをかく○半次郎土手草をか
 る○おさだおうら馬屋こいを出す
 ○おさた母めしを焼○西川清次郎
 君二女病にて半次郎見舞二行○勝
 又市太郎様妻御栄様めノ病にて半
 次郎見舞申上ル○



一六月十五日上ケ田勝又喜市殿馬半
 次郎馬二下男市太郎勝又庄吉本田
 勘作○上ケ田市太郎此四名にてあ
 らしろをかく○半次郎土手草をか
 る○おさだおうら馬屋こいを出す
 ○おさた母めしを焼○西川清次郎
 君二女病にて半次郎見舞二行○勝
 又市太郎様妻御栄様めノ病にて半
 次郎見舞申上ル○

六月十六日 家内物苗をとる
 勝又 国太郎様妻 おつまさまに
 勝又 奥次郎様妻 おしう様ト 勝又 角太郎様
 御母様 半次郎苗をとる
 市太郎半次郎苗をとる
 此日 北東風 風ふく
 さむい
 日野屋ヨリ 酒式十銭買
 富士山へ雪ふる



一 六月十六日 家内物苗をとる ○ 勝又
 国太郎様妻 おつまさまに ○ 勝又 奥
 次郎様妻 おしう様ト 勝又 角太郎様
 御母様 半次郎苗をとる ○ 市太郎半
 次郎あぜをぬる ○ 此日 北東風 風
 ふく さむい
 日野屋ヨリ 酒式十銭買 ○ 富士山へ雪ふる



一六月十七日田植ル
 勝又殿半次郎とね
 半次郎とねの勝又喜代作
 殿二〇勝又庄吉殿
 新田本田勘太郎
 上ケ田勝又市太郎半次郎下男
 市太郎勝又おしう
 土屋おりきお
 うら〇おさた〇ぬい〇半次郎隠居
 母様八十五才田植めし焼也〇此日
 北東風さむ
 〇豆州田
 方郡川西村古奈二て勝又嘉六様妻
 おしう様此日あさ六時しぬなり半
 次郎後三時キ車二て佐野原ヨリ古
 奈迄行〇此夜二さ、やへ宿

為

一六月十七日田植ル勝又與次郎殿長
 田為吉殿半次郎とね〇勝又喜代作
 殿二〇勝又庄吉殿〇新田本田勘太
 郎〇上ケ田勝又市太郎半次郎下男
 市太郎勝又おしう〇土屋おりきお
 うら〇おさた〇ぬい〇半次郎隠居
 母様八十五才田植めし焼也〇此日
 北東風さむ
 〇豆州田
 方郡川西村古奈二て勝又嘉六様妻
 おしう様此日あさ六時しぬなり半
 次郎後三時キ車二て佐野原ヨリ古
 奈迄行〇此夜二さ、やへ宿

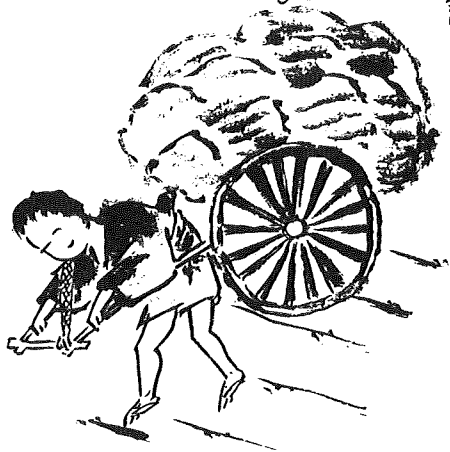
* 1 田方郡伊豆長岡町古奈。

一六月十七日、長田為吉殿
 あげとる田をとりての
 豆森田方郡川西村字古奈ヨリ半次郎
 十時キ車にてくるなり
 市太郎田すき妻子あぜ
 をとる
 おさた本田良吉様田植二
 行
 おうら勝又豊吉様田植二
 行
 豊作十才年田すきはなとるり上
 ケ田勝又喜郎殿馬にて田をすく也
 切とすくや。



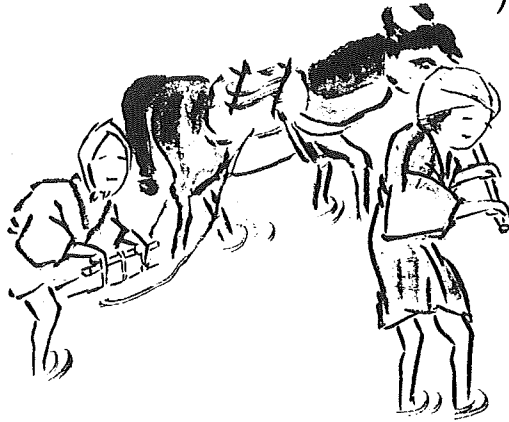
為
 一六月十七日長田為吉殿あぜをとる
 田をすくなり○豆州田方郡川西村
 字古奈ヨリ半次郎○十時キ車にて
 くるなり○市太郎田すき妻子あぜ
 をとる○おさた本田良吉様田植二
 行○おうら勝又豊吉様田植二行○
 豊作十才年田すきはなとるり上
 ケ田勝又喜郎殿馬にて田をすく也
 ○

六月十九日市太郎車にて草をかる
 車に草をかる。後多き所をり
 あらうらとかく。○
 半紙印 土屋茂八殿苗とり
 あらうら母新田土屋茂八殿
 苗とり。○あやま
 半紙印さつまさしに焼
 石脇植松辰次郎殿へ半紙
 売。○



一 六月十九日市太郎車にて草をかる
 ○後壱時ヨリあらしるをかく○半
 次郎土手草をかる○おうら母新田
 土屋茂八殿苗とり二行○おさだ半
 次郎さつまさしに行隠居母様めし
 を焼○石脇植松辰次郎殿へ半紙売
 売○

一
六月廿日市方郎あらし
ろとわくあやし
はらそり○半次郎あせぬり
あり○あうら母新田土屋茂八殿へ田植二
行○隠居母めしを焼○



一
六月廿日市太郎あらしをかくお
さだはなとり○半次郎あせぬり○
おうら母新田土屋茂八殿へ田植二
行○隠居母めしを焼○

六月廿一日田植也市太郎田をかく
 ち吉はなどりのおうらおさ
 た母此三名にて田植○半次郎とね
 ○後三時ヨリ田小麦かる○半次郎
 馬草かる○隠居母様頭病にて休○
 勝又奥次郎殿苗とりに行○日
 野や酒式十銭買○



一 六月廿一日田植也市太郎田をかく
 ○勝又庄吉はなどり○おうらおさ
 た母此三名にて田植○半次郎とね
 ○後三時ヨリ田小麦かる○半次郎
 馬草かる○隠居母様頭病にて休○
 勝又奥次郎殿苗とりに行○日
 野や酒式十銭買○

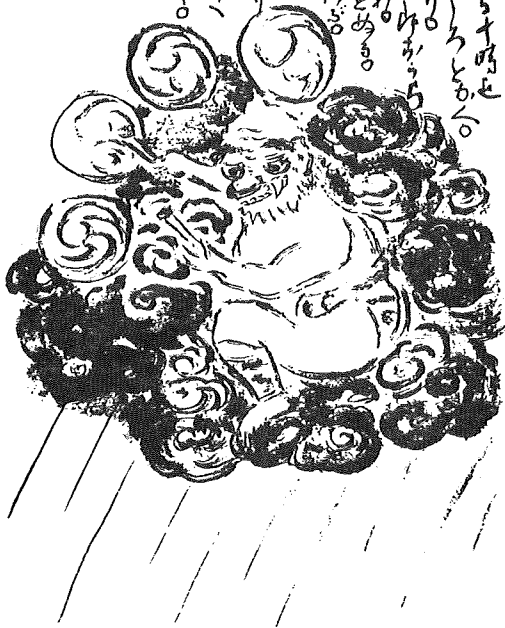
一六二〇月廿二日半次郎田

小麦のり。市太郎、小次郎、あせをとる。勝又豊吉様田をすく。後五時ヨリ市太郎あらしろかく。市太郎馬屋こいを五駄まるく。土屋閣蔵殿田植ニ勝又豊吉殿人ニておうら行。勝又與次郎殿田植ニ上ケ田勝又喜市殿母様ニおさた母行。古沢與三郎様馬引栗毛馬ト黒毛馬ト引かえるなり。



一六月廿二日半次郎田ノ小麦かる○市太郎小麦かつぐ○市太郎半次郎あせをとる○勝又豊吉様田をすく○後五時ヨリ市太郎あらしろかく○市太郎馬屋こいを五駄まるく○土屋閣蔵殿田植ニ勝又豊吉殿人ニておうら行○勝又與次郎殿田植ニ上ケ田勝又喜市殿母様ニおさた母行○古沢與三郎様馬引栗毛馬ト黒毛馬ト引かえるなり○

六月廿三日十時迄市太郎あらしろ
 市をけあらうら十一時田ノ小麦打○
 半次郎あぜをぬる○豊作苗をはこ
 ぶ○半次郎馬草をかる○此日迄十
 三日あいた大日でり此夜二大雨ふ
 雷成木瀬川へ大水出るなり○



一六月廿三日十時迄市太郎あらしろ
 をかく○おうらはなどり○おさた
 市太郎おうら十一時田ノ小麦打○
 半次郎あぜをぬる○豊作苗をはこ
 ぶ○半次郎馬草をかる○此日迄十
 三日あいた大日でり此夜二大雨ふ
 雷成木瀬川へ大水出るなり○

五月廿四日
 小次郎と田植し
 母田植ル○市太郎
 は父とりのまじり
 市太郎初田と
 と七かか
 半次郎狐塚へ
 半次郎はらノ病をやめる



一六月廿四日小麦あと田植ルおうら
 ○おさた母田植ル○市太郎しろか
 き勝又庄吉殿はなどり○半次郎と
 ね○市太郎和田上へこいを七かか
 つぎ○半次郎狐塚へ小麦から四駄
 付ル○半次郎はらノ病にてやめる

六月廿五日惣代ヨリ申付大そうじ
 也湯山詮様外二名くるなり○十
 時ヨリ雨ふる○おさたおうら市太
 郎上ヶ田勝又喜市殿田植二行○半
 次郎病にてやすみ也○沼津魚七殿
 ヨリめしか魚三十銭買○
 三平又溜○



一六月廿五日惣代ヨリ申付大そうじ
 也湯山詮様外二名くるなり○十
 時ヨリ雨ふる○おさたおうら市太
 郎上ヶ田勝又喜市殿田植二行○半
 次郎病にてやすみ也○沼津魚七殿
 ヨリめしか魚三十銭買○

六月廿六日 役場へ金七拾八錢納る

○ 半次郎病二付相良様二みてい

た、く粉薬二日分毎日三回一度

○ おさた勝又国太郎殿田植二行

○ 市太郎やすみ也

○ おうら勝又奥次郎殿田植二行

○ 半次郎病二て休

○ 家内馬屋二蔵屋そうしをする

○ 豊作草とる



六月廿七日旧六月一日
 母豊作半次郎和田上畑にて
 小麦かる。隠居母様大家留主居め
 しを焼。佐野市太郎箱根山へ父三
 郎平殿卜行



○ 六月廿七日旧六月一日おさた○お
 うら○母豊作半次郎和田上畑にて
 小麦かる○隠居母様大家留主居め
 しを焼○佐野市太郎箱根山へ父三
 郎平殿卜行

一六〇二廿八日
 宮原畑小麥をかる佐野
 半次郎小麥かる○隠居母様大屋留
 主居めしを焼○富士郡大宮町大庭
 與三郎殿ヨリはがきくるなり○豊
 作はら病にてやすむ也○
 官原郡大宮町大庭留三郎殿
 ヨリはがきくるなり○豊
 作はら病にてやすむ也○



一六月廿八日宮原畑小麦をかる佐野
 市太郎馬二付ル○おうらおさだ母
 半次郎小麦かる○隠居母様大屋留
 主居めしを焼○富士郡大宮町大庭
 與三郎殿ヨリはがきくるなり○豊
 作はら病にてやすむ也○

一六〇 六月廿九日吉田様。
 中川豊様。湯山一様けんふ也。
 市太郎。あうら。おさだ。おさだ。
 小麥打なり。家をぬいめ。
 豊作。畑草とり。二行。半次。
 郎病。二付休。前夜廿八日夜。富士山へ雪ふる。



一六月廿九日吉田様○中川豊様○湯山一様けんふ也○市太郎○おうら○おさだ小麥打なり○家をぬいめしを焼○豊作畑草とり二行○半次郎病二付休○前夜廿八日夜二富士山へ雪ふる○

一 六月三十日半次郎豊作
 佐野産場へ頭かきこみに行
 へ頭かきこみに行
 〇おうら佐野市
 太郎おさだ十二時迄小麦打
 〇後一時ヨリぬい
 〇おさだ
 〇おうら
 〇市太郎芋作切に行
 〇隠居母様留主居二
 〇めしを焼なり
 〇此日小雨ふる
 〇佐野久保庄三郎様ヨリ酒五合買す
 〇ミをかりる事
 〇家内ぬい石脇彦太郎
 〇殿へ小麦八升ひきに行
 〇



一 六月三十日半次郎豊作佐野とこ場
 へ頭かきこみに行
 〇おうら佐野市
 太郎おさだ十二時迄小麦打
 〇後一時ヨリぬい
 〇おさだ
 〇おうら
 〇市太郎芋作切に行
 〇隠居母様留主居二
 〇めしを焼なり
 〇此日小雨ふる
 〇佐野久保庄三郎様ヨリ酒五合買す
 〇ミをかりる事
 〇家内ぬい石脇彦太郎
 〇殿へ小麦八升ひきに行
 〇

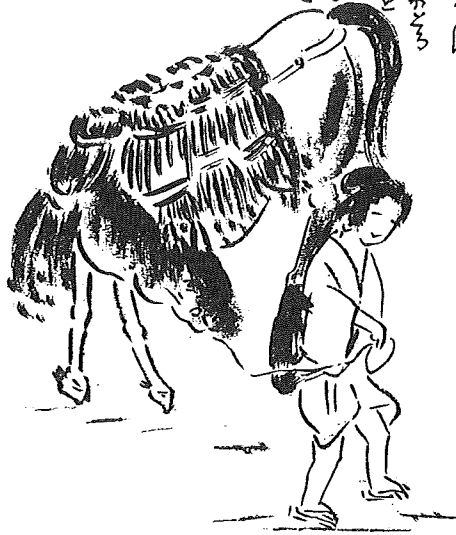
一七〇 一日半次郎

○
 市太郎様お栄様めノ病見舞半次郎行○佐野久保庄三郎様へちり半紙売○



○
 一七月一日半次郎三島町へ行木屋富助様ヨリ半紙四ノ買○佐野市太郎休○家内物田ノあせ豆を植○勝又市太郎様妻お栄様めノ病見舞半次郎行○佐野久保庄三郎様へちり半紙売○

一七〇月二日佐野市太郎おうら〇母〇
 おうらの母。山まかる。半次郎豊作をかほ草と
 する。おさだ馬にて小麦を付ル〇隠居
 母様留主居めしを焼〇市太郎十時
 迄二こいを八かかつくなり〇



一七月二日佐野市太郎おうら〇母〇
 小麦かる〇半次郎豊作をかほ草と
 るおさだ馬にて小麦を付ル〇隠居
 母様留主居めしを焼〇市太郎十時
 迄二こいを八かかつくなり〇

一七月三日おうらおさだ長田為吉殿
 市太郎十時迄小麦かる○おうら○
 市太郎おさだ小麦打○長田為吉殿
 小豆作ルをかほ作ル○半次郎草と
 り此日あついでい〜〜〜○



為
 一七月三日おうらおさだ長田為吉殿
 市太郎十時迄小麦かる○おうら○
 市太郎おさだ小麦打○長田為吉殿
 小豆作ルをかほ作ル○半次郎草と
 り此日あついでい〜〜〜○

一七(二) 四日佐野
 市なゆ。あやゆ
 ぬらちを後田草をとる。
 内母。少なるゆ。○
 め。と焼。○
 半次郎。かほ草をとる。
 豊作。畑ケヨリ草を三ト
 けふる。○ 前夜二富士山
 へ雪ふる。○



一七月四日佐野市太郎○おさたおう
 ら壱番田草をとる○内母小麥ほす
 ○めしを焼○半次郎をかほ草をと
 る○豊作畑ケヨリ草を三トはこふ
 ○前夜二富士山へ雪ふる○

一七〇二 此日勝又清太郎君長女此日ヨ
 リ牛肉ち、を壺合半次郎呑なり○
 おさだおうら佐野市太郎十一時迄
 田ノ草をとるなり此日北雨ふるさ
 む 〇十二時ヨリ
 畑行〇石脇栄橋湯二半次郎行也〇
 佐野久保庄三郎様ヨリ酒四合買〇
 以日北雨ふるさこむまま。○
 才時ヨリ畑行。○
 石脇栄橋湯二半次郎
 行也。佐野市太郎
 十一時迄
 田ノ草をとるなり
 此日北雨ふるさ
 こむまま。○



一 七月五日勝又清太郎君長女此日ヨ
 リ牛肉ち、を壺合半次郎呑なり○
 おさだおうら佐野市太郎十一時迄
 田ノ草をとるなり此日北雨ふるさ
 む 〇十二時ヨリ
 畑行〇石脇栄橋湯二半次郎行也〇
 佐野久保庄三郎様ヨリ酒四合買〇
 御勝清

*1 牛乳のこと。



一七月六日家内ぬい須山へ紙売二行
 佐野市太郎草を売駄かる○半次郎
 をかほノ草をとる○おうら畑へ行
 ○おさだ小麦をほすめしを焼○市
 太郎十二時ヨリこいをかけるなり
 ○勝又清太郎君ヨリ牛肉乳を売合
 とる○前夜二富士山へ雪ふる○



一七〇 七日農休ニ付 兼○まんがを祭
なり○おさだ蕎麦うんとんを打○
おうら蕎麦を切○家内ぬい小麦を
ほす○半次郎中土狩かじや二て鎌
を打○三島町伊勢彦二て品々買物
を打○木や富助様二て半紙式ノ買○佐
野庄三郎様二て上酒壺升買○勝又
清太郎君ヨリ牛肉乳壺合とる○

三島町伊勢彦
半次郎中土狩
鎌を打○
三島町伊勢彦
半次郎中土狩
鎌を打○
三島町伊勢彦
半次郎中土狩
鎌を打○

○
一七月七日農休ニ付兼○まんがを祭
なり○おさだ蕎麦うんとんを打○
おうら蕎麦を切○家内ぬい小麦を
ほす○半次郎中土狩かじや二て鎌
を打○三島町伊勢彦二て品々買物
を打○木や富助様二て半紙式ノ買○佐
野庄三郎様二て上酒壺升買○勝又
清太郎君ヨリ牛肉乳壺合とる○



一七〇二八月
 あさくさはじめ
 皆大雨ふり
 草かりいかぬ
 谷内物休
 酒呑あんま
 にもませる
 大木でるなり

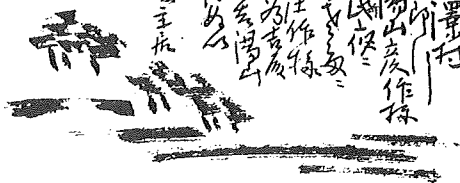
一七月八日あさくさはじめ此日大雨
 ふる草かり八いかぬ○家内物休○
 半次郎酒呑あんまにもませる○大
 水でるなり○

一七月九日馬つくりの二勝又角太郎
 半次郎兼番也○二本松鈴木万次郎
 殿へもろこし式俵売半次郎馬二付
 で行○おうら草とりおさたをかほ
 作ル○半次郎草とり○家内ぬい小
 麦ほす○三俵ひ上ルなり○市太郎
 馬つくりに行○



一七月九日馬つくりの二勝又角太郎
 半次郎兼番也○二本松鈴木万次郎
 殿へもろこし式俵売半次郎馬二付
 で行○おうら草とりおさたをかほ
 作ル○半次郎草とり○家内ぬい小
 麦ほす○三俵ひ上ルなり○市太郎
 馬つくりに行○

一七月十日古澤村
 馬喰善吉様へ半次
 仁杖三引かき湯山庄及作様
 豆八幡野村へ行此夜二御病
 即病句 おさた二下男市太郎湯
 山庄作様此日十時行○長田為吉殿
 十二時迄畑へ行為吉湯山庄作様行
 為 家内ぬい須山へ紙壳二行○隠居
 母様大家留主居



一七月十日古沢村馬喰善吉様へ半次
 郎行仁杉にて馬引かいる○湯山彦
 作様豆州八幡野村^{*1}へ行此夜二御病
 二付 おさた二下男市太郎湯
 山庄作様此日十時行○長田為吉殿
 十二時迄畑へ行為吉湯山庄作様行
 為 家内ぬい須山へ紙壳二行○隠居
 母様大家留主居

*1 伊東市八幡野。



一 七月十一日湯山彦作
 振作八幡野火僧場
 此日旧六月十五日石脇村社
 天王様祭二付下男市太郎休なり
 湯山様買物二半次郎三井屋へ行品々
 ノ買物帳場上ルなり

一 七月十一日湯山彦作様伊豆八幡野
 ヨリ後五時二くるなり六時火僧場
 送り○此日旧六月十五日石脇村社
 天王様祭二付下男市太郎休なり○
 湯山様買物二半次郎三井屋へ行品々
 ノ買物帳場上ルなり○



一七月十二日下男市
 市太郎休○小雨ふ

一七月十二日下男市太郎休○小雨ふ
 る○



一七月十三日下男市太郎草を式駄か
る○湯山彦作様忌中二行○

一七月十三日下男市太郎草を式駄か
る○湯山彦作様忌中二行○

七月十四日半次郎畑へ行
 おうら畑ヶへ行○下男市太郎草
 駄かる○こいをかける○湯山庄作
 様父修徳院殿高誉智覚鉄道居士
 初七日夜半次郎畑へ
 弟草市太郎畑へ

修徳院殿高誉智覚



一 七月十四日半次郎畑へ行おさた○
 おうら畑ヶへ行○下男市太郎草
 駄かる○こいをかける○湯山庄作
 様父修徳院殿高誉智覚鉄道居士初
 七日夜半次郎畑行南無阿弥陀仏

修徳院殿高誉智覚

一七月十五日長田為吉殿
 おうら。あやしくぬ。めいよ四君
 おま田草ととも半次郎
 かりんさんととも水。
 為大野原御料地草かり場金
 組長勝又角太郎為金渡也。



一 七月十五日長田為吉殿おうら○お
 きた○ぬい○此四名式番田草をと
 る半次郎（通稱）かりんさんをまくなり○
 大野原御料地草かり場金組長勝又
 角太郎殿此金渡也○



七月十二日十二時迄長田為吉殿
 吉田為吉殿。馬方市太郎馬家
 作知行。○半次郎あづかり
 草式駄付ル。○草式駄かる。○家
 内ぬいめしを焼。○富士郡大宮町安
 古山佐野三郎平殿市太郎草かり手
 間金五円五拾銭渡ス此外二壱円市
 太郎小使二半次郎あづかるなり。○
 日野屋ヨリ酒十銭買。○此夜二外川
 彦八殿ニテ大師講あり

為
 一 七月十六日十二時迄長田為吉殿
 おうらおさた馬屋こいを出し為吉
 殿おさた小豆畑へ作切二行○半次
 郎おうら草とり○馬方市太郎馬家
 こいを式駄付ル○草式駄かる○家
 内ぬいめしを焼○富士郡大宮町安
 古山佐野三郎平殿市太郎草かり手
 間金五円五拾銭渡ス此外二壱円市
 太郎小使二半次郎あづかるなり○
 日野屋ヨリ酒十銭買○此夜二外川
 彦八殿ニテ大師講あり



一
七月十七日おさた石脇植松彦太郎
殿蕎麦六升小麦五升ひきに行○お
うらさつま畑草をとる半次郎をか
ぽをさくる*
○日野屋ヨリ酒十銭買
でよすなり○家内ぬいめしを焼

一七月十七日おさた石脇植松彦太郎
殿蕎麦六升小麦五升ひきに行○お
うらさつま畑草をとる半次郎をか
ぽをさくる*
○日野屋ヨリ酒十銭買
でよすなり○家内ぬいめしを焼

*1 陸稲の畝の間に溝を掘る。

七月十八日
 雨ふる北風こむむい
 ふうら糸とる
 半次郎保庄三
 郎様へちり半紙
 壱売○おさた
 幡をまく○下男
 市太郎十二時迄
 こいをかつぐ後一
 時ヨリ馬くつか
 き
 ○半次郎病にて
 休なり○



一七月十八日雨ふる北風にてさむい
 ふうら糸とる半次郎
 佐野久保庄三郎様へ酒壺升買○庄
 三郎様へちり半紙壱売○おさた
 幡をまく○下男市太郎十二時迄こ
 いをかつぐ後一時ヨリ馬くつかき
 ○半次郎病にて休なり○

一七〇〇 十九日馬方市太郎草式駄かる
 茶草駄かる。あらうらあさたをかほを作ル。
 半次郎こいをかける。



○廿日旧六月廿四日地藏尊を祭○市
 太郎草式駄かる休○半次郎母地藏
 尊へ行勝又嘉六様妻おしん様ノ僧
 引此日ニある○

一七月十九日馬方市太郎草式駄かる
 ○おうらおさたをかほを作ル○半
 次郎こいをかける○

一廿日旧六月廿四日地藏尊を祭○市
 太郎草式駄かる休○半次郎母地藏
 尊へ行勝又嘉六様妻おしん様ノ僧
 引此日ニある○

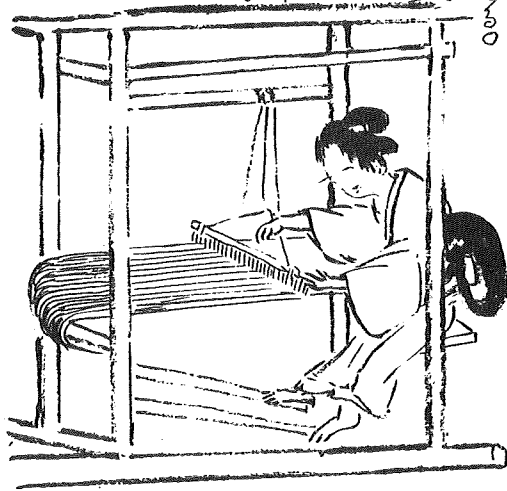
一 七月廿一日景ヶ島にて勝又嘉六様
 妻三十五日浜をりをするなり○お
 さたおうらいも作切○市太郎草式
 駄かる○隠居母大家留主居○
 一 廿二日馬方市太郎草式駄かる日用
 二 二て休○半次郎十時迄田ノ土手草
 をかる○おうら○おさた○十時迄
 畑ヶへ行○勝又嘉六様田方郡古奈
 へ行○



一 七月廿一日景ヶ島にて勝又嘉六様
 妻三十五日浜をりをするなり○お
 さたおうらいも作切○市太郎草式
 駄かる○隠居母大家留主居○
 一 廿二日馬方市太郎草式駄かる日用
 二 二て休○半次郎十時迄田ノ土手草
 をかる○おうら○おさた○十時迄
 畑ヶへ行○勝又嘉六様田方郡古奈
 へ行○

七月廿三日おうらおさたけら蠶が*1きあ
 せをぬる○半次郎田ノ土手草をか
 る○上ケ田勝又喜市殿ヨリ(前)まい金
 拾貳円請取なり○

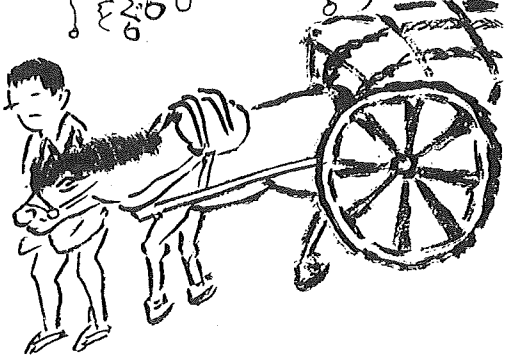
廿四日此日雨ふる○西川清次郎殿
 二女僧引ニ半次郎行○おさた幡を
 り○おうら糸をとる○



*1 畦の補修のこと。

七月廿五日馬方市太郎草を式駄か
 る○平松服部彦太郎殿ニ金拾貳円
 渡スなり○佐野原会社へ富士郡大
 宮ヨリ紙沓駄分ちん銭を払○おう
 らおさだ蝶がきあぜをぬるなり○
 半次郎田ノ土手草をかる○

廿六日半次郎田土手草をかる○市
 太郎草を沓駄かる○田草とる○お
 うら○おさだ田草三番をとる○後
 四時ヨリ市太郎こいを六かかつぐ
 ○佐野原会社ヨリ金沢荷馬車紙を
 沓駄付けてくる○ちん銭十銭払なり
 ○此日八十五ト上ルあつ〜〜



一 七月廿五日馬方市太郎草を式駄か
 る○平松服部彦太郎殿ニ金拾貳円
 渡スなり○佐野原会社へ富士郡大
 宮ヨリ紙沓駄分ちん銭を払○おう
 らおさだ蝶がきあぜをぬるなり○
 半次郎田ノ土手草をかる○
 一 廿六日半次郎田土手草をかる○市
 太郎草を沓駄かる○田草とる○お
 うら○おさだ田草三番をとる○後
 四時ヨリ市太郎こいを六かかつぐ
 ○佐野原会社ヨリ金沢荷馬車紙を
 沓駄付けてくる○ちん銭十銭払なり
 ○此日八十五ト上ルあつ〜〜

*1 華氏温度で八五度となる。摂氏
 温度で約二九度。



一 七月廿七日半次郎土手草をかる○
 二 市太郎草を式駄かる○後三時ヨリ
 雨ふる雷成○おうらおさた畑へ行

廿八日半次郎墓草とり二行○お
 うらおさた畑へ行馬方市太郎草を
 式駄かる○

七(二)廿九日

竹野を湯も
 半次郎山とまゝ。
 湯山彦作様三言
 庄園寺半次郎
 墓三つあり。
 庄園寺様
 土屋常吉殿半次郎御僧様
 所傳ははるる。
 酒吞の
 高力めん太近紙賣
 けり。瀧湯山へはゆ
 本堂のまうら糸とる。
 由文く母垂くまじとル。



一 七月廿九日佐野とこ場にて半次郎
 頭をする○湯山彦作様三七日庄園
 寺半次郎行墓へまいるなり○庄園
 寺様にて土屋常吉殿半次郎御僧様
 此三名にて酒吞なり○家内ぬい大
 坂迄紙売二行○瀧湯山へ半紙式メ
 売○おうら糸をとる○おさた蚕へ
 くわを上ル○

修徳院殿高誓智覚鉄道居士

一七〇 三十一日おうら母
 御殿場紙賣
 下男市太郎十一時迄
 市太郎草を壺駄かる
 半次郎にしんを作
 田土手草を
 北風ふくさむ



一 七月三十日おうら母御殿場紙売二
 行○下男市太郎十一時迄こいをか
 けるなり○市太郎草を壺駄かる○
 半次郎にしんを作○田土手草を
 かる○おさだ蚕くわを上ル○此日
 北風ふくさむ

一七〇月三十一日病院佐賀良様へ
 半次郎行見でいたくなり○馬方市太
 郎草を式駄かる○おうらおさた狐
 塚畑へもろこし作切二行○家内ぬ
 い大麦を四俵土用ほし^{*1}をする○勝
 又清太郎殿娘二牛肉ちち代金五拾
 六錢上ル○おさた入屋つきやへ蕎
 麦をひき二行○

一七月三十一日病院佐賀良様へ半次

郎行見でいたくなり○馬方市太
 郎草を式駄かる○おうらおさた狐
 塚畑へもろこし作切二行○家内ぬ
 い大麦を四俵土用ほし^{*1}をする○勝
 又清太郎殿娘二牛肉ちち代金五拾
 六錢上ル○おさた入屋つきやへ蕎
 麦をひき二行○

*1 夏の土用にカビや虫害を防ぐた
めに干すこと。

一 勝又半次郎と絵日記

本書は、幕末から明治時代にかけて御宿で生きた、勝又半次郎という一人の人物が著した絵日記の一部を解説し、翻刻したものである。

(一) 発見の経緯

原文書である「勝又半次郎絵日記」（仮題、以下「絵日記」と呼ぶ）の発見の経緯から述べる。裾野市史編さん専門委員会の「民俗部会」調査委員は、『裾野市史』第七巻資料編民俗の執筆に向けて追いつみ込みの補充調査を続けていた。一九九五年一月六日、二九日、御宿が調査対象地となり、民俗部会は調査に入った。この御宿の調査中に「絵日記」は偶然見つかった。ふだんの調査と同じように、聞き取りを約束していた勝又重夫家に入った時のことである。聞き取りの最中、重夫氏は突然「家に面白いものがある」と言って立ち上がり、奥座敷の方に行った。そして、古びた古文書らしきものを一抱え持って再び現れ「先祖が書いた絵日記だよ」と言いつつ、ぼんと目の前に広げて見せた。それが半次郎の「絵日記」だった。

「絵日記」は全部で一〇冊あった。一冊を手に取り中を開いてみた。素人の描いた絵ながら、実に生き生きと描かれている。何よりも、当時の暮らしぶりが手に取るように具体的に分かる。たちまちその内容に引き込まれてしまっ

た。これは腰を据えてしっかりと読む必要があると判断し、その場合は辞して編さん室で正式に借用してもらうことになった。以上が発見の経緯である。

(二) 「絵日記」の全容

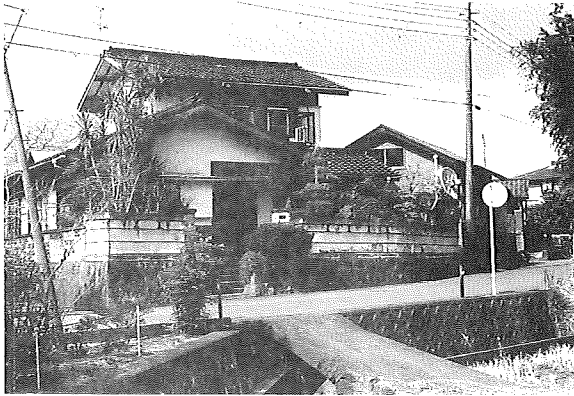


写真1 現在の勝又家外観

現在、勝又家に残されている日記は一〇冊である。それらには「絵日記」という表題が書かれている訳ではない。表題としては、表紙に「萬日記帳」「萬日記簿」と記された二冊があるのみで、他には年次のみ記されたものが三冊、残りの五冊は表紙がなくなった状態で保存されている。従ってこの半

1895(明治28)年	1月～7月
1896(明治29)年	7月～12月
1897(明治30)年	1月～6月
1897(明治30)年	7月～12月
1898(明治31)年	1月～7月
1898(明治31)年	9月～11月
1899(明治32)年	8月～12月
1900(明治33)年	1月～7月
1901(明治34)年	1月～6月
年不詳	10月～12月

図表1 勝又半次郎絵日記一覧

次郎の書いた日記の資料名は、「萬日記」とするのが正しいと言うべきであろう。しかし、今回の翻刻に当たっては、日々の暮らしを文字で記録しただけでなく、具体的な絵で表現したことに日記の価値があると判断し、「勝又半次郎 絵日記」とすることにした。

一〇冊の「絵日記」はいずれも半紙を半折りにした豎帳に綴られ、表紙が別紙で付けられている。綴じ代を十分に残さずに記載された部分があることから判断して、あらかじめ綴じられた帳面に目を追って記載していったのではなく、半紙を半折りにして毎日記していき、それを半年分まとめて綴ったものと判断される。したがって、一年分を二冊に分冊している。現在残されている一〇冊の年次は集中している。

「絵日記」の作成年について、保管されていた全一〇冊の内、表紙に年号のあるものは確定できた。図表1のように、一八九五年（明治二八）から一九〇一（明治三四）年までのあしかけ七年分である。一冊については表紙が欠落していて年号の確定が難しかろうかと思う。また、「絵日記」の保存状態であるが、傷んでいるものの中にはあるが、概ね保存は良い。傷みの部分については、半次郎が毎日きちようめに記帳し続けてすり切れたのか、あるいは後に半次郎が日記を広げてくり返し眺めたことによりすり切れたものだろうか。いずれにしろ残存の状態からいろいろなことが想像できた。一覧表で分かるように、半次郎は一年分の「絵日記」を半年づつに分割して冊子としている。翻刻には一八九七（明治三〇）年一月―二月と一九〇〇（明治三三）年一月―七月分の「絵日記」を選定した。すなわち一八九七年分だけが、まるまる一年間を通して残っていたからである。

半次郎が記した「絵日記」はこれですべてであろうか。そうではなかったようだ。勝又家で、次のように聞いている。「絵日記はたくさんあったが古新聞替わりに使ったり、元の堆肥小屋に残っていたが、これを壊したときに処分したりした」と。惜しいかな、現在残っている「絵日記」は上記したとおりである。したがって、彼がいつから「絵日記」

を書き始めて、いつまで書いていたかという点は、今となつては明らかにはならない。

(三) 勝又半次郎について

日記の作者である勝又半次郎は、一八六九（明治二）年の「駿河国駿東郡御宿村宗門人別改帳」（御宿下湯山家文

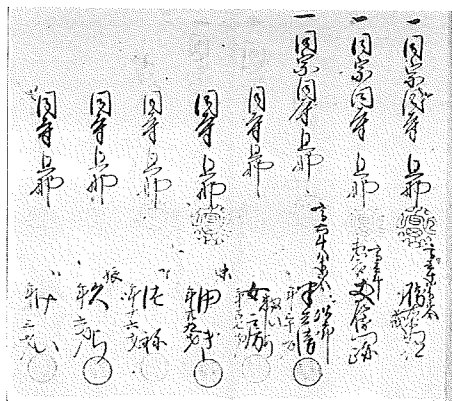


写真2 明治2年の「宗門人別改帳」・御宿湯山芳健氏所蔵

書）に登場し、年齢三〇歳と記されている。逆算すると、一八三〇（天保一〇）年の生まれということになる。半次郎の没年は各種の資料から一九一三（大正二）年と判断され、当時としては八三歳の長寿を全うしたことになる。従つて、半次郎が毎日日記を書いていたのは六〇歳代であつた。働き者として日記に登場する妻のぬいは半次郎より三歳年下で、一八六九年にはすでに半次郎と結婚し、くらとけいという二人の娘がいた。くらは六歳、けいは三歳であつた。その後、さだ、うら、きいと女子ばかり生まれている。半次郎の父親は佐四郎、後に佐七郎と改めた。一八六九年には六〇歳であつた。母親はいさとい、一八六九年で五四歳であつた。日記を書いていた頃の半次郎一家は、半次郎（一八九五年当時五七歳）、妻のぬい（同五三歳）、三女さだ（同二五歳）、その子供の豊作（同六歳）、四女うら（同一六歳）、そして母親のいさ（同八一歳）の六人であつた。直系家族の形態をとっていたが、母親のいさはしばしば隠居と記され、別棟の隠居屋で寝起きしていた。半次



写真3 勝又半次郎家の新墓地

郎の子供は娘ばかりであったので、三女のさだが婿養子をとった。豊次郎といい、深良須釜の土屋家の出だったという。豊作が生まれる前に亡くなっており、日記には登場しない。

この日記を「絵日記」と題したように、毎日の記事には必ずのように絵が添えられている。絵は単色の墨絵ではなく、彩色しており、本格的なものである。しかも小さいカット風のものではなく、むしろ一頁のなかで絵の部分が大きく、文字の部分が添え物かのような印象を与える。絵はその日の出来事やそのなかの一場面も少なくない。近世の絵草紙の描き方に通じると言ってもよいであろう。絵は自分で自分が行った行為を描くものが多いが原則である。もちろん半次郎自身が見たり、あるいは自分で自分が行った行為を描くものが大部分であるが、なかには行事や行為ではなく、想像の世界を描いているものも混じっている。大黒の祭りに大黒の姿、節分の豆撒きに豆で追われる鬼の姿、雷鳴に天で暴れる雷の姿などを描いている。半次郎が絵を描くことをどのように身につけたかは明らかでない。勝又家には半次郎が練習に描いたと思われる絵が数十枚残されており、日頃から絵を描いていたことが分かる。しかしその師匠が誰で、どのような機会に学んだのかは全く不明である。描法は決して熟達したものではなく、稚拙な面をもつが、人々や事物の特徴を掴み、適切に描いており、文章では理解できない具体像を教えてくれる。

半次郎は実にきちょうめんで、厳格な人物であったらしい。人物像について、勝又家には「厳格できちょうめんな

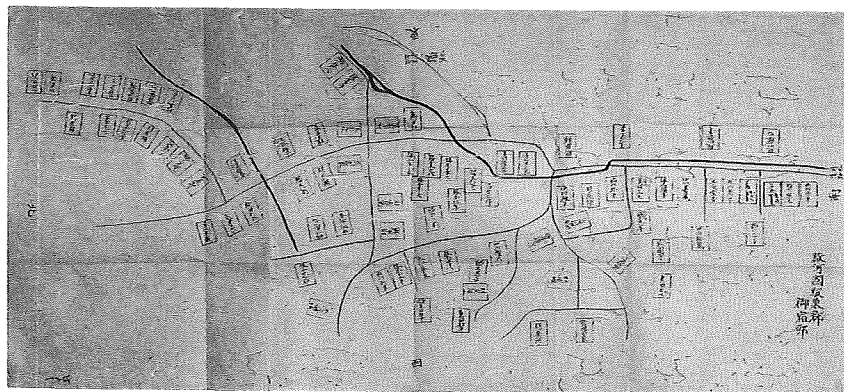


写真4 明治初期御宿住宅図・御宿湯山エツ氏所蔵

人だったから、隠居から見回りに来るときはあわててそこらじゅう掃除をしたものである」「半次郎さんが来るときはちり一つ無いようにした」「半次郎さんの影響で、座るときは正座以外したことがない」と伝わっている。また近所の人々からは「カミヤ（紙屋、勝又家のイエナ）の前は変な恰好では通れない。絵日記に書かれてしまう」と、家の前をうかつに通ることがはばかれたという。半次郎の厳格な性格と「絵日記」はムラでも評判だったのである。「絵日記」は彼の性格を表すように、ほとんど例外なく、一日たりとも書き忘れることなく書かれている。一日につき一ページ。その日に起こった事件、行った事柄等を文章で箇条書きに記し、その内の一件を絵に描くという繰り返しである。絵には複数の人物が登場する。家族であったり、村内のものであったりするが、その人数と登場人物は事実に基づいて具体的であり、正確であるように思う。これでは、ムラの衆も、半次郎の前でうっかりしたことは言えなかったであろう。

(四) 御宿村

御宿村は黄瀬川中流の右岸、富士の裾野のなだらかな傾斜地に位置する集落で、近世には駿河国駿東郡に属し、幕府領から後に小田原藩領となり、一

八八九（明治二二）年以降は富岡村の一大字となっている。御宿村は近世・近代を通じ常に周辺地域の中心地として君臨してきた。一八七五（明治八）年には初期公立学校の「行餘舎」が設立し、一八八二（明治一五）年には「岳南小学校」、一八八七年には「岳南尋常小学校」が、御宿に開校している。富岡地区の、いわば「首都」と言える地の利にあったのである。また、御宿には他地区にはない豪農の存在があつて、こうした点も御宿を中心たらしめていた一つの大きな事柄であつた。「下・中・上の湯山三家」がそれで、同家の大きな勢力は御宿はもとより、周辺の村々にさまざまな影響を与えていた名主家であつた。

（杉村 齊）

二 勝又半次郎家の農業経営

(一) 経営資料としての絵日記

近代の村落を理解するためのもっとも代表的な文献資料は、旧役場文書、区有文書、各家文書であるといえよう。これらのうち、前二者は公的文書であるために私的世界は断片的にしか描かれることはなく、各家文書は私的文書といえる性格を持つものの、旧地主層の家に残されるものが多いために、旧自作層や旧小作層の世界が彼ら自身の手によって文献資料として残されることは少ない。しかし、この「勝又半次郎絵日記」（以下「絵日記」と略記）は、農業経営者としては自小作であった勝又半次郎（以下「半次郎」と略記）が自己の家の生産と生活を詳細に記載しているために、まとまった文献資料の残りにくい明治期の小農の私的世界を知る上で、貴重な資料を現在に提供してくれる。

この「絵日記」の文献資料としての重要性は、およそ次の三点に整理することができる。

一つは、この「絵日記」が家の日記としての性格を持つことである。この「絵日記」の記載者は半次郎個人であるが、個人の日記としての性格は弱く、また、個人としての主観的記述がまったくないわけではないが、それも日野屋という酒屋で買った酒が高いとか、気候について暑いとか寒いとかいった程度の記述であり、それが「絵日記」の内容の中心的部分に位置しているわけではない。これに対して、「絵日記」の中心的部分は、たとえば妻のぬいが紙売の行商に行ったとか、房吉、長吉、市太郎（「市三郎」とも記されている）、兼吉、為吉などの使用人が草刈に行ったとか、半次郎家の人々の労働分担を軸に、彼ら全員の生活全体が記録されていることである。いわば、半次郎家の家

としての経営と消費の記録がこの「絵日記」であると考えられるのである。そしてその水面下には、家長として家を統率していかなければならない半次郎の強いリーダーシップが存在していたものと考えられ、さらにこのことは、小作レベルの小農であろうとも、明治中期には経営体としての家を自覚的に認識できる精神が発達していたことを示しているものと思われる。

二つは、こうした経営精神の発達と関連して、文字文化を自家薬籠中のものとして使用できる精神が、半次郎のような小作レベルにも浸透していることである。「絵日記」は、一見単純な日録のように思われるが、経営の帳簿としての性格も持っている。商家でも地主でもない自小作の家が、事実上の帳簿を残すようになっていたのである。半次郎の生年は、一八三九（天保一〇）年であるから、数え年で計算して明治維新（一八六八年）を三〇歳でむかえ、現存する「絵日記」のもっとも古いものである一八九五（明治二八）年の時点で五七歳であり、正規の近代公教育を受けてはいない。おそらく寺子屋的な場所あるいは独学によって文字文化を習得したものと思われる。半次郎は在村の文字文化を利用しつつ、家を経営するための帳簿をつけるだけの能力を身につけていたのである。

三つは、こうした経営のための帳簿という性格と関連して、「絵日記」では、現金収入獲得が自覚化されていることである。半次郎家の場合、茶業や養蚕業には消極的で、紙漉と記された製紙業に積極的であり、それも単に「紙漉三郎平」などを雇用するだけではなく、家族全体で製紙業にかかわっている。農閑余業、農家の副業という域をこえて、在村の家内工業のレベルにまで製紙業が発達していたといえよう。半次郎家の家としての現金収入獲得の中心的手段に、製紙業があったのである。

(二) 経営内容

このように「絵日記」からは、経営体としての家という性格を自覚化している半次郎の精神が読みとれるが、そのような精神と表裏一体であるかのように、半次郎家では、稲作、畑作、山仕事、製紙業が有機的に組み合わされ、複合的な多角経営が成立している。

半次郎家の土地所有、田畑の経営面積については、当時の正確な状態を知ることとはできなかったが、半次郎の曾孫にあたる勝又順夫氏によれば、戦前の段階で水田については家の周囲に二反歩を所有し、それに併せて中湯山家から二反歩を小作として借りていたという。畑については御宿の中の宮原と呼ばれるところに八反歩、そのほか面積は明確ではないが、御宿新田にも畑地を所有していたという。したがって、現在の勝又家の記憶では、戦前の段階の経営面積は、田畑併せて自作地が一町歩余、小作地が水田二反歩、自作地と小作地を併せて合計一町二反歩余ということになる。

これを「絵日記」の時代と対照させたとき、自作地については、家の周囲の水田二反歩が現在も所有され勝又家の基本財産となっているので、当時も所有されていたことは確実であろう。宮原の八反歩の畑地については、「絵日記」の中で「宮原畑」という記述が頻出しているので、この八反歩も半次郎の時代に所有されていたことであろう。しかし、御宿新田に畑地を所有している記述は「絵日記」には見られないので、「絵日記」の時代の半次郎家の自作地として確実なものは、家の周囲の水田二反歩と宮原の畑地八反歩、合計一町歩ということになる。これが「絵日記」の時代の半次郎家の基本財産である。これに加えて、「絵日記」の時代の半次郎家では、面積が不明であるが、かなり多くの小作地を耕していた様子がうかがわれる。中湯山家、下湯山家、双方から、水田と畑地を小作地として借りて

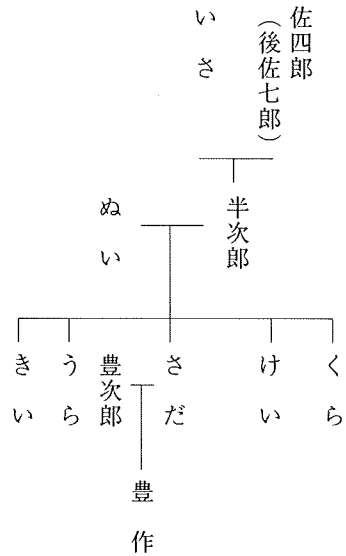


写真5 湯山家への年給
(明治31年1月3日)

いるのである。たとえば、一八九七（明治三〇）年の「絵日記」の記述を見ると、一月二六日に「湯山詮様へ畑小作金納事」、翌二七日に「湯山半七郎様へ畑小作金納也」とあり、中湯山家（湯山詮）と下湯山家（湯山半七郎）双方の畑地を小作していたことがわかる。また、同年一月一四日に「湯山詮様内米四俵納〇湯山半七郎様へ内米式俵納」、一二月一二日に「湯山詮様蔵米四斗二升入二俵半納也」とあるので、水田についても、中湯山家と

下湯山家の双方から小作していたことは確実である。

大雑把な推定であるが、この年の中湯山家と下湯山家に納めた小作米の合計が一四・五俵であるので、小作米率を仮に五割とし、一反歩の収量を七俵として計算すると、合計で約四反歩余の水田を小作していたことになる。畑地については金納率の推定が難しいので、仮に水田と同程度の畑地を小作していたと仮定して、ここでは仮に田畑併せて八反歩余の小作地を借りていたと推定しておきたい。あくまで推定の域を出るものではないが、「絵日記」の時代の半次郎家の経営面積は、自作地一町歩に約八反歩の小作地を加え、合計二町歩弱のものであったのではないかと思われる。当時の駿東郡域の小農としては、安定した農業経営を行い得る経営面積であったといえよう。



図表2 半次郎家の構成

(三) 労働力の構成

そして、このような経営面積を持つ半次郎家の家族構成は、一八九五（明治二八）年現在、半次郎（五七歳）、ぬい（五三歳、妻）、さだ（二五歳、三女）、うら（一六歳、四女）、豊作（六歳、孫、さだ長男）、いさ（八一歳、母）、合計六名であった。彼らのうち、豊作は幼少のため、いさは老齢のため、家族構成員ではあるものの、労働力として期待することは不可能である。「絵日記」の記述を

見ても、「隠居母」と記されることの多いいさの登場する場面は、念仏講への参加、子守、留守居などであり、積極的な労働力とはなりえていない。そしてこのいさの子守の対象が、豊作であったものと推測される。家族構成員は六名であるが、労働力となり得るのは、半次郎・ぬい夫妻とさだ、うらの合計四名である。このほかに、半次郎・ぬい夫妻には長女くらと次女けいがいるが、「絵日記」の時点では、すでに他家に嫁している。また、さだがむかえた豊次郎などの婿は、他界するなどして半次郎家の構成員となっていない。

このようにして見ると、当時の半次郎家の家族労働力は、半次郎を除けばいずれも女性であり、壮年及び若年の男性労働力を欠いていたことがわかる。そして、それを補完するための男性労働力が、住み込みないしは通いでたいいてい一名雇用している「下男」であったものと考えられる。「絵日記」に登場する人名でいえば、房吉、長吉、市太郎、兼吉、為吉などがそれにあたる。半次郎家と彼らの間は、契約関係に基づいていたと考えられ、出替わりの時期は二

月初め、労働日数も決められていたようである。たとえば、長吉の雇用が終わる直前の一八九八（明治三一）年一月二日には、「千福鈴木伊平殿二男長吉はなしニ鈴木浅吉殿くる明治三十年内四十八日不足也あハせ壹枚渡ス也」とあり、あるいは、為吉の雇用の開始にあたって、一九〇〇（明治三三）年三月六日に、「長田為吉殿此日ヨリ二十日定」とあり、給与が明確ではないが、労働条件を確定した上での雇用が行われていたことは確実であろう。その上で、半次郎家では断続的ではあるものの紙漉職人がたいてい一名雇用されている。「紙漉三郎平」、「紙漉桜吉」、「紙漉安次」などがそれにあたるとする。紙漉職人は、「下男」が近隣のムラの男性であったのに対して、遠方の製紙業の盛んな地域からの受け入れである。「紙漉三郎平」は富士郡大宮町（現、富士宮市）安居山、「紙漉桜吉」は安倍郡美和村（現、静岡市）足久保の人間である。「絵日記」の記述から推測すれば、彼ら紙漉職人に対しては、一定程度の敬意がはらわれていたようである。そして、製紙業については、彼ら紙漉職人を中心として、半次郎家の人々が紙漉の仕事を補助する形で、家内工業として行われている。半次郎家では、半次郎、ぬい、さだ、うらという四名の家族労働力を中心に、「下男」一名と紙漉職人一名を雇用して加えた六名による経営が行われていたのである。

(四) 家族経営の分業体制

こうした労働力の構成を持つ半次郎家においては、一定程度の役割分担、分業体制ができあがっている。「絵日記」自体が、半次郎によって統率された家族経営の分業体制の記録とでもいえるべき性格を持っているのである。

まず半次郎であるが、彼は一家の家長としてさまざまなムラ仕事、つきあいをこなすほか、地主・小作関係にある中湯山家や下湯山家との交際の前面に出ている。「絵日記」において「両湯山様」という表現がときどき見られるが、

この表現には半次郎における中湯山家と下湯山家に対する濃厚な関係意識が込められていると考えるよいだらう。親分・子分関係については、半次郎家の場合、下湯山家を親分としていたようであり、そのために、下湯山家の儀礼に半次郎及びぬいが関係していることもある。たとえば、一八九五（明治二八）年二月に、湯山半七郎の孫一の結婚式が行われた際には、半次郎とぬいはその準備から式後の儀礼に至るまで、かなりの労働を割いている様子が「絵日記」からうかがわれる。二月一三日には「家内湯山様へ行下湯山様三ツ目にて赤御飯いた、く也此上にて御酒いた、く也」として、ミツメ（三つ目）に招かれている。また、翌一八九六（明治二九）年七月六日には、湯山一の第一子のオヒチャ（御七夜）に半次郎が招かれ、「湯山一様御子様七夜御祝儀半次郎御酒、半七郎様四代孫だき上ル」と記している。このオヒチャの様子は、掛け軸の前に御神酒が置かれ、半七郎と思われる人物が赤ん坊を抱いた絵として描かれている。

半次郎の労働は、家内におけるあらゆる労働にかかわっているとよく、水田のみならず畑地における小麦、蕎麦、サツマイモ、稗、粟、陸稲、小豆などの種まきから収穫まで、また「こい」と記された肥料をめぐる労働、「真木」、「焼木」と記された薪、燃木をめぐる労働も行っている。半次郎以外は、ほぼ分業体制ができていたと思われるが、半次郎は、たとえば、「下男」とともに「こい」もかつげば、「真木」や「焼木」も小荷駄につけ、そのときどきの重要な仕事、あるいは労働力が不足した仕事を、他者とともにに行っているのである。そして現金にかかわることからの中心は、半次郎である。三島等での買物は半次郎が行い、紙漉職人への金銭の支払いも半次郎が指揮している。金銭の管理も半次郎が家長として統率していたといつてよいだらう。

これに対して妻のぬいの労働は、「絵日記」からうかがわれる範囲では、きわめて単純である。水田や畑地での農作業もあるが、ほとんどが「紙壳」である。得意先があつたのであろう、須山、御殿場を中心に、御宿より北方の地

域への「紙売」の行商に赴いている。荷物を背負いおおむね徒歩で行商に行くぬいの姿が、「絵日記」には頻繁に登場する。但し、「絵日記」を丁寧に読むと、「紙売」にはぬいだけが出かけたわけではなく、半次郎も頻繁に売りさばいている。半次郎の場合は、石脇、佐野、下土狩、惣ヶ原など御宿より南方の地域が多く、おそらく半次郎とぬいの間には「紙売」担当地域をめぐって役割分担があり、御宿より北方がぬい、南方が半次郎という形態ができあがっていたのではないかと思われる。

半次郎・ぬい夫妻の三女で半次郎家を継承したさだと、四女で嫁する前のうらの労働は、母親のぬいとは対照的である。さだとうらはぬい同様に水田や畑地での農作業も行っているが、彼女たちの場合は「紙売」に行くなどして金を扱うことはほとんどなかった。農作業においても、頻繁に「稲こく」と記される稲をはじめとするさまざまな農作物の脱穀作業は、さだとうらの分担であったようであり、また、堆肥とされたりサツマガラに利用される落葉集めも、主にさだとうらが行っている。「木之はかく」と頻繁に記されているのがそれにあたる。また、製紙業関係では、「紙草式釜にる」、「新文にる」などの紙漉の準備段階の行程はさだとうらが行っている。

半次郎家における家族構成員、半次郎、ぬい、さだ、うらの役割分担は、およそ以上のようなものであるが、彼らの労働内容をこうして整理してみると、そこには、当時の農作業においてもっとも基本的な、馬を使役する労働が欠如していたことがわかる。もちろん、「紙売」など売買関係の運搬において、馬を使役することは少なくない。「絵日記」から判断すれば、半次郎家が馬を一匹飼育していたことは確実であるが、家族構成員が馬を使役する労働に従事することが少ないのである。

それでは、誰がそうした労働に従事していたのかというと、そこに、常時かならず一名は雇用されている「下男」の存在が浮かび上がってくるのである。「絵日記」が現存する一八九五（明治二八）年から一九〇一（明治三四）年



写真6 田植え (明治31年6月13日)

われている。しかし、田植えの時期の農繁期だけは労働力が不足するのであろう、結いと推定される形態によって労働力を獲得し、集約的に労働力の投下が行われている。たとえば、一八九八(明治三一)年は六月一三日と二〇日の二回に分けて田植えが行われているが、一三日の場合には、合計四名が他家から手伝いに来ている。具体的には、次のような記述である。「東町田植勝又吉藏殿はなどり〇兼吉代かく〇勝又国三郎様おつまさま田植〇上ヶ田勝又喜一殿母様田植〇勝又国三郎殿とねにて田植」。

六月までの七年間に、房吉、長吉、市太郎、兼吉、為吉(うち長吉と市太郎は時期が重複)といった名前を確認できるが、彼らが馬を使役し労働に従事しているのである。このことは、半次郎家の家族構成員に、半次郎を除いて男性労働力がなく、壮年から若年の男性を欠いていたことと大きく関連していよう。男性労働力があれば、経営規模から判断して、「下男」を雇用する必要はなかったのであるうが、家族労働力の不足分を「下男」によって補っているのである。そしてその具体的な労働内容は、草刈、茅刈、薪及び燃木集めとその運搬など、馬の小荷駄を必要とするものであり、そのほかに、肥料関係の仕事も多い。また、雨天には、縄ない俵作りなども行っている。これらのうち、薪と燃木関係の仕事については小農家族の割にはその回数が頻繁であり、単なる家の燃料としてだけではなく、製紙業において必要とされる燃料としての意味も持っていたと考えられる。

半次郎家の日常生活活動は、基本的にはこれまで見てきたような半次郎、ぬい、さだ、うら、「下男」によって行

半次郎家においても、ぬい、さだなどが他家の田植に行っている記述が多く見られるので、田植については半次郎家のみならず当時の多くの家々が結いによる労働交換と労働集中を行っていたものと考えてよいだろう。

こうした農作業のほかには半次郎家の経営を特徴づけているのは、なんといっても製紙業である。製紙業についても季節的断続性はあるものの、常時一名は紙漉職人が雇用され、「紙付ル」と記される紙漉それ自体はその紙漉職人が中心となり、準備段階などについては半次郎家の人々が労働を補助してこの家内工業が営まれている。但し、注目すべきは、一八九九（明治三二）年からは、さだとうらが紙漉の技術を習得しはじめていることで、二六日「紙漉早川安次殿冬紙漉はじめ」、二七日「おさた紙を付けはじめる也」、二八日「おうら用紙つく也」とあり、以後「紙漉安次」とともに、さだとうらが紙漉を行うようになっていく。特に、この時点からは製紙業をめぐる分業体制が明確になっており、売買関係はすでに記したように半次郎とぬいが担当し、三極やしびにまぜる新聞紙についても、主に半次郎が担当している。そして、製紙業に必要な燃料の供給は「下男」の小荷駄であった。

(五) 農業と製紙業

以上、「絵日記」の記述によって、半次郎家の家族経営の実態を、労働の分業体制に即して再構成してみた。但し、このような半次郎家の経営は、その後長期間継続したわけではなかったようである。半次郎の曾孫の勝又順夫氏は一九二六（大正一五）年生まれであるが、順夫氏の記憶の中ではすでに「宮原畑」は所有されておらず、カミヤ（紙屋）というイエナ（家名、屋号）で呼ばれながらも、かつて製紙業で使われていたという道具が残されているばかりで、製紙業は行われていなかったという。遅くとも一九二〇年代前半、おそらくは一九一〇年代には、この「絵日記」で

描かれたような半次郎家の経営が終わりを告げていたように思われる。

たとえば、製紙業をとりあげてみよう。半次郎家の製紙業はあくまで家内工業の域を出るものではなく、製品である紙の販売についても資本主義経済の発達にともなう安定した流通経路を確保していたわけではなかった。近隣のムラに得意先があり、行商によって販売を行っているにすぎない。しかも紙の販売先は、紙の種類としてときどき「茶紙」という記述が見られることから製茶農家であり、ホイ口紙としての利用であったことが推測される。半次郎家の紙生産のすべてがホイ口紙ではないとしても、静岡県中部や西部と異なり駿東郡域の製茶業が大きく発展することがなかった事実を見たとき、半次郎家の製紙業が大きく発達していくための地域的基盤は脆弱であった。家内工業と行商による形態から、それ以上に発達していくための条件が整っていなかったのである。半次郎家の製紙業が在村の自生的産業として生まれてきたことは確実である。しかし、大きく発達するための条件を欠いており、そのために、一九一〇年代、日本の資本主義経済と工業化が急速に進展していく時期に、やがて終焉の時期をむかえることになったのではないかと考えられるのである。

(岩田 重則)

三 勝又家の製紙業

(一) カミヤ（紙屋）半次郎

「絵日記」の主人公である勝又半次郎は、御宿の「カミヤ」というイエナ（家名・屋号）で近隣に知られた紙屋の主だった。三楹を栽培し、紙漉職人を雇用して紙を漉き、それには家内総動員で参加し、できた紙を商うことを生業としていた。「絵日記」にはそうしたカミヤの日常が手に取るように描かれている。また、紙屋業以外のふだんの生活も描いている。半次郎は酒が大好きだったようだ。「日野屋にて酒買う」など、半次郎が酒を買ったり、飲んだり、余所でご馳走になったり、時には飲んだ酒が高いだの安いだの、うまいだのうまくないだのといった酒に関する記述は日記中に極めて多く、酒好き半次郎の人柄の一面が見えてくる。日記のそうした部分は、他人の個人的な生活をのぞき見る感があり、とても面白い。しかし、それだけではこの日記の価値の何分の一も読みとれていないのである。

「絵日記」に記された限りでは、上記にも述べたが、半次郎とその家族の日常生活は紙の原料を栽培し、紙を漉き、出来た紙製品を販売するいわゆる紙屋の仕事で大半占められていたことが分かる。紙屋以外の生業では田畑に関わる農作業、養蚕、年中行事、ムラつきあい、個人的な生活内容等が見られるが、日記全体を通して同家の主生業は何かと言えば、イエナの通り紙屋業であろう。たとえば一八九七（明治三〇）年の正月二日の条には、早くも次のように紙屋に関する記述が登場してくる。「半次郎初商□はじめよ（し）佐野若松屋半紙百丈売○惣ヶ原渡邊恵三郎様へ半紙百丈売○木富様にて尺半紙一メ買・（以下略）」このように正月二日の仕事始めとして、紙を売り、また三島にまで出かけて紙を仕入れるなど、紙屋商売を第一と考えていたことが分かるのである。ちなみに、三島の木富（三島

で瀬戸川製紙場を経営していた紙製造業者の木屋富助宅。半次郎はここでしばしば紙を仕入れてそれを売っている）に出かけたついでに、三嶋大社への初詣もすませている。

天保生まれの半次郎が記した明治期の生活の様子を生き活きと描いた彼の日記の中から何を選んで読むことにしようか。ここでは上記のような理由から、勝又家の紙屋としての生活を読みながら、当地方に伝来した紙製造の歴史や、その技術についての部分を述べてみた。

(二) 北駿の三檜栽培と御宿の紙製造

勝又半次郎が生活した御宿は富士・愛鷹山麓東側のなだらかな斜面上に位置している集落である。地形・地質から、水利が良い所とは言えず、水田よりもむしろ畑作の方が主な農村が散在している。また、御宿は周辺集落の中で、地理的にはほぼ中央に位置する集落で、現在のように裾野市になる以前の旧富岡村時代は、村の政治・経済的な中心地であった。ここ、御宿で、勝又半次郎家があったいづから紙屋業を生業とするようになったかという点について考えてみたい。

静岡県東部、すなわち駿河、伊豆地方で早くから紙漉を行っていたのは伊豆の修善寺で「修善寺紙」が生産されていたことはよく知られたことである。その修善寺紙の由来に関する史料には次のように記されている。

修善寺紙漉上ヶ申候由緒書之事

一 昔西林と申出家御越被遊、文左衛門に末世之為二紙漉候様子為知可申と被仰候而、品々御教へ被遊、紙漉様委細

に御教被成、則行衛不知御失被遊候、其時より紙と申事日本江広り申候と拙者先祖申伝候・・（以下略）・・

〔静岡県史〕資料編 11 近世三

これは、一七〇三（元禄一六）年六月の「修善寺紙漉上げ由緒書」の部分であるが、要約すると「その昔、西林という出家の者が来て、文左衛門に紙漉に関するさまざまなことを教示し、末の世に広めよと言って何処へとも知れず去った。それ以来、紙が日本中に広まった。」と、記されている。歴史的な事実はともあれ、修善寺紙の伝統を継承してきた文左衛門の子孫である三須家に伝わる紙漉事始めの文書であり、江戸時代にはよく知られていた修善寺紙に関する由緒としては興味深い文書と言えよう。三須家にはこの文書のほか、紙及び紙の原料に関する江戸初期の文書が何点か残されている。一五九八（慶長三）年三月の「修善寺紙漉文左衛門手形」には、鳥子草、かんひ、みつまたなどの紙の原料は文左衛門のほかは伐ってはならないとあり、三須家の紙漉独占を認めている。こうした史料から、江戸初期には、修善寺で、紙漉が始められていたことが推測できる。

さて、この古くからの修善寺紙の生産地に、駿河からも原料となる紙草を送っていたという記録が残っている。一七四六（延享三）年一〇月の史料、「紙草三極を荷越売出し差障りにつき駿東郡竈新田の証文」である。次のような内容である。

証文之事

一 紙草・みつまた之儀、古来より上郷二而ハ当村並杉名沢村八左衛門、両村二而郡中之みつまた本元より買集メ、はき皮二仕、豆州修善寺村・立野村両村へ売出し、商売仕来候所ニ、去丑ノ冬中より中山筋七ヶ村村々ニ而、少々つ、はき皮二仕、豆州へ荷物売出し、当村・杉名沢村両村共ニ商売之障りニ成り、殊ニ古来より度々出入ニもおよび、両

村より御願申上、先規より両村へ被 仰付、商売仕来候二付、此度小田原御役所様へお願申二付路用も掛り可申候、拙者共二而出情致、路用等無滞り差出シ可申候、せひせひ御願可被下候、尤右之御願相叶不申候とても、各々様へ御恨二申間敷候、為後日証文仍而如件

延享三寅年

十月十三日

竈新田

籐左衛門（印）

ほか十八名（省略）

同村組頭

甚兵衛 殿

ほか四名（省略）

〔静岡県史〕資料編11 近世三

このように江戸時代中期には、竈新田や杉名沢で（現在の御殿場市南部）三楮を栽培し、はき皮を修善寺まで出荷していた。そればかりか、周辺村々までもが両村の独占権を脅かすまでになっているという文書であることから、三楮栽培がかなりの生業となり得たことを物語っている。この時代、御宿にほど近い上記の周辺村々で盛んに三楮を栽培し、伐採し、修善寺紙の材料として出荷していたことが、いつか次第にその範囲を拡大し、三楮栽培などの紙製造に関する生業の流行が御宿付近にまで及んだであろうことは想像に難くない。

『印野郷土史』（上巻・一九九四年刊）には、産業と特産物の章で江戸時代の北駿（竈新田・川島田・杉名沢・佐野）地域における三楹・楮の白皮製造を述べ、印野における三楹栽培の起源について明確ではないとしながらも、次のような『御殿場市史』掲載の「天保三年（一八三二）に、印野村から御宿村（現裾野市）の伴次郎に五拾駄二拾六両二分一朱の三楹白皮を売っている。この他にも五拾駄以上売ったとある。」という史料を引いている。これによれば、江戸末期には御宿で、白皮を仕入れて、紙漉を行っていた家があったということになる。しかし、史料中の「伴次郎」が勝又半次郎家であるかは不明である。

ところで、現在の勝又家からは、すでにカミヤ（紙漉）に関する起源や盛んに紙漉が行われていた半次郎の頃の伝承を聞くことはほとんど不可能に近くなっている。また、史料や紙漉の道具等も今は残っていない。半次郎の曾孫、現勝又家主人の重夫さん（一九一七年生）から聞いたのは次のようなことであつた。

「ものごころついた頃にはすでに紙漉をやつていなかったが、屋敷内にスキヤ（漉き屋）と呼ばれる瓦葺き・平屋の建物が残っていた。紙漉場であつたと思う。スキヤに付属したクラヤと呼ばれる場所は紙製品置き場だつたようだ。また、現在はもう無いが、近年まで屋敷内には大釜があつた。豆などを煮るために使用していたが、これが三楹などを煮た釜だつたと思う。」

（三） 紙漉の技術

冒頭でも述べたように、半次郎の「絵日記」にはカミヤ、すなわち紙漉に関する記述がたいへん多い。生業として

勝又家の重要な部分を占めていた日常が紙漉であったのだろうと考える。そこで、日記中から拾い出した紙漉に関する語彙から、勝又家が行ってきた紙製造の技術を類推して述べてみる。

1 紙の原料

日記中に頻出するのは「三ツ又」（三楮）である。よく知られた紙の原料となる植物である。ジンチョウゲ科に属し、繊維は細かく、表面がなめらかで、強度はそれほどでもないが、機械漉きに適する原料だとされる。楮や雁皮に比べると歴史は浅く、起源は慶長の頃とも、室町中期とも言われている。勝又家ではこれを栽培し自給していたものと思う。「三ツ又を植える」「三ツ又を切る」などの記述が見える。

御宿における三楮栽培の記録は『湯山半七郎日記』（裾野市史資料叢書）の明治二十二年二月十八日の条に「一、御宿村共有地の畑、字宿頭・字上之原・字・平六澤ノ三ヶ所、三ツ又植附ケ之事」とある。村の共有地に植えるほどであった。日記中にも、上之原、平六澤などの地名が頻繁に登場する。伝承で「現在の富岡中学付近に三楮がたくさん自生していた」と聞いたが、これなどもかつて村を挙げて植え附けた名残であったのだろうか。

「三ツ又」のほか、「しび」「新文紙（新聞紙）」などが紙の原料と思われるが、これについての詳細は日記からは想像できない。しかし、「しびを焼く」、「新文紙を買う」のように一般の農作業にはない作業用語からカミヤ作業と想像される。原料としての用語に「紙草」とあるのは、上記のような種々の原料を総称してのことであろうと考えられる。「紙草をこく」「紙草を煮る」「紙草をさらす」「紙草をもむ」等々。いくつかの作業段階の中で、原料としての「紙草」が頻出する。



写真7 「三ツ又はぐ」
(明治28年2月25日)

2 皮の製造工程

天保年間に三楹の「白皮」を印野から買ったという記録もあったように、原料の三楹などは刈り取った後に、まず皮に加工する必要があった。それには次のような工程がある。

蒸す 刈り取った原料は長さをそろえて束にして、蒸気で蒸して、剥皮を容易にする。一時間から二時間蒸すと、上の皮が剥げて、中の白い部分が見えてくる。

「絵日記」中には「紙草を煮る」とあるのは、この工程であろうか。半次郎独特の表現で「蒸す」を「煮る」と記したものととも考えられるが、後に行われる工程に白皮を煮る作業もあるので断定はできない。この作業に必要な設備や道具は、竈、大釜、蒸し桶などである。一九〇〇(明治三三)年三月三日の絵日記には、娘のおうらと半次郎が、蒸し桶を載せた竈の前で作業する風景が描かれている。皮剥き 蒸し上がった原料は釜から出し、皮を剥ぎやすくするために水をかけ、冷えない内に手早く根もとから外皮を剥ぎ取る。

「絵日記」には「三ツ又をはぐ」あるいは「三ツ又はく」などがある。上記した三月三日の竈前の絵で、娘のおうらと思われる女性が作業している風景がこの「皮剥き」であろう。

干す 剥ぎ取った皮は束ねて、棹にかけて二、三日天日で干す。これを黒皮と称する。水に浸けておく 黒い皮のままでは紙は漉けないので、これを取り除くために、半日から一日水に浸け、黒皮をと

りやすくする。

黒皮をけずる　水からあげて、厚い板の上で包丁で押さえて手前へ引き、黒皮を取り除く。白皮となる。

天保年間に印野から買ったという「白皮」は、このような状態になったものを買ったものと思われる。

白皮のあくだし　白皮を半日ほど水に浸けて、柔らかくしてあくを出す。

煮る　白皮を一本一本ほぐしながら大釜に入れていき、灰汁といっしょに一時間くらい煮る。煮終わったら、火を落とすし、ふたを閉めて数時間蒸す。絵日記にしばしば出てくる「かきはい（を買う）」は、この時に使用したのであろう。

川ざらし　蒸し終わったら白皮についている灰汁や汚れをよく水洗いし、混じっているゴミを拾い出す。白くするには、川の流れの中でさらしながら白くする。和紙独特の良さを出すには、川ざらしが一番良いとされる。

絵日記には「紙草をさらす」とか「さらしばにて紙草を上げる」（一九〇〇年二月六日）などと記されている。後者の絵は裾をまくって水に入り、腰を折り曲げての作業風景である。寒風のなか、つらい仕事であったようだ。

3 繊維を作る

いくつかの工程を経てできた白皮を加工して繊維を作り、いよいよ紙漉の前段階となる。

たたき　そのままでは長すぎる繊維を短く切って、玉にしたものに水を加え、平らな石か厚い板の上で、たたき棒でたたき。たたき内に繊維はしめった綿のようになり、これが水の中で一本一本の繊維に分かれるようになる。



写真8 「紙を漉く」三郎平と「こい(肥)出す」
娘たち (明治29年8月14日)

4 紙を漉く

長い準備段階を経て紙漉となる。もつとも技術を要する工程であり、これには専門職人を頼む。明治三年の日記中にしばしば登場する「紙漉安次殿」が紙漉職人として雇用されていた。

漉く 水を入れた漉舟の中へ繊維とネリを入れ、馬鋏でよくかき混ぜ原料を作る。液は、米のとき汁のように白く濁ってくる。竹の簧をはさんだ漉桁で、漉舟の中から原料を素早くすくい上げて、前後、左右に何回もゆり動かす。すると、余分な液はわくからこぼれ、水は簧を通って漉舟に流れ落ちる。繊維は、ゆり動かされるので、平均して簧の上に広がって残る。この作業を繰り返すうちに繊維は重なり、紙の厚さが出てくる。

5 製紙の最終段階

紙漉が終われば、これを絞り、乾燥させて紙とする最終工程に入る。次のような工程がある。

絞る 漉き終わったぬれ紙は、簧といっしょにしき板の上へひっくり返してのせ、簧からはがす。

次のぬれ紙がくつついて離れなくなることはない。これが何百枚にもなると、重石をして水を絞る。

干す 水を絞った紙を一枚ずつ細い棒に巻き付けながら剥がして、張り板(干し板)に張り付けて乾かす。張り付けるときは、繊維に沿ってはけで軽くなぜつける。張り板の表と裏の両側に張られたぬれ紙は、晴れた日なら一時間

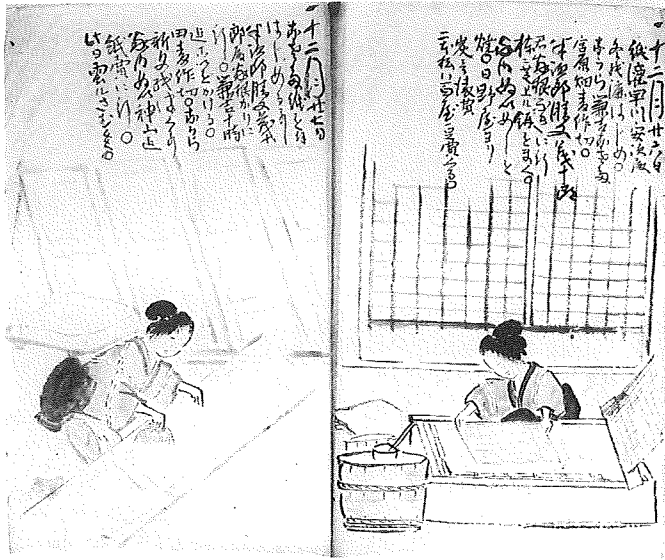


写真9 右「紙を漉く」左「干す」(明治32年12月26日、27日)

くらいで乾燥する。

一九〇〇年三月一二日の「絵日記」には、「張り板」にはけを使いながら紙を貼る風景が描かれ、「此日紙を五百枚付るなり」という記述がある。干す作業を描いたものである。

裁つ 破れや、悪いものを除き、必要な大きさに裁ち切る。紙は、台木へのせ、定規をあて、鎌あるいは包丁で裁ち切る。

「絵日記」には「紙を切る」という記述で頻出する。

製品が完成する張り合いのある作業であったろう。

*製紙工程の参考文献「紙漉大概」(大蔵永常・1836刊)、「手漉きの世界」(富士市立博物館第4回企画展「紙」図録・1982刊)、「和紙を作ろう」(富士市立博物館体験学習テキスト)

以上のように、実に多くの工程を経て勝又半次郎家の「紙を付ける」(半次郎独特の言い回しと思われ、紙を作る、紙を漉くなどと解釈できる)作業は完結する。それ

は戸主半次郎を中心に、娘たち、専門紙漉き職人を含めての家族総動員態勢での紙屋業であった。

そして、製品となった紙は「半紙を売る」という記述に見られるように、地元はもとより御殿場方面まで売りさばっていた。売る担当は、主に半次郎の妻ぬいの役割だったようである。

(杉村 齊)

四 絵日記に見る民俗

(一) 旧暦から新暦への移行

1 新旧暦の行事の混同

この「絵日記」に描かれている一年間の行事は、現在市域で伝承され続けられている行事とは必ずしも一致しない。当然のことではあるが、あるものは時代の流れにならって変容し、あるものは失われてしまっている。しかし、この日記から読みとれるのは、現在かろうじて聞き取りができるかつての行事が、約一〇〇年前の御宿では確実に行われていたという事実である。

この「絵日記」は基本的には新暦で記述されている。しかし、太陽暦が採用されるようになった一八七二（明治五）年までは、いわゆる旧暦と呼ばれる太陰太陽暦を使ってきたため、改暦から二〇年以上経ても半次郎の周囲では様々な混乱が見られる。日記は、毎年新暦の元旦から始まっており、一年のサイクルはそれに従ってめぐってはいるものの、たとえば、正月の年始の挨拶を二度行っていたり、一つの行事であったはずのものが一か月おいて再び繰り返されたりしている。また、新暦で行っている行事と旧暦で行っている行事の使い分けも若干見られるようである。具体的には、どのような行事が新暦で行われ、どのような行事が旧暦と混同されて行われているのか、見てみよう。

まず正月行事であるが、御宿では元旦と小正月は新暦で行われている。従って、正月の年始や年玉は親しい人たちの間の中で交わされ、小正月には餅をつきサイト焼きをして無病息災が願われる。しかし、正月を旧暦で再び祝う習慣も残っている。一八九五（明治二八）年には半次郎自身が檀那寺の仙年寺へと年頭の米を持参し、そのほかにも



写真10 旧正月元日
(明治31年1月22日)

一九〇〇(明治三三)年には上ケ田へ、一九〇一(明治三四)年には新田へも年始の挨拶に足を運んでいる。また、佐野の杉山弥七郎や伊豆島田の水口伝吉が半次郎宅へ年始の挨拶に来ることもあった。つまり、正月はムラの申し合わせで新暦で行い、個人的には旧暦で行っているわけである。新暦で済ませることができない意義が、正月行事には残されていたのであろう。

ところで、立春から数えて八八日目に八十八夜、同じく二一〇日目に二百十日がある。この立春が、日記ではしばしば「正月元日」と記述されている。春の節分のことを、県内各地でも「年越し」あるいは「年取り」と称することが多く、半次郎に限らず正月との混同が見られる。「絵日記」では、正月は新暦、旧暦、立春と三度繰り返し、書き分けられているのである。

新暦で行われている行事の一つに、御宿の神社の祭りがある。九月一四、一五日は御宿八幡神社の祭り、それに引き続き九月一六、一七日には入谷組でまつる山神社の祭りが行われる。なお、本資料に掲載した一九〇七(明治三〇)年の記載では、八幡神社の祭りが一〇月一、二日となっているが、おそらくこの年のこの時期に赤痢がはやったために日延べになったのであろう。

2 旧暦で行われている行事



写真11 鳥居参り (明治31年3月20日)

図表3は、「絵日記」に見られる半次郎家の旧暦行事一覧である。このほか、ムラやその周辺で旧暦で行われる行事は、新田の子ノ神社の祭り（現在も一〇月初子の日に行われている）や石脇の八坂神社（現三島神社）の祭り、金比羅講や秋葉講、山の神講、大山講などの講、大日如来縁日、十夜念仏、日蓮上人連夜、地藏尊縁日などの仏教行事があげられる。そして、新暦で行われる行事がムラの神社に関わる行事であるとすると、旧暦で行われる行事はイエの年中行事が大半を占めている。その代表格は、先祖をまつる盆行事である。現在、富岡地区の盆は、七月二三日から二五日にかけて行われている。しかし、この「絵日記」当時には、旧暦の七月一三日から一六日にかけて行われ、一五日には仙年寺の施餓鬼会、一六日には閻魔大王の祭りが催される（一八九六年）。一八九七（明治三〇）年には、三嶋大社の祭りの花火で心経寺が焼けたという記述があることから、大社の祇園祭も当時旧暦で行われ、御宿の盆行事と同時期であったことがわかる。

さらに、月待ちや日待ち、節句などの行事も旧暦で行われている。十五夜や十三夜は現在でも旧暦で行う習慣が残っているが、このほかに御宿ではすでに失われた行事として二十三夜講がある。かつて、二十三夜の月を待つ様々な祈願をすることが全国各地で行われていたが、二十三夜待ちは特に女性の信仰があつく、半次郎の母も夜半過ぎに出る月を拜んで祈願をしている。また、正月・五月・九月の節句も半次郎家には欠かせない行事であっ

た。五月の節句は、現在でこそ端午の節句としての意味あいが強いが、五月四日は「家根フク」、つまりモチ草やシヨウブなどを屋根の軒に挿して禊ぎ祓いをする日として、毎年厳肅に守られ続けられている。この日は県内でも「女の家」と称し、田植え前の早乙女が物忌みをする日であると考えられていた。三島市周辺では、節句の前夜にモチ草とシヨウブを戸口に挿して蛇よけとし、さらにカヤとシヨウブを束ねて屋根の三か所に挿しておく。これを「女の家」と称していたという（富山昭『静岡県の年中行事』）。

今一つ、旧暦の行事で確認できることは、春と夏の行事が対をなしているということである。春彼岸中日と秋彼岸中日の鳥居参り、一月二〇日と一〇月二〇日の恵比寿講、二月八日と一二月八日の目一つ小僧伝承である。彼岸中日の鳥居参りは、この日に年寄りが七か所の鳥居をくぐると長生きでいられるという信仰が駿東地方にあり、半次郎は春と秋の両日にその祈願を欠かさず行っている。また、目一つ小僧は伊豆では二月に穰ぎにいつて一二月に帰るといわれ、その際にそのムラの人々の行状を記した帳面を道祖神に預けるので、サイト焼きの火で道祖神ごとその帳面を焼いてしまおうという言い伝えがある。市域でも、深良では二月八日に目一つ小僧が山から下りてきて外に出してあたる履き物に判を押し厄をつけていく、と信じられていた。半次郎もまた、泣く子どもを目一つ小僧という鬼が連れていく、としきりに記している。須山では、この日軒先に目籠を立てその目の数の多さで妖怪を追い払おうという習慣があった。いずれにしても、この日はコト八日といわれ、鬼や妖怪が彷徨する厄日であり、人々は外出をさけて厳肅に物忌みをする日であった。

ところで、県内ではこの目籠立てを、節分に行う地域と八日節句（二月と一二月の八日）に行う地域とに分かれている。半次郎が記しているように、本来は八日節句に行うものであったが、静岡県中、西部地方とそれに隣接する愛知県の一部では節分に行われている。これらの地域は、コト八日の厄神送りのさかんな地域でもあり、八日節句の目

旧暦月日	行 事 内 容
1月1日	正月元日（仙年寺行白米壺升五錢上ル1895・上ヶ田正月也勝又大吉君半次郎年しに行酒をいた、くなり1900・半次郎新田へ年しに行1901）
1月2日	後九時二十九分正月せつ也（消防方橋子のりある1898・勝又茂十郎様家ひまちニ半次郎行酒をいた、くなり1901）
1月6日	（佐野杉山弥七郎様年志ニくる1895・伊豆島田水口伝吉様年しニくる1900）
1月20日	恵比寿大黒天祭
2月初午	初午祭 豊作半次郎葛山宮川瘡守稻荷大明神へ行
2月8日	（めーツノ鬼がなくこ付て行1898）
3月2日	（ひな様へ上ル餅作よむき草ノ花餅ニ入ル百病薬なり1898）
3月3日	鄙祭
4月8日	（千はやふる卯月八日ハ吉日よ神さげ ^(虫) をせいはい ^(ママ) とする1895）
5月1日	（新小麦うどんを神様へ上ル1898）
5月4日	（家根フク神へ酒上ル祭1895）
5月5日	あけた五月せく
7月7日	七夕祭
7月12日	富士薬師如来祭
7月13日	仏祭（仙年寺行墓ニ花立1896）
7月14日	半次郎母様南無阿弥陀仏（石脇大庭嘉吉殿盆ニ行1896）
8月6日	（半次郎父待夜母様南無阿弥陀仏1898）
8月15日	十五夜様祭
9月9日	半次郎村社まいる1898）
9月13日	十三夜月祭事
9月23日	（廿三夜月祭・徳大世師菩薩此夜祭月祭○半次郎母八十三才廿三夜月をかむ1898）
10月1日	（神々祭事1896）
10月初亥	初亥日 祭なり（ぼたもちを上ル神々祭1896）
10月20日	えびす大黒天祭
10月30日	（葛山上内田ヨリ御せくいた、く1896・御ひまちノ餅をいた、く1899）
11月15日	秋せく神ニ祭なり（半次郎村社八幡神社まつるなり1899）
12月4日	此夜月さまへ豆腐壺丁上ル
12月8日	（なく子めひとつ子そうつれて行なり1900）

図表3 半次郎旧暦行事一覧 ※1897（明治30）年をもとに作成。（ ）は同年以外の記載。

一つ小僧と節分の鬼の混同が一つの行事に結びついて混乱をしている可能性がある。なお、節分と八日節句の境界はおおむね富士川流域と考えられている（前掲書）。

（松田香代子）

（二）日記に見る病氣とその治療

1 記録される病氣

「勝又半次郎絵日記」の特色のひとつに、病氣とその治療や対処についての記述が多いことがある。それは単に闘病記録というのではなく、日常の生活における病氣とその対処を淡々と書き留めたものである。医者、あんま、鍼灸、湯治や民間療法の類、加持祈祷、病氣見舞いのやりとりなどが、絵をまじえて綴られている。

また、ここに収められた一八九七（明治三〇）年は、富岡村で赤痢が流行した年で、御宿の伝染病予防対策の一端がうかがえる。さらに同年に跡取り娘のさだが「ろくまく忌病」つまり結核にかかり、治療を受けている。結核の治療については明治の作家などによる記録や公式の文書がいくつもあるが、都市の先進的な治療であったり特殊な例であることが多く、一般の人びとの様子はなかなか見えてこない。この日記からはそのころ人びとが結核をどうとらえていたのかを伺い知ることができる。

記述そのものは、半次郎自身のための簡単な覚書であって、裏付け資料も乏しいため、ひとつひとつの事柄についての事情や登場人物の詳細はよくわからない部分が多い。しかし、全体として捉えるとき、明治半ばの庶民が日常の中で病氣に対処する姿が浮かんでくる興味深い資料となっている。

2 伝染病の流行と予防対策

一八九七年の赤痢の流行は、半次郎が初めて「村社八幡神にて村方病仕会ある」と書いた八月二十二日よりかなり早い時期に始まっている。『裾野市史』資料編近現代Ⅰ（以下『市史近現代Ⅰ』）の「富岡村赤痢発生」によると五月二〇日上ヶ田の女兒に赤痢が発生し「爾来追々蔓延ノ兆アリテ本日二至ル。御宿、葛山ニ伝染シ目下捨名ノ患者ヲ見ルニ至ル」とある。「本日」は六月一日である。そして、予防法に注意し、特に飲料水流に種々の汚物を捨てることには注意するようにながしている。にもかかわらず赤痢は蔓延し、八月十日には御宿の児童が通う岳南尋常小学校をはじめ、下和田尋常小学校、須山尋常小学校の三校が赤痢流行の方向こう二週間休校にすることになった（『市史近現代Ⅰ』）。

半次郎たちは九月一日に予防詰所に集まり、三日に「染病予防委員」の詰所出張日割表をつくって活動を始める。御宿は一八七七（明治一〇）年にコレラが猛威をふるうなど伝染病が何度も流行していることもあって予防に対する村の組織ができていたのである。一八七七年に御宿で書かれた「虎列刺病予防日記ならびに諸用帳」（『市史近現代Ⅰ』）で伝染病に対する予防法をみると、飲料水によって伝染するので川に汚物を捨てないこと、捨てた事があるようならば下流の者は必ず煮沸してから用いること、各戸それぞれに消毒をすることなどが記されている。この度の赤痢でも飲料水には心を配り、村方病仕会の翌日には黄瀬川からの本堰と新堰をとめ、出張日割表をつくったその日に用水を止めている。委員が「赤痢内まわる」のは、赤痢の出た家に縄を張り、予防消毒に行くのであろう。四日には「勝又国太郎妻おふさ赤病二付詰ヨリ予防方行」、六日に「湯川為蔵妻」「牧野さわ」に半次郎ら予防委員が行っている。これらの家には十二日と十三日に「赤痢繩とる」記述があり、一応の終息をみている。翌十五日に詰所で村祭りの話をしたところで赤痢の記述は終わっている。

3 結核への対応

さだの病気は、ちょうど富岡村で赤痢が流行しはじめた六月二日に記述が始まっている。それ以前にさだの不調を思わせる記述はまったくない。このころはまだ結核は都市に多い病気で、地方には原因や病気そのものについての知識があまり広まっていなかったと言われる。そのため初めは軽い風邪と考えられがちで、咯血してそれに気づくことが多い。さだの場合も、突然医者を迎えに出ている記述で始まるのは咯血のような病変があったのであろうか。

半次郎家によられた医者は、深良病院の瓜生様は瓜生駒太郎という。西洋医術を用いる医者ではなく、薬と鍼によってさだの治療をおこなっている。佐野の岩崎様も同様のいわゆる漢方医である。この兩名によって「ろくまく忌病」と病名が定められ、九日役場に届けられた。十一日「役場半次郎隠居繩はる」のは赤痢と同様である。この場合は予防委員ではなく役場が来ている。赤痢のように急変する伝染病とじわじわと広がる結核は対応が違っていたのである。さだは半次郎の隠居に家人と離れて寝ていたと推測される。

さだは瓜生様の鍼で痛みが去り、二日後に再び鍼治療を受けて「病さめる」。起きあがるようになった翌日、「役場ヨリ」の通達で御宿の人が五人来て畳をあげ、ふとんを外に出し、「よき(夜着)き物ふか」している。消毒に来たのである。さだはこの後一か月ほど療養を続ける。

決定的な治療法のなかった結核は、全国的に加持祈祷やさまざまな民間療法が試みられていた。さだの場合も、親戚が三島大社で「ご祈祷神楽」をあげたり、大山に行つて「二皇滝祈祷」をしている。皆が自分にできる看病をし、効くといわれるものはすべて試みている。快方に向かってから見舞いとして二十三日に砂糖、七月八日に三盆白砂糖をもらっているが、砂糖は水で溶いたものを単舎利別と呼んで、明治期には薬剤のひとつとして処方されていたものである。また、二十四日に「三島ち屋ヨリ」とあつて、二十一日から二十九日まで△と○印がついているのは、牛乳



写真12 さだ鍼医にかかる
(明治30年6月10日)

4 病院と医者

「絵日記」の中には、病院が三か所、医者が七名登場する。年毎に登場するものを追うと次のようになる。

一八九五(明治二八)年 深良病院 瓜生駒太郎

一八九六(明治二九)年 朝日病院・富岡病院 朝日倉

吉

一八九七(明治三〇)年 (二本松)三好/(佐野)岩

崎/深良病院 瓜生/(?)病院 美野部

をとったと思われる。△が五勺で○が一合である。ち屋は乳屋であろう。市域では乳牛を「ちうし」というし、一八九八(明治三一)年の三月に茶畑の「ち屋」から牛乳をとったという記述がある。三島には花鳥という大きな牛乳生産者があり、後にはコンデンスミルクなどをつくって手広く商売をしていた。牛乳は栄養がつくといって、明治のこの時代に結核によいとされていた。西洋医学をおさめた医者もすすめたもので、結核の療養で毎日無理にでも飲んだという記事は多い。「朝日倉吉君ヨリ桜ふとう酒いた、く」ことが二度ある。全国の結核の民間療法を収集した記録の中に「にんにくとぶどう酒」が出てくる。朝日倉吉は富岡病院に関係している医者である。

ところでさだの結核は、おそらく非常に初期であったか、そこまでの病気ではなかったのではないだろうか。どんな名医であつても鍼で結核がこれほど劇的に治るとは考えにくい。さだは七月にはもう製紙の仕事をし、畑の仕事も九月には十分にこなしている。一九〇〇年までの日記の中には再びさだの不調を思わせる記述は出てこない。

一八九八（明治三一）年 佐野原病院 大出／深良病院 瓜生

一九〇〇（明治三三）年 （富岡）病院 相良（佐賀良も同じ）／三好

一八六九（明治二年）に、政府は西洋医学を採用することを明らかにし、一八七四（明治七）年に医制を定めて医師開業を実施することを決めた。ただし、それまでに開業している者は試験を受けなくても医師を続けられることになつており、明治九年の時点で開業していた者はその一代限り認められた。これを従来開業医といい、その大半は漢方医だった。漢方薬を使い、鍼や灸をほどこして、今でいう東洋医学である。市域でも、さだが病気になる一八九七年では医療環境は政府のいうところの近代化はされておらず、漢方医がほとんどだった。

日記に登場する医者のうち、朝日様と瓜生様は治療に鍼を使っている記述があり、従来開業医であることがわかる。三好様は「湯山半七郎日記」にも登場する医者で、湯山家は三好様を主治医にしていると思われる。三好家はその後長く佐野二本松で医院を開業し、近年まで続いていた。美野部様は診察の絵で聴診器を使っており、西洋医学を学んだ者であろう。

静岡県では、町村の衛生機構を補うために一八九七年に市町村医を置いた。富岡村では一八九九年に「医師相良正保ヲ村医ニ選任」した資料（『市史近現代Ⅰ』）がある。村医は一年任期で、富岡病院を住まいとし、村内の住民の診察、往診、種痘を無料で行うと定められている。

5 半次郎の治療法

最後に半次郎自身の病氣とさまざまな対処法や病氣見舞いのやりとりを、収録されなかった部分を含めて見ていくことにしよう。図表4は一八九五年、図表5は一八九六年の日記から抜粋したものである。これだけを見ても、半次

郎はひとつの不調に対して、あんまにかかり、医者に行き、灸をすえ、蛭に血を吸わせるなど、いろいろなことを試している。また、先述の医者と病院をみてもわかるように、一人の医者にかかりきりではなく、いろいろな医者にみてもらっている。

あんまは日記中に三人が認められる。ここに描かれた静岡市のあんまのほかに、石脇の植松あんま、郡内吉田の川口あんまである。植松あんまは鍼も打つ人で、半次郎は頻繁に利用し、妻のぬいもこのあんまに鍼を打ってもらっている。家まで来てもらうほか、栄橋湯（石脇の湯屋）でかかることもできる。図表4で初めにたびたびかかった「あんま」はこの植松あんまであろう。どういいうわけで静岡市のあんまにかかったのかわからないが、酒を飲ませたり食事を出したりしてもてなしたようだ。静岡市のあんまはこのとき一回出てくるだけである。何度もあんまを頼んだあげくに医者にかかり、どうやらおさまったようである。



写真13 黒い血出る（明治29年8月6日）

一八九六年に朝日様が患部から悪い血をとっている治療は、いろいろの病気に対して古くから行われた代表的な治療法である。このときの半次郎の足病みは治療の絵などからこの時代に多くの人がかかった脚気ではないかと考えられる。この治療では血がとりきれなかったように、足病みは続き、ぬいに捕りにやらせた蛭に血を吸わせている。蛭に血を吸わせる方法は、西欧でも一九世紀には医療処置のひとつだったもので、日本では近年まで民間療法としておこなわれていた。



写真14 半次郎眼の病になる
(明治31年6月25日)

八君にて弘法大師ノ行者ニ灸をだして」もらっている。これは、無病息災を願うとか、風邪をひかないといわれて、集落ごとに交代に宿を決めて皆が集まって灸をすえてもらったものである。今では集まる人も少なくなって、旅館など決まった場所に広い範囲の人が集まるようになった。

半次郎は疝気であった。疝気には腰痛がつきものである。そのためにあんまや鍼をよくしたのであろう。また、半次郎は実に頻繁に湯治に出かけている。図表5の記述のあととも九月二十六日から十月二日まで箱根の姥子温泉に孫の豊作をつれて出かけている。他日の記述でも姥子に出かけると一週間くらいは滞在している。裾野市域には農作業がひとくぎりつくと「湯に行く」風習が今も年配の人びとのあいだには残っている。婿を亡くした半次郎は当主として責任を果たしているが、農作業については主力ではない。半次郎がよく行くのはこの姥子と石脇の栄橋湯で、たまに修善寺にも出かけている。姥子の湯は眼病にも効くといわれ、一八九八年六月二十九日の日記には半次郎が姥子の湯

中之郷村桜井戸（現清水市）の灸は一带に有名で、長く近在の人びとの信頼を集め、「桜井戸の灸」といわれた。このあたりは漢方がさかんで、明治の医制がしかれたのち、これに反発した漢方医たちが公立漢方病院をつくった土地柄である。半次郎は自分でも灸をすえるし、ぬいにもすえてもらっている。一九〇〇年二月十七日に「腰ヨリ足病ム」ので自分ですえているのは、絵から足の三里というツボであることがわかる。特定の病気に限ったことではないが、一九〇〇年四月二十二日に「外川彦

五月十四日	半次郎頭病にてすやめる (ママ)
二十日	半次郎頭病にてやめる
二十二日	半次郎あし之いび (足の指) いためる此病にて休也
二十三日	半次郎頭病にてあんまにかかる
二十四日	半次郎頭病にてやすむ也
二十五日	半次郎頭病にてあんまにもませる事
二十六日	半次郎病にてやすむあんまにもませる也
二十七日	半次郎病にて静岡市あんまにもませる也○此あんま酒吞めし喰
二十八日	半次郎頭病にてやすむ
二十九日	組長湯山様ら申渡ある此代り勝又角太郎殿たのむ也○半次郎頭病にてやめる ~~~~~
六月一日	半次郎病にて勝又市太郎様ら病見舞にて大あし魚 (鱒) 貳本いた、く也○勝又おゑい様ニ病見舞ニかし壱箱いた、く也
二日	半次郎病にて深良病院瓜生様半次郎御むしんニ行御薬水やく二日分いた、く也

図表 4 半次郎の治療法抜粋 (明治28年) () 内筆者注

七月三十日	半次郎あしをはらす休事
三十一日	半次郎あしをはらし朝日様にて水薬いた、く事
八月四日	半次郎足はらし此病にて朝日様ニみる事
六日	富岡病院にて半次郎足はらし朝日様針する此針にヨリ黒ち出る事
八日	半次郎足病にて朝日様かうやく (膏薬) 一見金五銭買
十日	半次郎足いたむニ付江尻生中之郷村桜井戸へ行土屋滝蔵勝又角太郎勝又喜市勝又国太郎勝又奥次郎此五名君佐野原迄佐野原ヨリ十時三十分キ車ニ江尻迄行中之郷桜井戸後一時にて灸出し事江尻ヨリ桜井戸上下△ [] 車ちん四銭払江しり後二時五十三分キ車佐野原迄ニ四時十分分付
十三日	半次郎足ヨリうみ出る事
十五日	家内茶畑へ蛭とりニ行○半次郎足ニ蛭たける
二十八日	半次郎足いたむ

図表 5 半次郎の治療法抜粋 (明治29年) () 内筆者注

で目を洗っている絵が描かれている。

湯治に行けないときは、家の風呂を薬湯にしている。一九〇〇年一月から疝気で腰が痛み石脇のあんまが鍼を打ち、翌日には「栄橋植松伯父様ヨリ湯入ル葉」をもらう。その日から連日薬湯をたて、家の者はもとより隣人も誘い、上ヶ田へ嫁いだけでも入りに来ている。二月十七日には薬湯に「さるとりばら木」を入れている。「さるとりばら木」はサルトリイバラで根茎が薬用になる。半次郎はこれを「疝気の妙薬」と書いている。

最後に病氣見舞いについて少しふれておこう。図表4に出てくる見舞いの「あじ」は珍しい見舞い品で、砂糖、菓子、まんじゅう、現金などがよく使われる。砂糖は前述したように薬の効用があるとされた。半次郎から持っているのは、「おかし壱箱」が二度、現金「二拾銭」が一度でてくる。どういう関係の人が見舞いのやりとりをするのかは、人物が確定できないので残念ながら判明できない。日記を読む限りではつきあいの決まり事で見舞うというのではないようだ。暦を見て日を選ぶことはなく、仏滅や友引でも見舞いに行ったり、来たりしている。

(宮村田鶴子)

編集後記

平成七年に行いました御宿区の民俗調査により発見されて以来、翻刻が待ち望まれていた「勝又半次郎絵日記」を、裾野市史資料叢書の四冊目として皆様のお手元にお渡しできることになりました。

本書の執筆編集は平成九年度に刊行しました『裾野市史』第七巻資料編民俗を担当しました民俗部会が引き続いて行いました。

現存している「絵日記」は十冊で色の滲みや破損がかなりありましたが、その中から保存状態が良く、そのうえ日記が連続している明治三〇年と三三年のものについて翻刻しました。

この「絵日記」は、御宿をはじめとする明治期の裾野において、一般の資料では知り得ることが難しい庶民の暮らしの様子が半次郎の豊かな表現力によっていきいきと描かれており、大変貴重な資料であると言えます。当時の勝又家は製紙業を営んでおり、明治期の家内工業がどのように行われていたのかを知るうえでも、誠に興味深い資料であると言えます。

半次郎の親しみある筆づかいによる「絵日記」を読むことにより、この時代の裾野を楽しんでいただければ幸いです。本書の刊行にあたり、編集執筆をしていただきました福田アジオ専門委員をはじめ民俗部会の各調査委員、そして貴重な資料を提供していただきました勝又重夫氏に改めてお礼申し上げます。編集後記といたします。

平成十一年三月

市史編さん室 担当 木原慎也

担当者

民俗部会

専門委員

調査委員

福田アジオ 神奈川大学教授

岩田 重則 東京学芸大学助教授

杉村 齊 三島市郷土資料館館長

松田香代子 日本民俗学会会員

宮村田鶴子 日本民俗学会会員

事務局

教育部長

市史編さん室長

係長

主事

事務員

同

同

同

三井 満

土屋 勝幹

中野 光

市川 亨

木原 慎也

永野 武信

東條 弘光

今関 裕美

資料提供者

裾野市御宿

勝又 重夫

裾野市史資料叢書 4

勝又半次郎絵日記

平成十一年三月二十五日

編集
発行

裾野市教育委員会教育都市史編さん室

裾野市茶畑三九九

電話 〇五五九一九三二七〇

印刷 大和印刷株式会社

(題字：裾野市長 大橋俊二)